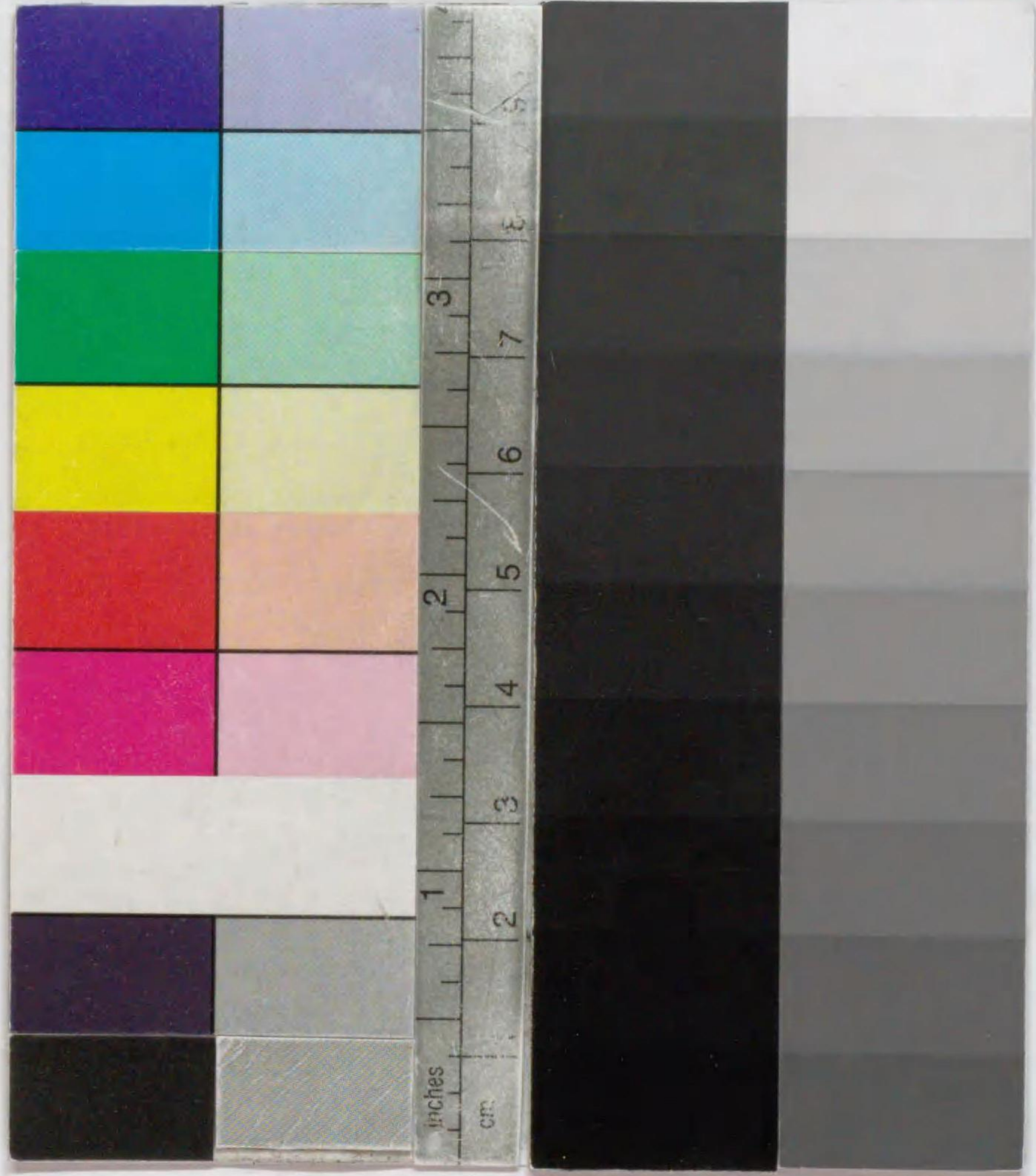
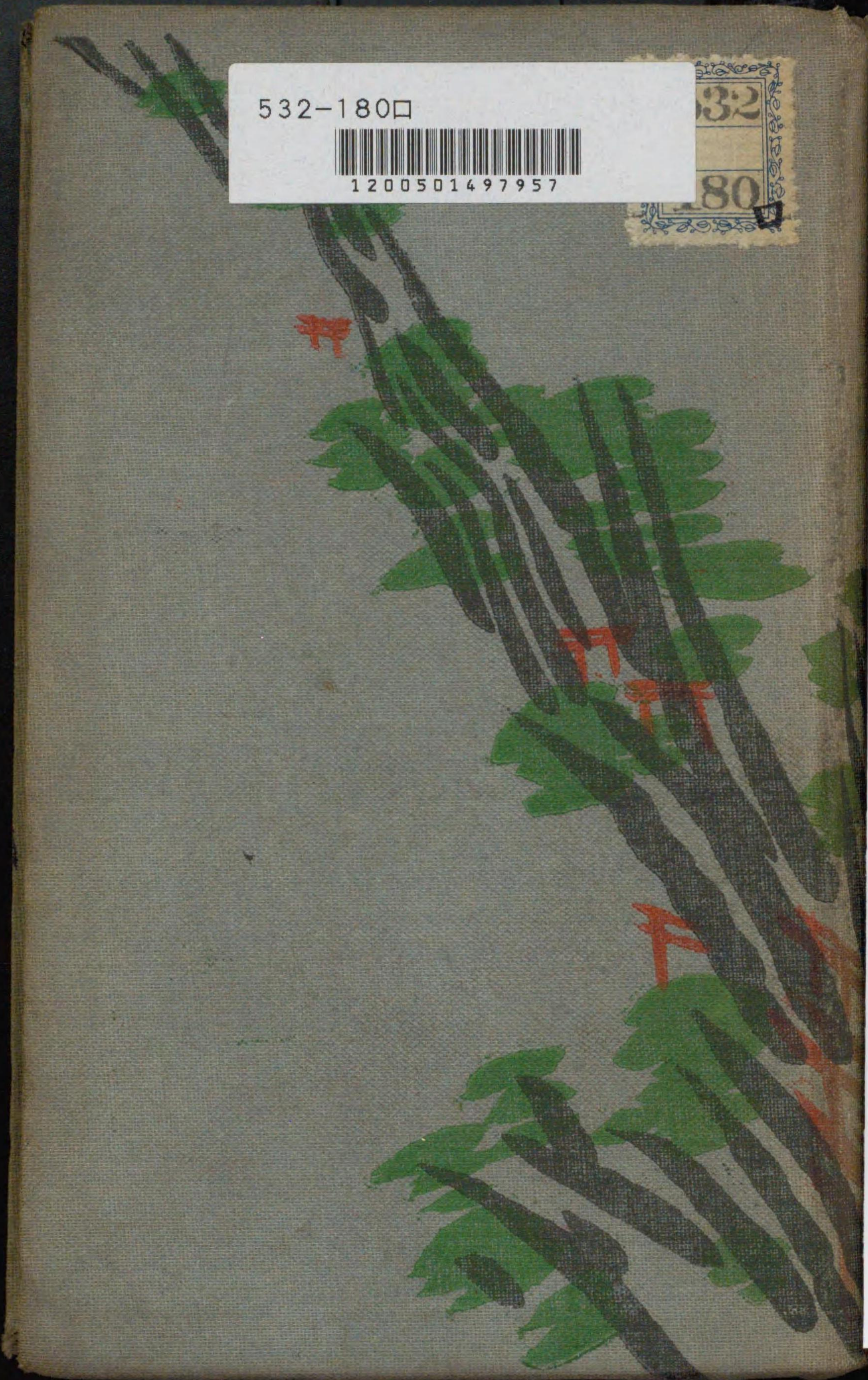


532-180□



1200501497957





399



内

案山登

日本

(昭和八年版)

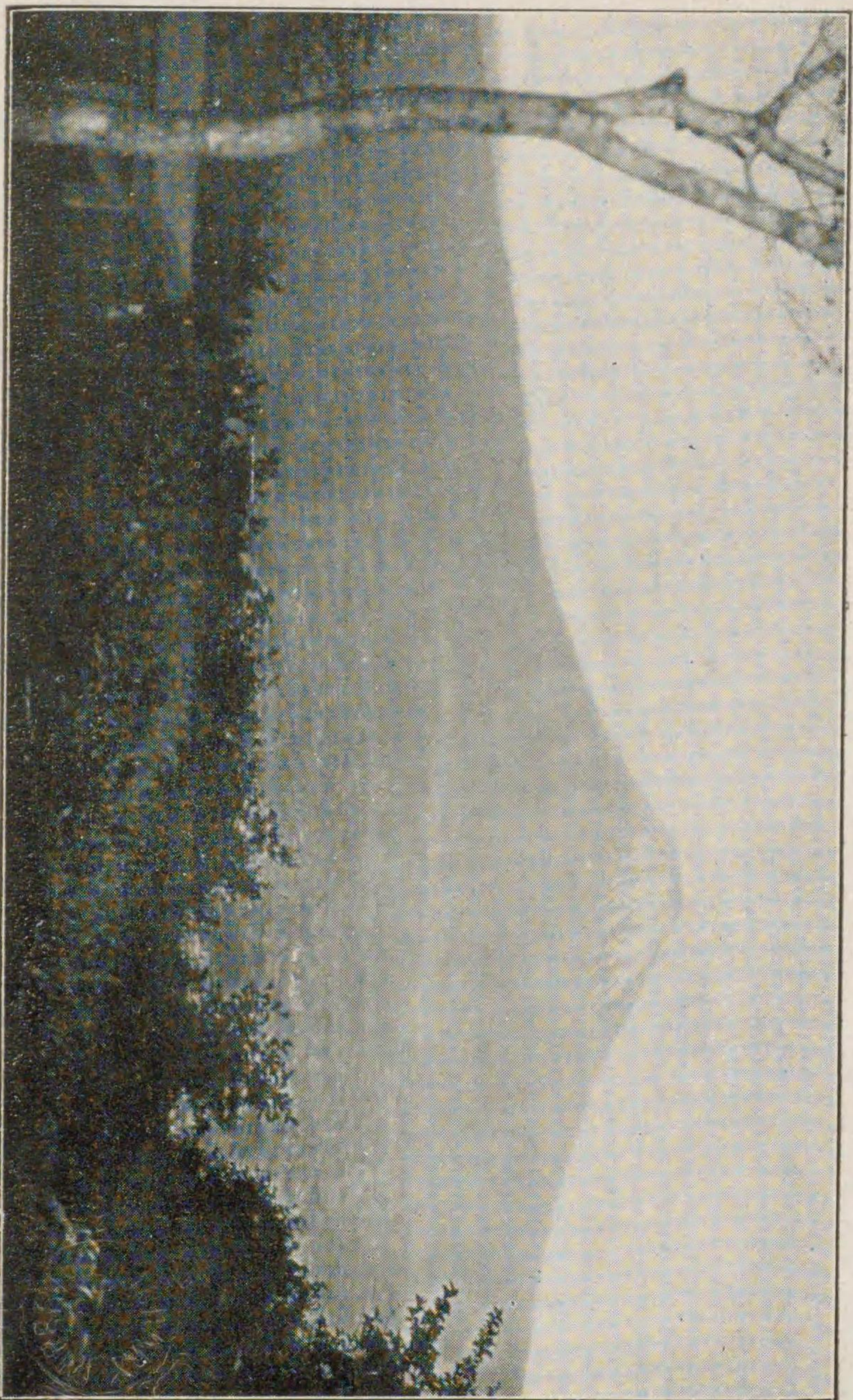
著野春井横



版社揚白



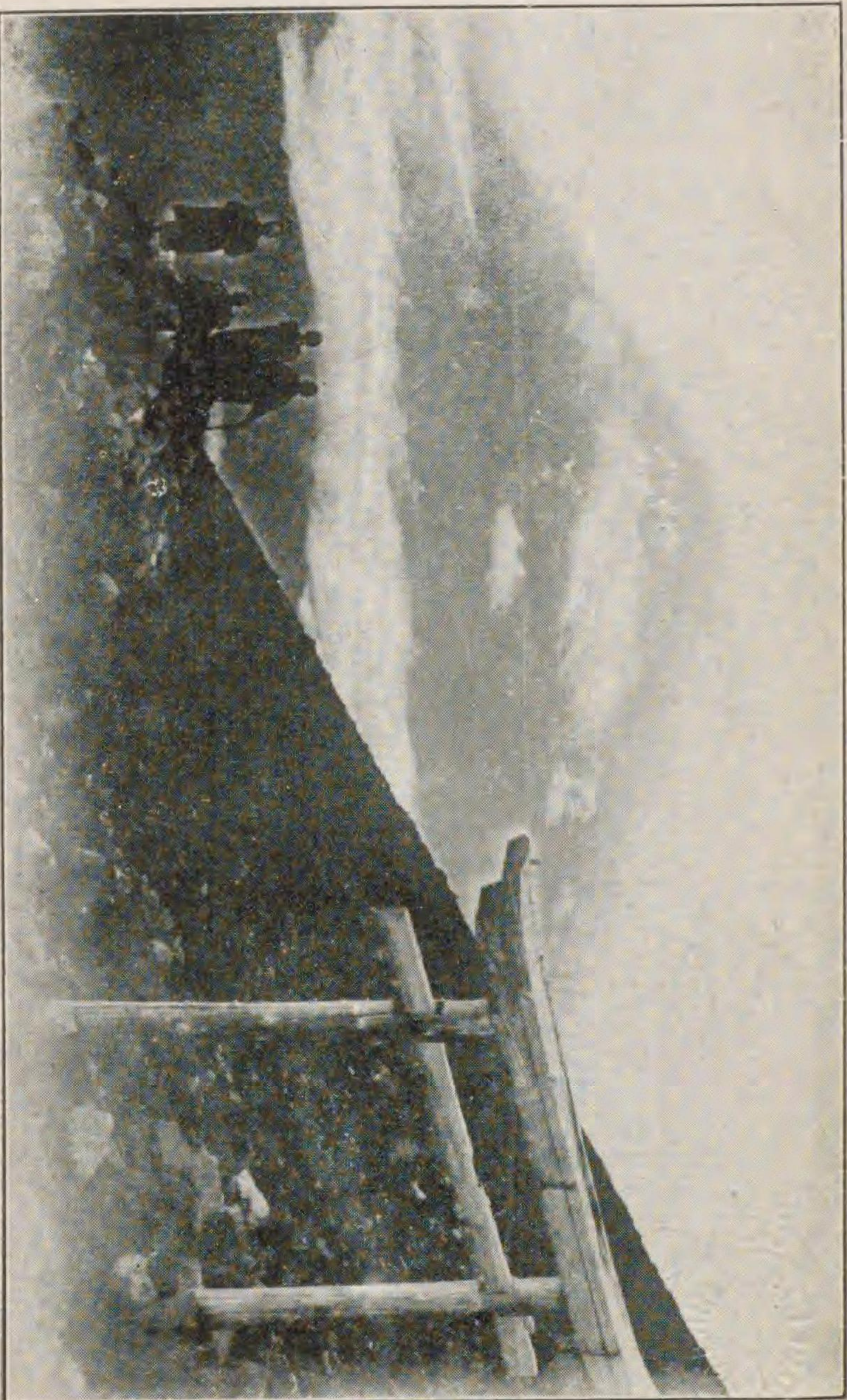




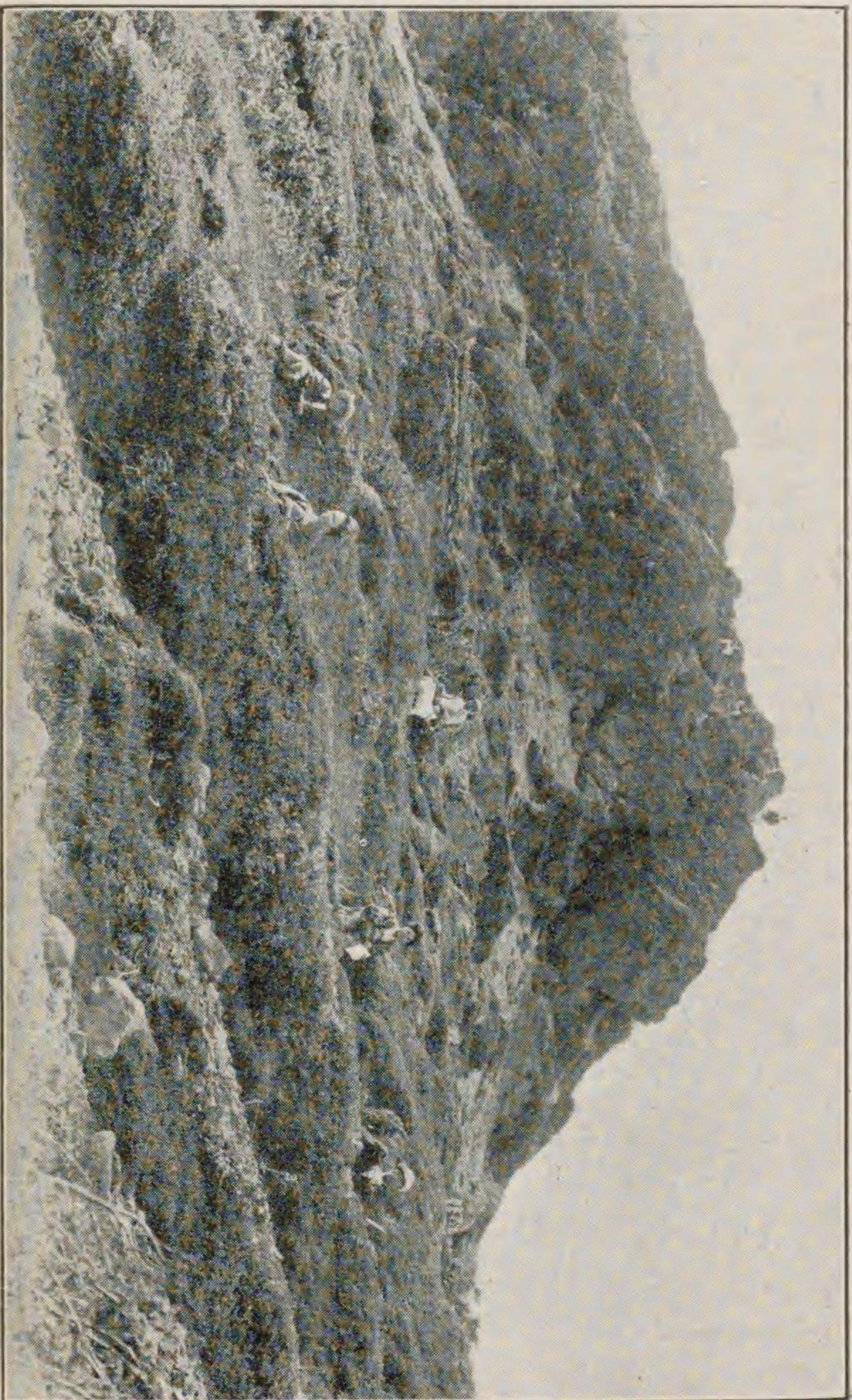
野裾と雪残の土富た見らか傍近驛土富

雪の山





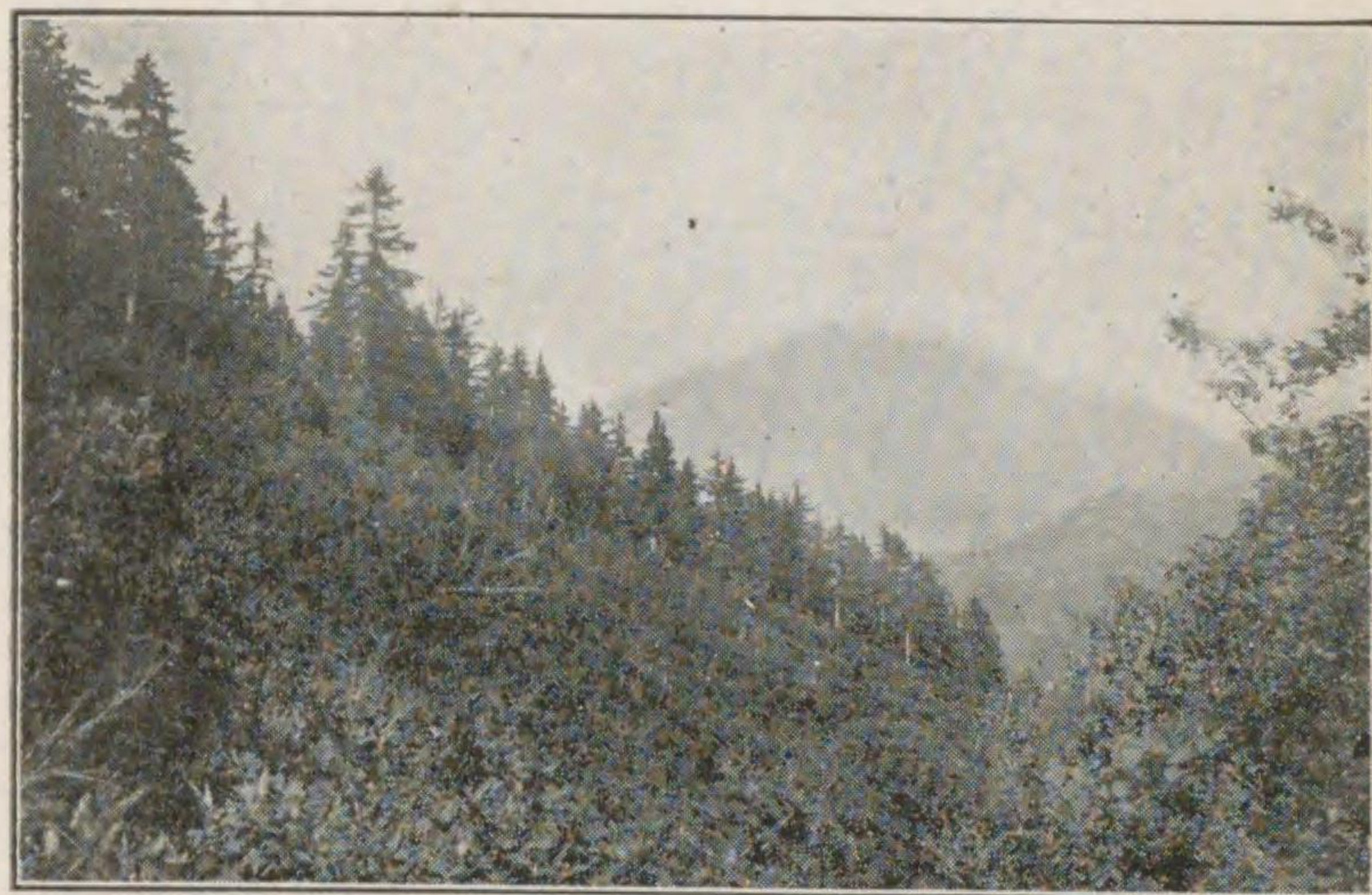
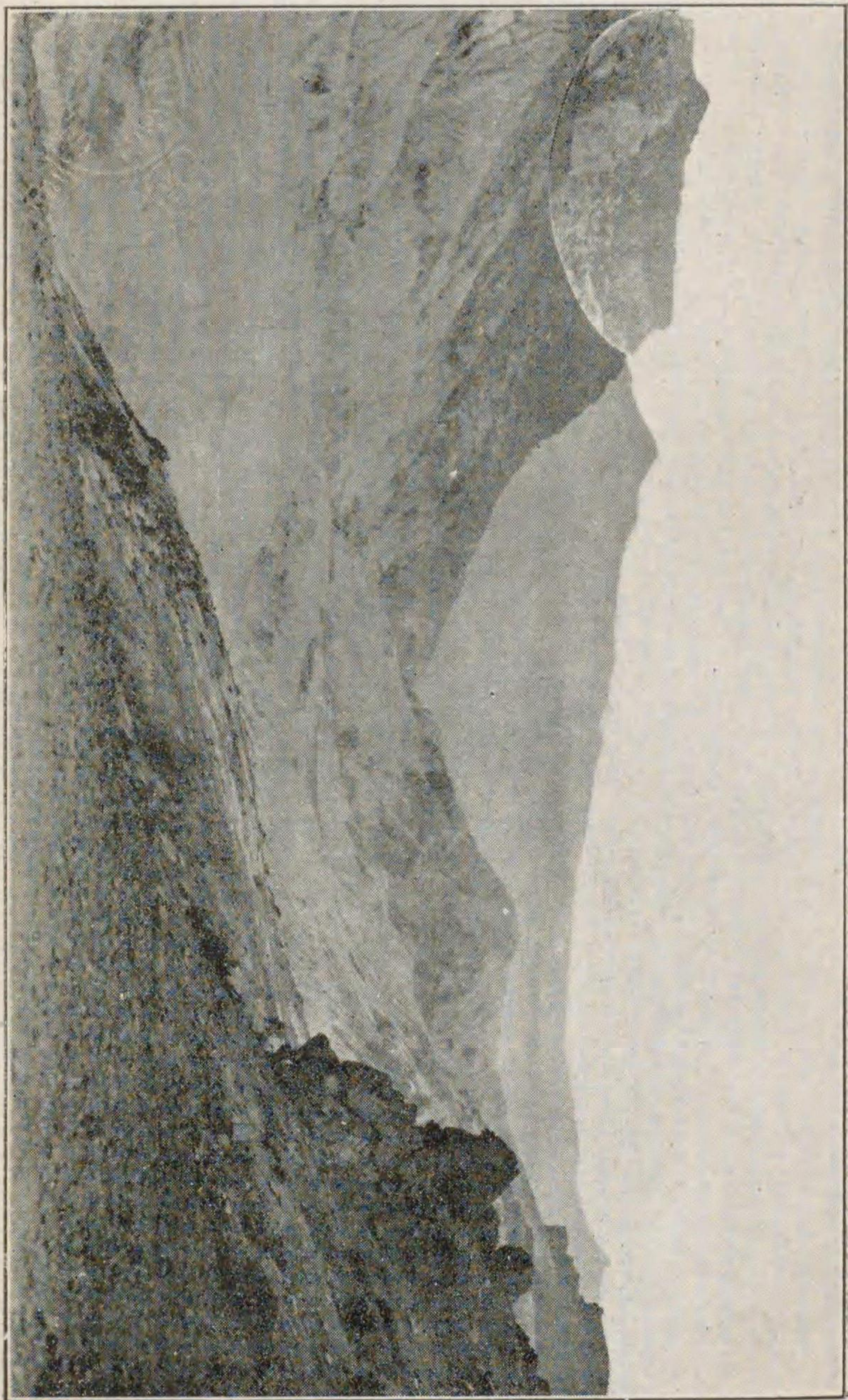
士富影の日夕るた見りよ上頂山士富



景真の社神良太達安



む望を神明引船さ口火噴りよ城ヶ鐵



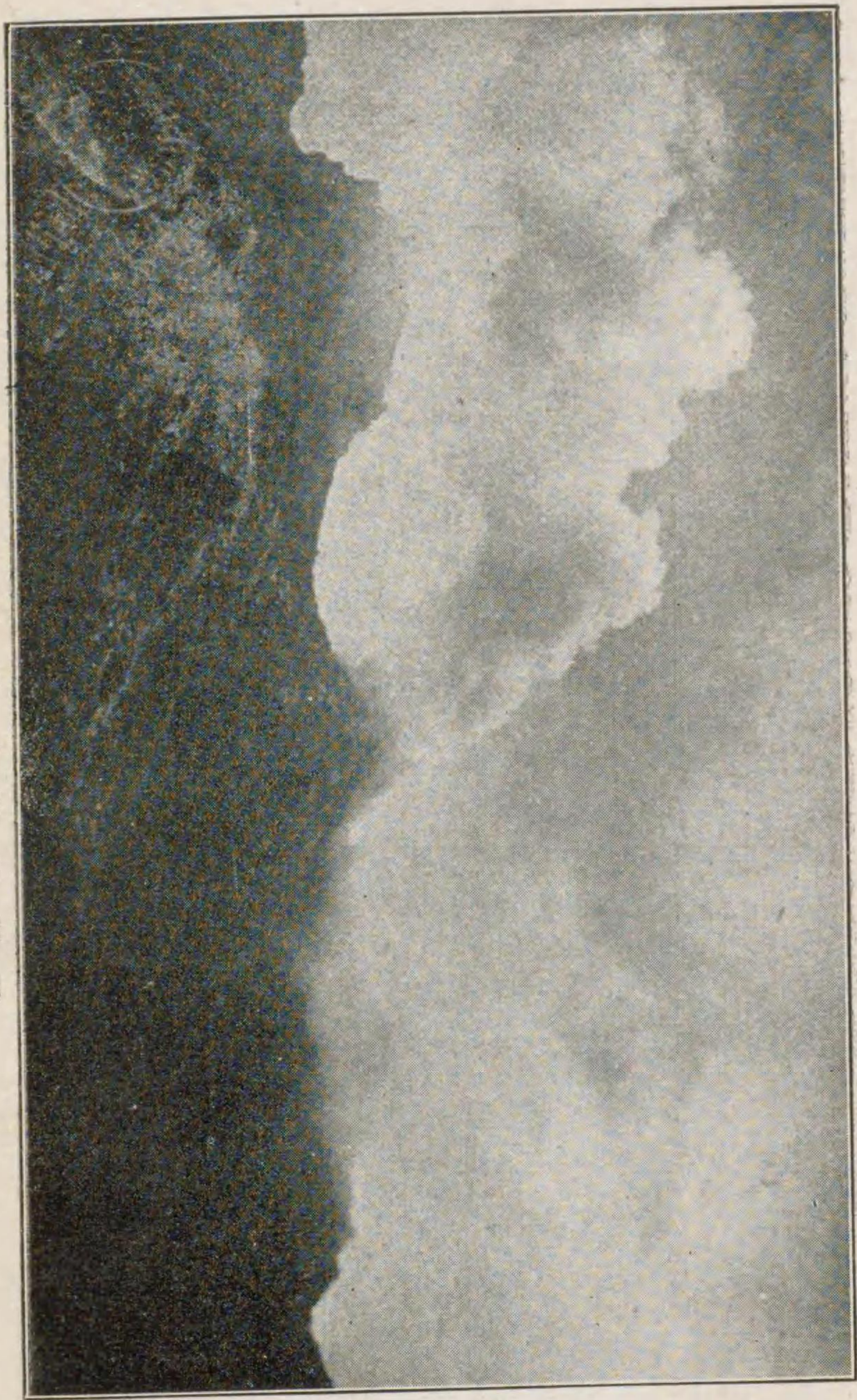
る見を岳鏖りよ腹山佛至



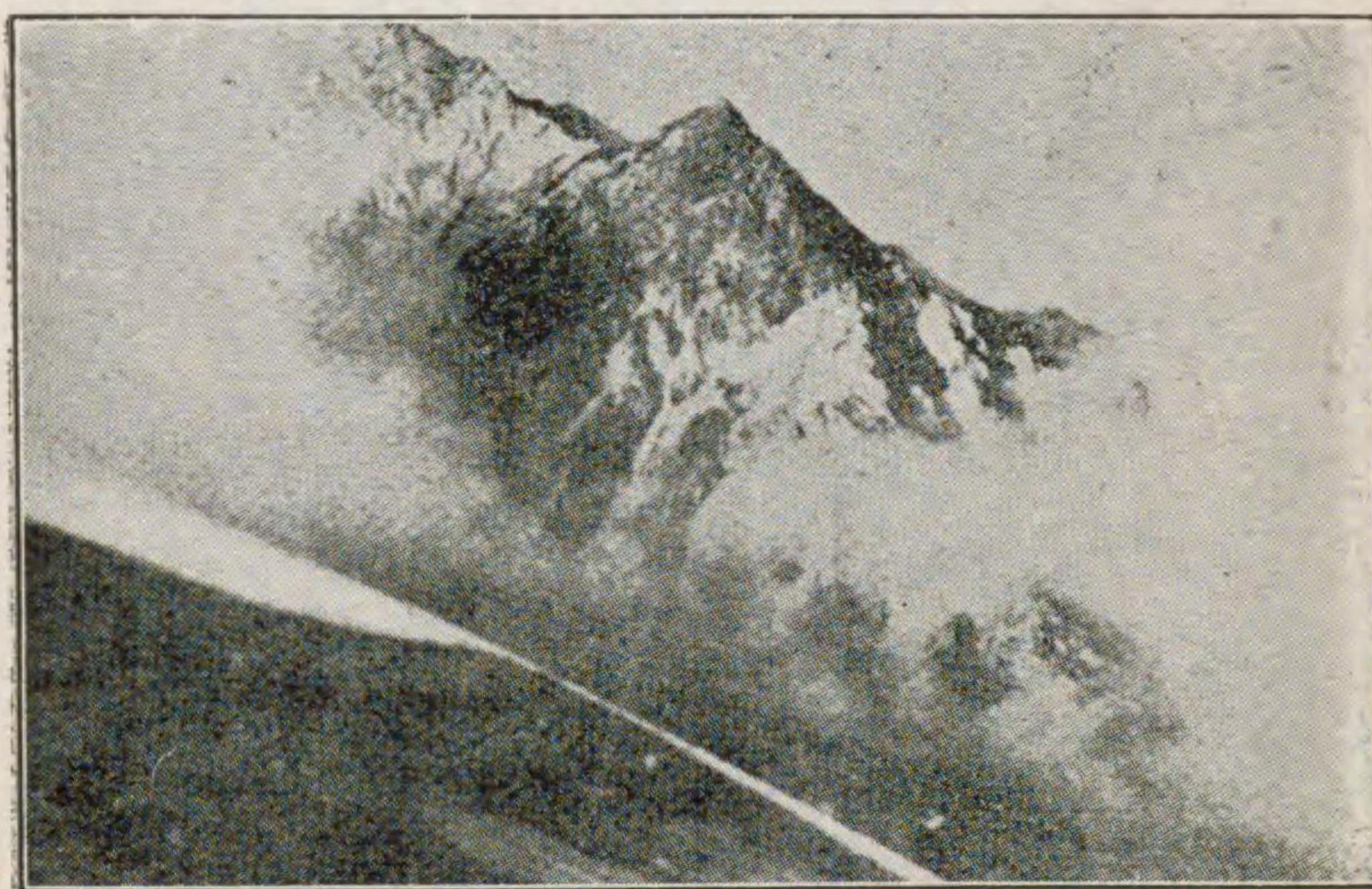
雪の嶽燕



煙噴の岳黃硫脈山彈飛

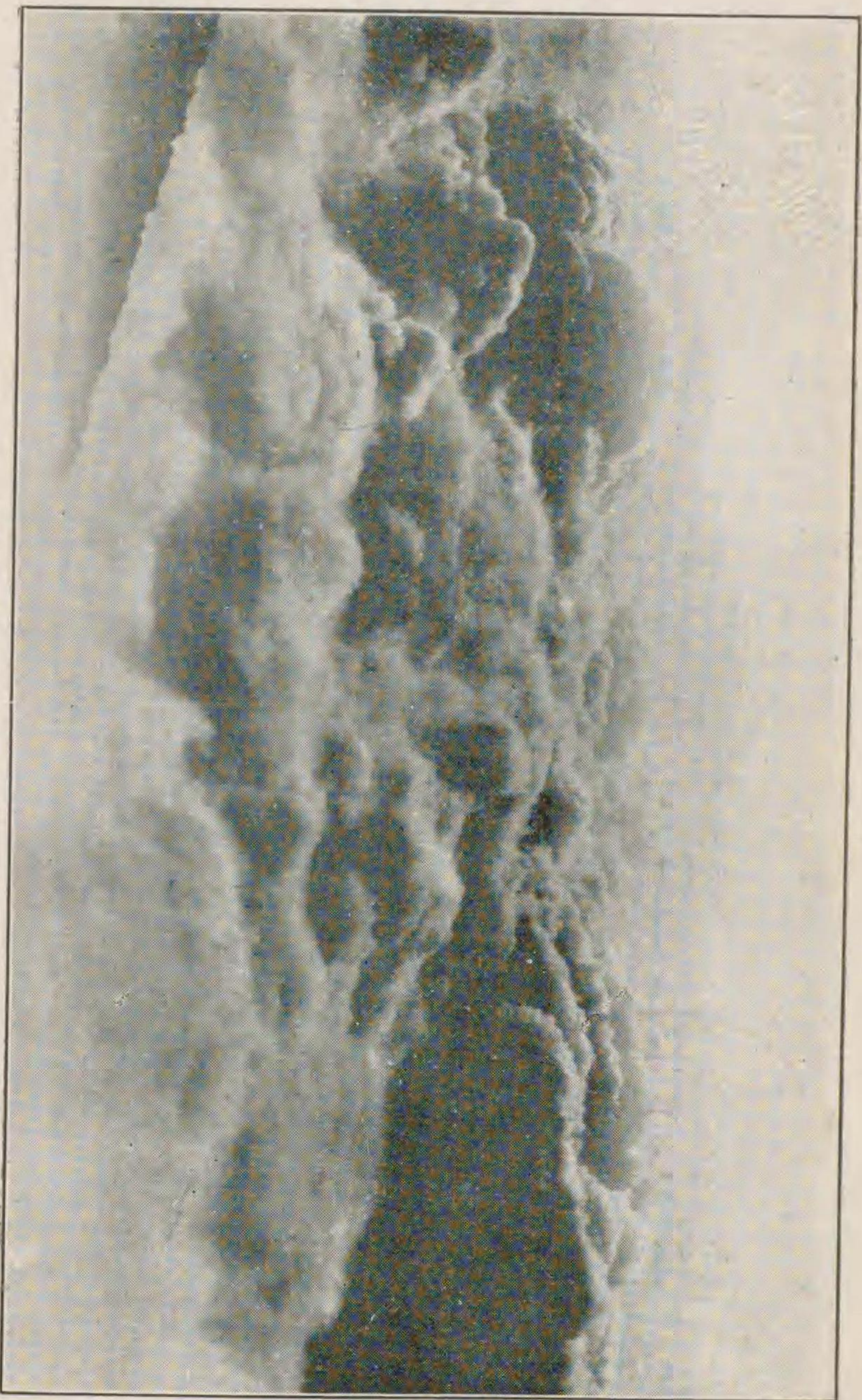


望展の上頂山立と原ケ色五



岳ケ鎗と山馬白スプルア本日



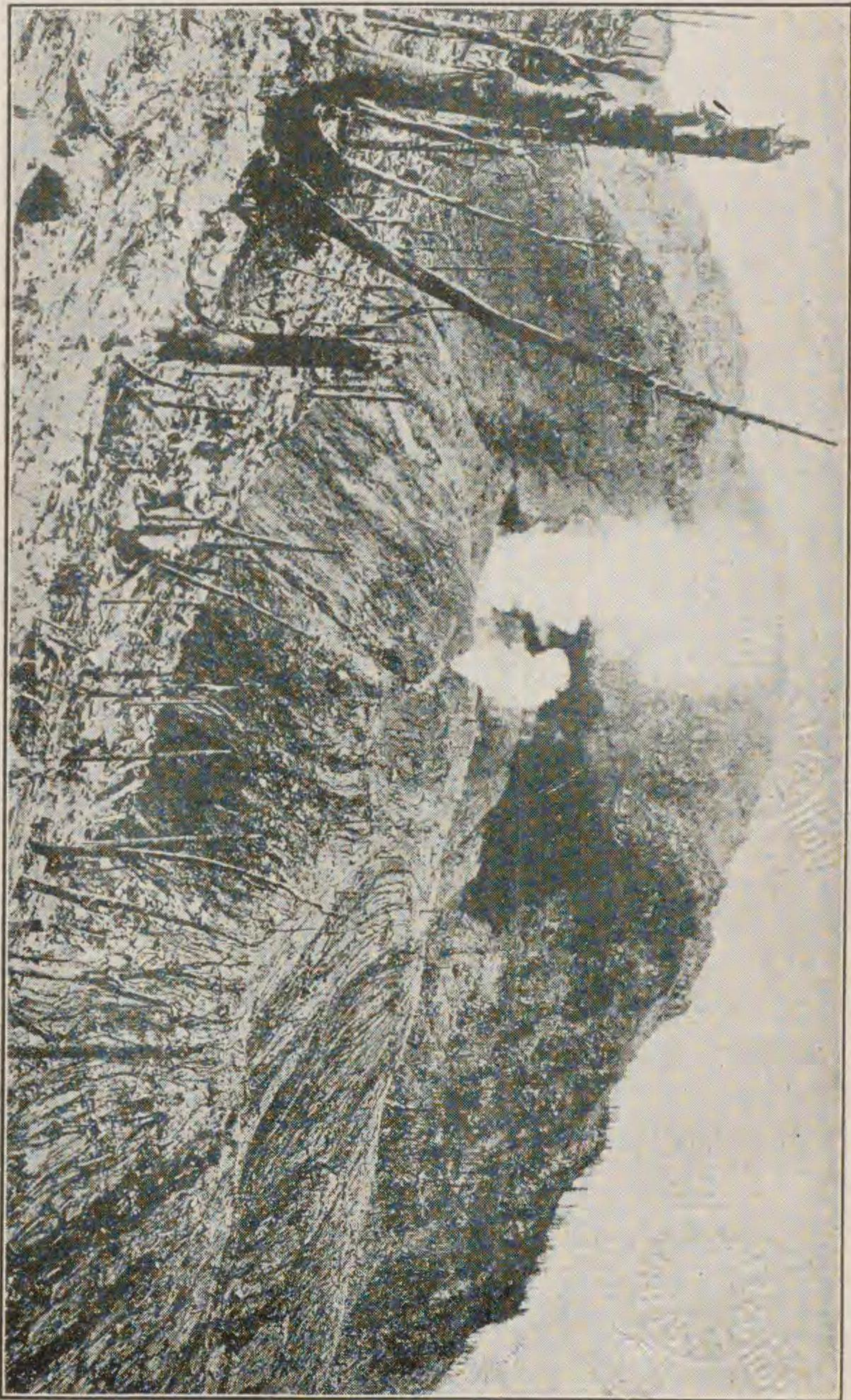


海の雲るた々漠



岳高穂と岳ヶ鎗脈山彈飛るた見りよ郡田蒲國彈飛





岳黃硫脈山驛飛



門御の月山嶽御別信



522-180

## 序 文

私は少年時代から山を愛し、夏になると年々山へ登った。山の印象は皆忘れ難いものばかりだ。谷川の響、鶯の聲、杉の木立、雲の足、花畑、山頂の茶屋等々殊に初めて東海の秀峰富士へ登った時は、實に愉快壯絶の思ひがあつた。馬返しうまがへしの茶屋も珍しく、八合目の窟屋いっわやも親しまれた。殊に頂上からの日の出は壯觀さうくわん亦壯觀さうくわん！日本男兒にほんだんじたるの誇りを感じた。歸りは得意になつて一足二間の「須走り」を馳下りた面白さ！少年の胸に山の興味をしみんと焼附やまつけられた。

爾來昨年迄卅回近くの富士登山をしたが、其の頃五分刈り頭のクリ／＼とした少年強力は、もう髪にチラホラ霜しもさへ交つて『富士へもケーブルカーが出来ます』と云つて寂しく笑つて居た。實に今昔の感に堪えない。

私は其の他の高山や名山にも大抵登つた。其の都度學生諸君と行を共にする事が多いが、諸君



(物種山高) なみす探 虫



と共に足駄あしだの下に日本アルプスを踏破とうはした時の壯快は未だに忘れ難い。

今や登山者は年々増加して、日本アルプスの山頂にも妙齡めうれいの婦人を見る時代となつた。それに従つて年々山の犠牲者ぎせいしやが出る。大に遺憾に堪えない。亦、天恵の登山をブルジョア階級かいきふの娛樂郷たらしめんとする傾向がある。之は猶更遺憾なほさらみである。私は登山は何人にも安心して、簡単に出來得るやうにしたいと願つて居る。それには登山者は危険を避ける爲に山の研究けんきうをして戴きたい。更に極めて質素しつそにして登山するやうに願ひたい。亦、山の旅館も能ふ限り低廉なる宿泊料にして欲しい。左様する事に依つて益々山は繁榮はんえいし、國民健康の實は擧がるであらう。

私が本書を編纂へんさんしたる微志も全く茲に存する。元より寸暇すんかを得て書いたものであるが故に、萬全は期し難く、殊に交通機關は年々目覺めざしき發達を遂げつゝある今日、其の點の誤謬は定めし多々ある事であらう。然し其の他の點は先づ大過たいかなきを信じて居る。

私は本書の残りの稿をまだ多分に持つ。然しそれは主として北海道と千島、樺太からふとの山々であつて、大なる必要ひつたうを認めないばかりでなく、全部網羅したなら千頁を越ゆる大冊となるであらうが

故に、削除する事にした。然し私は思ふ。「登山の興味と眞價しんか漸く理解され、交通機關も亦急速に發展しつゝある現代に於ては、此の北國ほくこくの山々にも諸君の鞋の跡を印して欲しい」と。私は是等の山々の案内書を社會しゃかいが要求する時代を鶴首して待つ。何となれば、それは國民の富の増進を物語り、文化の進歩を證明し、大衆が健康に關心くわんしんを持つ事を裏書きするものだから。

一九二九、五、一

著 者



# 本日登山案内目次

緒言……………(一)

登山の意義……………(二)

登山には男女の差別がない……………(四)

登山史大観……………(六)

山の科學……………(二)

山と森林……………(一三)

山と昆虫高山植物の採集法……………(一七)

山と動物……………(二三)

高山と氣象……………(二五)

山岳病……………(二六)

登山法の種類……………(二八)

登山心得……………(三)

イ、登山の準備……………(三一)

ロ、登山の服装……………(三三)

ハ、登山の必需品……………(三四)

ニ、登山と食糧……………(三四)

ホ、天幕生活……………(三五)

ヘ、飯を焚く注意……………(三八)

ト、登山路に就いての注意……………(三八)

チ、遭難に際しての注意……………(四四)

冬の登山……………(四七)

興味ある岩のぼり……………(四九)

登山支度品定價表……………(五一)

房 總 線

清 澄 山……………(六一)

鹿 野 山……………(六五)



錫山……………(九六)

武藏野線

天覽山と多峰主山……………(七一)

子ノ山権現……………(七二)

有間山……………(七三)

東武線

唐澤山……………(七三)

金山と太田の名勝……………(七五)

常磐線

筑波山……………(八〇)

華頂山と加波山……………(八六)

八溝山……………(八七)

東金砂山……………(九〇)

高鈴山……………(九〇)

天妃山……………(九一)

赤井岳……………(九一)

斗藏山……………(九一)

東海道線

大楠山……………(九一)

大根山……………(九二)

箱根山……………(九四)

箱根旅行案……………(一〇三)

十國嶺……………(一〇六)

道了山……………(一〇七)

足柄峠……………(一〇八)

足柄の勝名……………(一一一)

金時山と愛鷹山……………(一一三)

達摩山……………(一一四)

天城山……………(一一四)

大室山……………(一一五)

久能山……………(一一)

秋葉山……………(一一八)

鳳來寺山……………(一一九)

金華山……………(一二〇)

養老山……………(一二一)

伊吹山……………(一二三)

三上山……………(一二三)

比叡山……………(一二六)

比良山……………(一二七)

東山……………(一二八)

愛宕山……………(一二七)

嵐山……………(一二八)

鞍馬山……………(一二九)

音羽山……………(一二)

甲山と六甲山……………(一三五)

摩耶山……………(一二六)

再度山……………(一二六)

箕面山……………(一二七)

妙見山……………(一二七)

伊豆七島の山

三原山……………(一三八)

宮塚山……………(一三八)

宮津河山……………(一三九)

天上山……………(一三九)

雄山……………(一三九)

西山……………(一三九)

富士登山

富士の歴史……………(一四一)

富士の地理……………(一四一)

登山口の優劣……………(一四五)



登山心得……………(一五七)  
 登山口近傍の名勝……………(一六三)  
 須走口……………(一六四)  
 御殿場口……………(一七一)  
 須山口……………(一七三)  
 大宮口……………(一七四)  
 登山道案内……………(一七六)  
 頂上御鉢廻り……………(一七九)  
 中道廻り……………(一八一)  
 各口代表旅館……………(一八二)  
 富士登山案……………(一八三)  
 岳麓廻り……………(一八五)

關西線

多度山……………(一八六)  
 鈴鹿山……………(一八七)

笠置山……………(一八九)  
 春日山……………(一九〇)  
 信貴山……………(一九一)  
 金剛山……………(一九四)  
 生駒山……………(一九五)  
 朝熊山……………(一八七)  
 多武峰……………(一九八)  
 三上山……………(一九八)  
 二上山……………(一九九)  
 葛城山……………(二〇〇)  
 高野山……………(二〇〇)  
 吉野山……………(二〇二)  
 高見山……………(二〇四)  
 山上ヶ岳……………(二〇五)  
 大峰アルプス縦走……………(二〇六)  
 大臺ヶ原山……………(二二三)

山陽線、山陰線

廣峰山……………(二二七)  
 彌江山……………(二二七)  
 大江山……………(二二八)  
 成相山……………(二三〇)  
 鷲峰山……………(二三一)  
 美徳山……………(二三二)  
 船上山……………(二三三)  
 伯耆の大山……………(二三四)  
 琴引山……………(二二六)  
 船通山……………(二二七)  
 三瓶山……………(二二七)  
 焼火山……………(二三〇)  
 九州……………(二三二)  
 天山……………(二三二)

背振山……………(二三三)  
 阿蘇山……………(二三三)  
 祖母山……………(二四〇)  
 久住山群……………(二四一)  
 九重山……………(二四二)  
 久住山……………(二四五)  
 彦馬山……………(二四六)  
 耶馬溪……………(二四七)  
 鶴見岳……………(二四七)  
 由布岳……………(二四九)  
 市房山……………(二五一)  
 霧島山……………(二五二)  
 開聞岳……………(二五三)  
 櫻島岳……………(二五四)

四國



劔山	.....	(二五五)
阿波の二勝	.....	(二五六)
高越山	.....	(二五六)
祖谷の郷	.....	(二五七)
石槌山	.....	(二五七)
面河溪	.....	(二七〇)
雲邊寺山	.....	(二七一)
讃岐富士	.....	(二七一)
五劔山	.....	(二七三)
臺 灣		
新高山	.....	(二七四)
鳳凰山	.....	(二七八)
雪山	.....	(二七九)
大白山	.....	(二八〇)
三金山	.....	(二八〇)

阿里山	.....	(二八一)
朝鮮		
水原の山水	.....	(二八二)
白羊山	.....	(二八二)
鐵原の高原美	.....	(二八三)
金剛山	.....	(二八四)
長白山	.....	(二九一)
南滿洲		
大和尚山	.....	(二九四)
迷鎮山	.....	(二九五)
千山	.....	(二九五)
旅順の山	.....	(三〇一)
鷄冠山	.....	(三〇一)

北 陸 線

虎御前山	.....	(三〇三)
木茅嶺	.....	(三〇三)
白山	.....	(三〇四)
白川郷より白山へ	.....	(三〇四)
醫王山	.....	(三二五)
大門山	.....	(三二六)
寶達山	.....	(三二七)
石動山	.....	(三二七)
俱利伽羅峠	.....	(三三八)
吳服山	.....	(三三二)
立山	.....	(三三二)
日本北アルプス登山案各種	.....	(三三〇)
毛勝山	.....	(三三七)
黒部峡谷	.....	(三五九)

北アルプスの入口糸魚川

北アルプスの入口糸魚川	.....	(三四一)
北日本アルプス		
日本アルプスの意義	.....	(三四三)
アルプスの地形と地質	.....	(三四四)
南アルプスと北アルプスの比較	.....	(三四七)
アルプスの氣候	.....	(三四八)
アルプス特有のお花晶	.....	(三五二)
アルプスと動物	.....	(三五三)
四谷口	.....	(三五四)
アルプス山下の湖	.....	(三五五)
白馬登山口	.....	(三六二)
白馬山の意義	.....	(三六三)
白馬登山案内	.....	(三六五)
白馬から大黒鑛山迄	.....	(三七二)
白馬附近の方	.....	(三七四)



四谷を發足點としての登山計畫……………(三七〇)

大町口……………(三七七)

針木立山縦走……………(三七九)

薬師岳方面縦走……………(三八一)

高瀬入より槍ヶ岳へ……………(三八三)

鹿島槍ヶ岳縦走……………(三八四)

屏風連峰縦走……………(三八五)

中房口……………(三八六)

有明山……………(三八八)

燕ヶ岳……………(三八九)

常念山脈を縦走して鎗ヶ岳へ……………(三九〇)

豊科口……………(三九三)

鳥川一ノ澤口……………(三九四)

上高地口……………(三九五)

鳥々附近傳説……………(三九六)

燒岳登山……………(四〇三)

大正池……………(四〇三)

穂高山登山……………(四一〇)

鎗ヶ岳登山……………(四一一)

常念山脈縦走……………(四一七)

鎗烏帽子縦走……………(四一八)

白骨口……………(四一九)

乗鞍ヶ岳登山……………(四二二)

中央アルプス

木曾駒ヶ岳……………(四二三)

中央アルプス縦走案……………(四二六)

惠那山……………(四二七)

南日本アルプス

赤石鹽見岳方面……………(四二八)

南アルプス踏破案(大河原起點)……………(四二九)

南アルプス踏破案(蘆安起點)……………(四三〇)

仙丈ヶ岳東駒ヶ岳方面……………(四三一)

鳳凰山塊……………(四三三)

駒ヶ岳……………(四三四)

白崩山……………(四三五)

鳳凰山……………(四三六)

御座石山……………(四三九)

甲州駒ヶ岳登山案内……………(四四〇)

仙丈ヶ岳……………(四四四)

白峰三山方面……………(四四五)

中央線

瀧山……………(四四六)

百草園……………(四四七)

御獄山……………(四四八)

大嶽山……………(四五二)

御前山……………(四五四)

日原鐘乳洞……………(四五五)

大菩薩山……………(四五五)

飛龍山……………(四六一)

唐松尾……………(四六一)

三頭山より小河内へ……………(四六四)

高雄山……………(四六五)

小佛峠と和田峠……………(四七一)

雛鶴山……………(四七二)

燒山から丹澤山縦走……………(四七四)

岩殿山……………(四七五)

十二ヶ岳……………(四七六)

百藏山……………(四七六)

笹子嶺……………(四七七)

三ツ峠山……………(四七八)

天目山……………(四八〇)



恩若峰と源次郎岳……………(四八二)  
 乾徳山……………(四八三)  
 甲州御岳……………(四八三)  
 茅ヶ岳……………(四八七)  
 八ヶ岳……………(四八八)  
 横岳……………(四九四)  
 蓼科山……………(四九四)  
 和田峠……………(四九五)  
 鳥居峠……………(四九六)  
 木曾御岳……………(四九六)  
 南岐蘇岳……………(五〇五)  
 冠着山……………(五〇六)  
 秩父アルプス  
 武甲山……………(五〇九)  
 三峰山……………(五一二)

雲取山……………(五二三)  
 龍喰山……………(五二七)  
 將監峠……………(五二八)  
 雁坂峠……………(五二八)  
 國師岳……………(五二九)  
 甲武信ヶ岳……………(五三〇)  
 十文字峠……………(五三二)  
 奥千丈ヶ岳……………(五三三)  
 奥秩父旅行案……………(五三四)  
 甲州鹽山へ……………(五三五)  
 金峰より雁坂へ……………(五三五)  
 笛吹川を溯る……………(五三六)  
 笛吹川を難行して梓山へ出る……………(五三六)  
 鹽山より兩神山へ……………(五三八)  
 三ノ瀬より唐松尾へ……………(五三八)  
 御荷峰山……………(五三八)

上信電鐵線

黒瀧山……………(五三〇)  
 荒船山……………(五三二)  
 兩毛線  
 榛名山……………(五三一)  
 片品川の溪谷……………(五三五)  
 清水峠……………(五三八)  
 笠ヶ岳……………(五三九)  
 平ヶ岳……………(五四〇)  
 笠科山……………(五四一)  
 仙の倉山……………(五四二)  
 茂倉岳……………(五四三)  
 萬太郎山……………(五四四)  
 武尊山……………(五四五)  
 赤城山……………(五四五)

信越線

庚申山……………(五四九)  
 皇海山……………(五四九)  
 妙義山……………(五二一)  
 碓氷峠……………(五二二)  
 草津白根山……………(五二二)  
 浅間山……………(五二七)  
 岩菅山……………(五二七)  
 苗場山……………(五七三)  
 茶臼山……………(五七四)  
 黒姫山……………(五七五)  
 飯綱山……………(五七五)  
 戸隠山……………(五七六)  
 荒倉山……………(五七八)  
 妙高山……………(五七九)



米山……………(五八二)  
彌彦山……………(五八二)

東北本線

古賀志山塊……………(五八三)  
日光の山山……………(五八四)  
日光の歴史……………(五八五)  
男體山……………(五八八)  
大眞子山……………(五九〇)  
女貌山……………(五九〇)  
日光白根……………(五九一)  
金精峠……………(五九二)  
湯の湖……………(五九二)  
那須岳……………(五九六)  
甲子山……………(五九八)  
霧島山……………(五九八)

安積山……………(五九九)

安達太郎山……………(六〇〇)  
吾妻山……………(六〇〇)  
靈山……………(六〇二)  
藏王山……………(六〇八)  
太白山……………(六〇八)  
泉岳……………(六〇八)  
船形山……………(六〇九)  
金華山……………(六一一)  
笹岳……………(六一二)  
五葉山……………(六一三)  
須川岳……………(六一四)  
早池峰山……………(六一五)  
岩手山……………(六一五)  
名久井岳……………(六一七)  
椿山……………(六一八)

入甲田山……………(六一八)  
恐山……………(六一〇)

磐越線

盤梯山……………(六一四)  
駒ヶ岳……………(六一八)  
飯豊山……………(六一〇)

奥羽線

板谷峠……………(六一三)  
鳥帽子山……………(六一四)  
金峰山……………(六一四)  
七高山……………(六一五)  
鷲座山……………(六一五)  
駒ヶ岳……………(六一六)  
本山……………(六一六)

寒風山……………(六三七)

阿闍羅山……………(六三八)  
岩木山……………(六三九)

羽越線

鳥海山……………(六四〇)  
羽前三山……………(六四二)

北海道

樽前岳……………(六四五)  
登別岳……………(六四六)  
有珠岳……………(六四七)  
駒ヶ岳……………(六四八)  
後方羊蹄山……………(六四八)  
手稻山……………(六四九)  
大雪火山彙……………(六五〇)  
石狩岳……………(六五三)



# 登山と準備

トムラウシ火山	………	(六〇)
十勝岳	………	(六三)
狩勝岳	………	(六五)
孛呂岳	………	(六六)
ピンネシリ	………	(六七)
利尻富士	………	(六八)
阿寒岳	………	(六八)
(終り)		

---



登山の華厳

登山の興味

登山程爽快なものはない。

夏の真中に麓では簌簌が頻りに鳴く。追々上るにつれて谷の音は愈々騒しく全山に響く。

天を摩する木立、此の間を濛々と立ちこむる白雲、雫は笠を打ち、苔は鞋にまつはる。若し晴れ渡つた日に見下したならば、湖は掌の如く、河川は白糸を引いた如く見ゆるであらう。

更に夜更けて誰も皆、同一の小屋に親しく火を圍む團樂を思へ、其の滋味は永遠に忘るゝ事が出来ないであらう。其の曇るや忽ち蕭々として霧降り、晴るゝや截然として麗しく輝いて行く。轟

々たる瀑布、千年を経たる白雪、名も知らぬ高山植物、其の間に張る天幕生活の奔放自由さ！頂上を極めたる刹那の征服感！實に登山は夏を讚美するシンボルでなければならぬ。

然しそれ等は只表面に顯れたる快樂にして、更に之に伴ふ心身の練磨に至つては、私達の想像以上の効果を齎すと云はれて居る。



獨逸の彼の剛健は登山熱より來る處が多いそうだ。巴里婦人のアルプス登山の快活振りは、確かに來る可きフランスの清新快活味でなければならぬ。

幸ひ我國は天惠の山岳國にして到る處に山あり、温泉あり、湖がある。之等の山水の美に接して悠々の想を練り、殊に山の崇高に思ふ儘浴して、五體を練磨し人格を陶冶するは、私達に與へられた福音である。

夏は海もいゝ。河もいゝ。然し登山の盡きざる滋味に至つては全く比較するを得ないであらう。殊に私は都會人——殊に少年諸君と婦人——の登山をお薦めする。婦人は將來の日本を生む重大なる使命を有するが故に、せめて夏季に於て一二回位の登山を試み潤達の氣を養ふは刻下の急務である。

## 登山の意義

吾々が登山をするに當つても、其の人々に依つて目的は違ふであらう。或る人は動植物學の研究の爲めに、或る人は、高山氣象の研究の爲めに、或る人は、高山の趣味を味はんが爲めと云ふ具合に、人々に依つて其の目的は異なるのであるが、萬人が登山に依つて受くる利益は共通である。

### 1、身體の鍛錬

### 2、人格の陶冶

は、登山者が、皆一樣に受くる利益である。

山は神聖なる靈場である、國民の大修身講堂である、如何なる惡人と雖も、高山へ登つて神聖の氣に打たれば、高尚純潔なる君子となつてしまふのである。しかも登山に依つて、

質實剛健の氣象

向上の精神、

克己健闘の精神、

崇高なる人格



が、不知不言の間に養はれるのである。

私は常に云ふ、高山と云ふ國民的修身講堂には、博士學士と云ふ看板をもつた先生はゐない。唯「始終無言である所の大自然」と云ふ先生がゐるのみである、この大自然先生が、登山者に、不知不言の間に、大なる人生訓を興へてくれるのである。

又山は、國民の体育場である。登山に依つて「如何なる、天然の壓迫にも勝ちうる体力」を造ることが出来る、我々國民が、國家的生存競争に打ち克つ爲めに

- 1、如何なる激動にも耐えうる体力
  - 2、如何なる氣候にも耐えうる体力
  - 3、木の實草の葉を食しても奮闘を繼續し得る体力
- が必要である。かゝる体力は、登山に依つて養ひうるのである。

### 登山には男女の差別がない。

山岳教育の奨励は、目下の急務である。我々は學つて、國民をして小學生徒の時代から、山岳に親しみ山岳的趣味を先天的に感受せしめるやうせねばならぬ。

今や、人情輕薄となり、軟弱の風上下に瀰漫してゐる。特に男女青年の士氣沈頹し、贅澤の風に感染してゐるのは、國家將來の上から見て由々敷一大事である。この弊風を打破するには、一方法として、國民に山岳教育を施さねばならぬ。軟風打破は、我々が死を決して決行せねばならぬことである。

我が帝國は、世界有數の山國で、どこへいつても山がある。一萬尺の峻峰も、三四尺の小丘も至る所にころがつてゐる。かくの如きは、殆んど天祐と云つてよい。學生は、海水浴や温泉場へ出かけて不活潑の日を送ることを止めて、努めて山岳を跋涉することを心がけねばならぬ。又一般の人々も、徒らに別荘など、云ふ贅澤物を造ることを止めて、時間のあらん限り、努めて山岳を踏破することを試みるがいゝ。

山岳で、體を練り膽を鍛へるは、單に男ばかりではない、女子にも必要である。國家永遠の繁榮

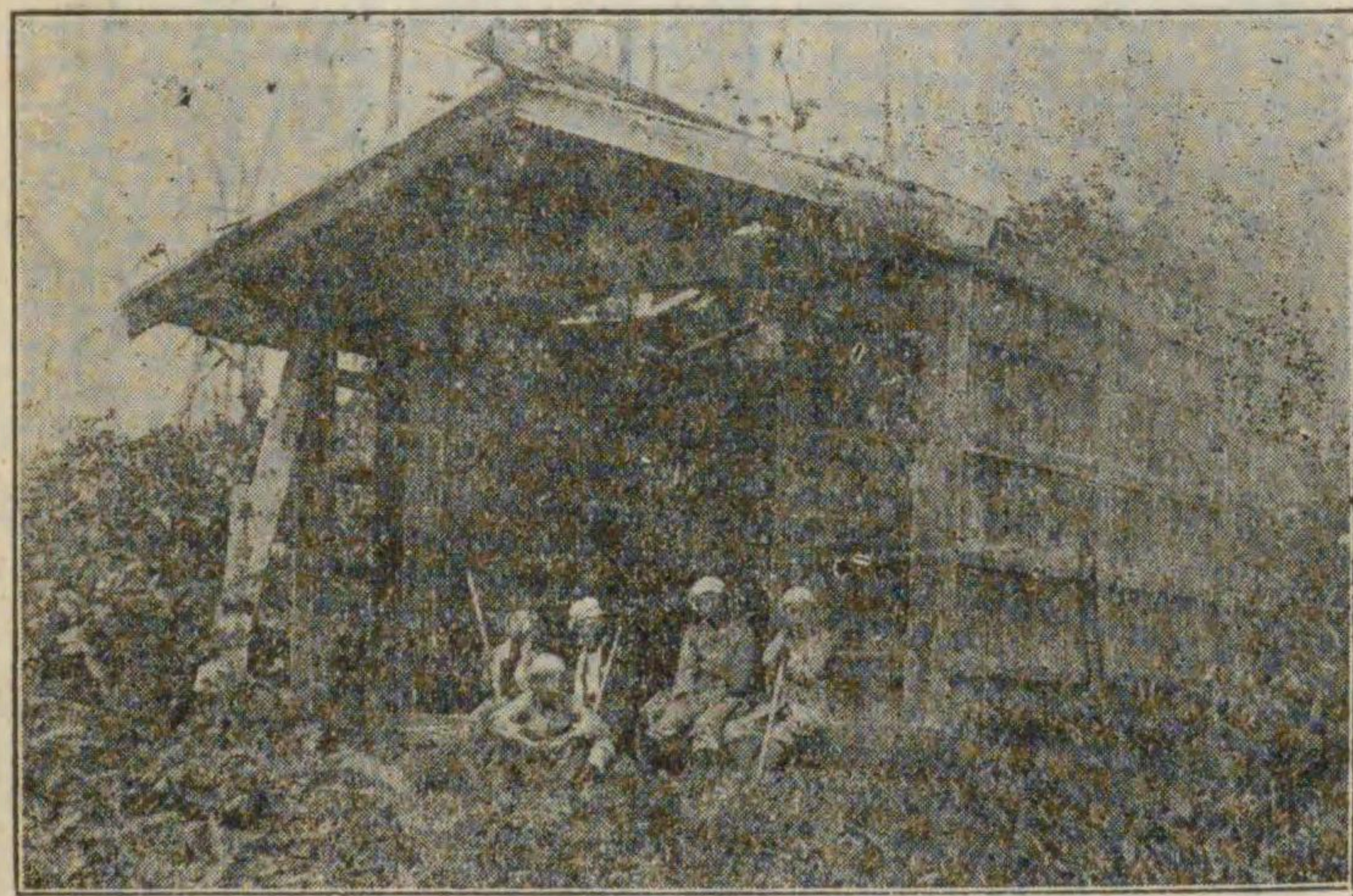


を期するには、男子も女子も共に強壯なる體力、健全なる精神を所有せねばならぬ。英國人でも米國人でも獨逸人でも健康な體格を生み出すのは、健康の母があればこそだ、然るに日本の女子は體育と云ふことを等閑に附して省ない。日本婦人は明けくれ化粧に憂き身をやつし、白粉や紅で、容色をつくらうとしてゐる。これが爲め、體格は劣等である。かゝる體格の劣等なるものゝ腹から健全なる子供の生まれる理由がない。鉛毒を伴ふ白粉を顔になすりつけたり、紅をぬつて血行の盛んなる事を虚飾しやうとする悪弊は避けねばならぬ。今後の婦人は、盛んに競技運動をやり、山岳登山を決行して、新鮮の空氣を吸ひ、血液の循環に活躍を與へるやうにせねばならぬ。かく運動して、體を練り膽を鍛へて眞の婦人とならねばならぬ。

要するに山岳教育は、男子たると婦人たると、老いたると若きとを問はず、之を授けねばならぬ。ものである。

## 登山史大觀

登山と云ふことが普及してきたのは、極めて最近の事であつて、昔は、山へ登る時は、信心の爲めであつた。随つて、山は白衣の講徒の専有であるかの觀があつた。昔は興味本位の登山家などは、殆んどなかつたのである。古代の人は、山の靈を恐れて、山頂へはゆかなかつたやうである。現在臺灣の生蕃達は、新高山の山頂へは、恐ろしがつてゆかない。内地でも日本武尊の東征の頃は、富士山麓には、蝦夷がすんでゐて、彼れらは、三國一の名山をフジ（アイヌ火の女神と）と云ふて崇めてゐたが、山の神靈を恐れて、登山をしなかつたのである。高山へ登ることを始めたのは、我々の祖先であつて、富士や白山は、一千年以前に既に登山したものがあつたのであつた。けれ共、山を開いた人は



信州平湯の峠小屋(向つて右より三人目著者)



何れも、僧侶であつて、山中に於いて修業をしたのである。今日、昔から有名であつた山へ登つてみると、佛教關係の名稱が、山中至る所に残つてをる。之は、山を開いたものは、僧侶であつたからである。其後とても、山へ登る者は、僧侶修験の徒に限られてゐたのである。中古大いに勢力のあつた山伏修験者は、出羽三山、大峯、葛城などに分け入つて修業をしたのである。能狂言によく出てくる。

「之は出羽羽黒山より出でたる山伏です」

など云ふは、即ち之れである。山伏は峯入する時必らず、法羅貝を持つことを忘れなかつた。之は、

- 1、信號用（一行の爲めに連絡をとる）
- 2、猛獸よけ（山伏の徒は、悪魔拂ひと稱してゐる）
- 3、霧を拂ふため
- 4、體温を保つため

に持つて歩いたのである。

足利氏の末に至つて富士講と云ふものが起り、先達が、講中に白衣をきせて、毎年夏に登山することゝなつた。この富士講は、徳川中世以後益々盛んになつた。富士講が始まりで、靈驗あらたかな神佛のまします山には、講中が先達にひかれて、登山するやうになつた。これららの講中は、所謂神佛混淆の特徴を最もよく具備してゐた。随つて其頃には、山へ登る時は、先達に導かれて一團となつてゆかねばならないので、個人で登ることは、絶対に許されなかつた。しかも、登山中は、先達の命令に絶対に服従しなければならなかつた。例へば、富士の如きも、初登山者には御鉢廻りをゆるさなかつた。御岳の如きも、三ノ池から北へは進ませず、先達ですら、四ノ池五ノ池高天原へゆきうるものはなかつたと云ふことである。

古くから山に祭られてある神社の祭神を、根本迄遡つて調べてみると、神體は山岳夫れ自身であつたり、或は、山中の巨岩であつたり、溪間の奇窟であつたり、谷間から湧き来る温泉であつたりすることが多いのである。山中へ修行に出かけた僧侶達は、何かかはつたものを認めて奇瑞



をとき、夫れを神として祭つたのである。當時山の開基に力をつくした僧侶は、麓に社寺を建立し、山頂に小祠をたて、奥ノ院と稱し、種々の靈驗を説いて、信徒をつつたのである。

僧侶が、新らしく山を開拓する時の努力は、尋常一様でなかつた。勝道上人は、稱徳帝の天平神護二年に、日光に四本龍寺を創め、更らに奥の院を建立すべく、男體各攀を試み、十六年をけみして漸く其目的を達したのである。其間の勞苦は、一通りでなかつたと推察する。

かくの如き有様で、割合に取つき易い山は、早くから開かれてゐた。然るに、今日我々が南北日本アルプスと云ふ飛彈山脈、赤石山系の奥深く聳えてゐる山々は、明治十二二年頃迄山の處女として存在してゐた。

此の人足至らぬ山々は、明治十二二年頃から、外國人に依つて、踏破せらるゝことになつた。勿論之れらの山は、徳川時代にも山見廻りの役人や獵師に依つて踏破されたことがあるのであるが、明治時代になつてから、登山熱勃興しやうと云ふ時に際して、外國人に先鞭をつけられてしまつたのである。しかも今から二十數年前に、ウエストン氏があらはしたジャパニース、アル

プスは、我が、飛彈山脈、赤石山系等に對して、日本アルプスと呼ばしむるに至つてしまつた。外人の登山に刺戟せられて、日本にも山岳會(明治卅八年)が起るに至り、山岳會員諸氏の活躍に依つて登山熱が俄かに勃興したのである。

我國の登山熱は、外國人に依つて刺戟せられたのであるが、山岳會が起つて僅か十五六年の間に凄じい勢を以て、内地にある前人未踏の山は十中の九迄探險せられ、夫れと共に登山熱は恐ろしい勢で勃興して來た。

## 山の科學

【山の成因】 我が、地表の相貌が複雑で、山野河谷が、其間に横はつてゐるのは皆、内外營力の作用によるのである。

今試みに、茲に内力作用に依つて隆起した土地があるとする。外力は、直ちに、その作用を始めて、浸蝕を逞うし、永年の間には隆起した土地を平にして、海水の水準面と等しくする。この



一期間を地質學者は輪廻と云ふてをる。而して、平かな土地が再び隆起を始めれば、更らに次ぎの輪廻期に入つたのである。

我が地表面は、かく日々夜々變化しつゝあるのである。今日の日本アルプス槍ヶ岳の峯も幾千年幾萬年の後には、平かになつてしまふ。

人間に壽命があるやうに、山にも壽命がある、年齢がある。

輪廻の初期は、地形は極めて單調である。この時代を幼年時代といふ。これから、外力の作用が働いて、幾多の谷を生じ、地表面が複雑になつてくる。この時を壯年時代と云ふのである。更らに外力作用が働くと、地表の起伏が次第になくなつて、再び平らになり輪廻は終るのである。この時代が老年時代であつて、再び次ぎの輪廻が始まるのである。

さて山岳の成因は、凡て次の通りである。

(一)【火山作用】 地球内部の岩漿が地殻の弱點を突破して噴出して堆積したもの。

(二)【褶曲作用】 地殻の變動の爲めに、地表に毀裂が出来て、隆起した部分が山となるのである。

る。

(三)【水蝕作用】 水蝕作用がはげしくなると、深い々々谷をつくる。その間に挟まれる部分は山となる。

(四)【斷層作用】 地殻の一部が、裂罅に沿うて、陥落し或は隆起するときは、一方の地は、山になるのである。

これらの成因は、單純でなくて、相伴つて起ることが多い。

## 山と森林

山の美は、森林である。山岳探險はいつも森林と密接の關係がある。森林の見方に水平的と垂直的とあるが我が國の水平森林帯は、

### 熱帯

林—琉球の中央より南(タコノキ、バナ、ハイソアツプル、ヤシ等、茄子、唐ガラジなどは冬になつて枯れずに盛んに成長する)



暖帯林—琉球の中央より東京邊迄(カシ、シヒと云ふやうな)  
常緑闊葉樹の森林

温帯林—宇都宮邊より北海道中央迄(ブナ其他冬になると葉)  
をおとす落葉樹の森林

寒帯林—北海道中央より樺太へかけ(エゾ松、ドミ松)  
シラカンバの類

全長千二百里に亙る我が帝國の水平的森林帶を、觀察するには、少くとも千二百里を旅行せねばならぬ。然るに山は、高きに登るに随つて、自ら氣候が異つてくるので自然に生ずる樹木の種類も違ひ、林相も違つてくる。垂直的に森林帶を觀察することが出来るので、一つの高山へ登ることに依つて、暖帯林から寒帯林迄を、一度に觀察することが出来る。臺灣の山へ登ると、千五百尺以下は熱帯林、千五百尺以上は暖帯林、六千尺以上は温帯林、一萬尺以上は寒帯林となつて一度の登山に依つて、森林の四帶を研究することが出来る。本州の高山では、熱帯林丈は研究することが出来ないが、暖帯林から寒帯林迄觀察することは出来る。

唯注意することは、富士のやうに早くから開けた山は、濫伐又は野火の爲に、著しく固有の林

相が破壊せられてゐることである。又山崩れの爲めに、一時的に固有の林相を失つた場合は、各高山に於いて目撃する所である。例へば、富士の如きは、固有の林相は千六百尺迄が暖帯林、五千六百尺迄が温帯林、九千二百尺迄が寒帯林であつた。所が今日では、富士に於いては、千六百尺以下の暖帯林は、濫伐と野火の爲め全く原野と化してゐる。温帯林も破壊せられて、現在は三千五百尺から僅かに温帯林を見る有様である。昔の温帯林の中央(今日では、富士へ登つても暖帯林と温帯林との區別がつけ兼ねるが、夫れでも猶野火を免れた神社佛閣附近の森には、固有の林相があらはれてゐる。生物に男女の別がある如く、樹にも陰陽の差別がある。

陽樹—松、カラマツ、白樺、クスギの如きもの、特徴としては天然に森林帶を造ることが出来ない、天變地異、濫伐、野火に依つて、固有森が破壊せられると、ソコへ陽樹が生長するのである。富士山麓の暖帯林が破壊せられ、原野と化した跡へ、松のやうな陽樹が生へたのである。

陰樹—カシ、モミ、ブナの如きもの、天然に林相を形成しうる、陽樹は年齢をふるも其下に子供が出来ないから、或る時期がくれば亡ぶが、陰樹は、其下に子供が出来からして、永久に林相を維持することが出来る。陰樹の林が、濫伐や野火に依つて破壊せられて、其跡へ陽樹の林が出来て、其まゝほ



かつておけば何百年かの後には、陽樹は枯れて、其下に生へてくる陰樹が森林をつくるに至るが自然である。

この區別を知つてをれば、寒帯林のあるべき所に、カラマツ、ヤマハンノキなどが生へてゐるのを見れば、直ちに「是は一時的の林相である。嘗てこの附近には山崩れか地迂りがあつたな」と直覺することが出来る。山のアレタ時などは、かう云ふ箇所に避難することは頗る危険であつて、いつ何時山くずれがするかも知れない。それに反して、森林帯固有のものが密生してゐる所ならば、先づ山崩れの嘗てなかつた所であるからして、安全な避難場所である。

【山岳と高山植物】 高山登りをして、樹木全くつきた草原帯に緑の草が一面に生へて、千草八千草咲き亂れたる美觀に接した時の心持は、云ひしれぬ愉快を感じる。御花畑の美に打たれた時、人間の心から、悪と云ふ分子は、全然消えさつてしまふ。

高山植物が、流行し始めたのは、明治三十五年此方である。子爵の松平康民、加藤泰秋、來留島通簡、青木信光氏等が發起で、山草會と云ふものを組織して以來である。夫れ迄は高山植物

と云ふものに、注意を注ぐ人は稀であつた。僅かに漢法醫が藥草採取の上から、之れに注意した迄である。高山植物の豊富を以て知られてゐるのは白馬、八ヶ岳、戸隠、富士などである。

左に、農業世界主幹野崎信次氏の昆虫及高山植物採集法をかゝけておく。

昆虫採集の器具には種々のものがあつた採集を目的とする旅行者は、大げさな道具類を持つてゆくけれども、まづ遊覽をかねた旅行には、次のものがあれば結構事足りるであらう。

○捕 蟲 網 (白色又は草色寒冷紗製のもので、標本屋に賣つてゐるが、器用な人は手製で作るのがよい)

折たたみ式など便利であらう)

○毒 瓶 (ガラス製のでキルクの口がある。中には青酸加里が這入つてゐる。標本屋から求めるのがよい、指先で蝶類の胴を壓して殺してもよいが、毒瓶を用ふれば、標本に傷をつけることなく殺すことが出来る)

○三 角 袋 (ばらふん紙、縦八寸横七寸の矩形の紙を三角形に折つて、兩端を折つて採集した蝶類を一時保存して置くもの)

○採 集 箱 (特別に作られた賣品もあるが何でもかまはない、小形のトランクでも間に合ふであらう)



○若干のピン、ピンセット、ナフタリン等

以上のもので充分に間に合ふであらう。要するに小形の展翅板を携行しても宜しからう。とにかく旅行中に採集された蝶類は日がたつと、翅をとちたまゝ、固くなつてしまふが、袋の中に入れてたまゝ多量の防腐剤ナフタリンを入れて置けば、腐敗する心配がない。一ヶ月や二ヶ月は充分に保存される。

かくして歸宅してから、標本の作製にとりかゝるのである。固くなつた昆虫類は、ブリキ箱を利用して、底にきれいな川砂の類をしき、その上に和紙をしき、水で充分にしめらせた後、その上に固くなつた蝶類を三日も置けば湿氣のために、軟かくなつてもとの通りになるから、展翅板にかけて思ふ通りの型となる、更に防腐剤に注意して保存すれば、捕殺して間もなく作つたと同様な、立派な標本を作ることが出来るのである。昆虫に興味をもつた友達などに、旅先から採集したものを郵送してやると、非常に悦ぶものだ。

固くなつた標本を和かにするために、水の代りに石炭酸などを用ゐれば更に安全であらう。水を用ゐた場合には永く置き過ぎると折角の標本が黴を生じたり、腐敗するからくれぐれも注意してほしい。ピンからよく腐れが這入るから、少々高價でも質のよいピンを使用した方が利益である。

【趣味深き高山植物の採集】 種々の植物標本を作つて保存することは趣味の深いものであるが、根のまゝ枯れぬやうに持ち歸つて培養することは、一段と面白い仕事である。まづ標本を作る注意のあらましを述べて置かう。

携行すべきものは、次の通りである。

○錯 葉 (鼠色の割合大形な厚紙)

○吸取紙と新聞紙 (普進の大形吸取紙と古新聞紙)

○採集用の胴亂 (トタン製のもの)

○解剖器具 (小形のメス、ピンセット、擴大鏡、ナイフ、鋏の類)

鋏及び糊と和紙 (丈夫な)



これだけあれば、旅先でも押葉を作ることが出来る。以上の材料を用ゐて、好きな植物を採集して、よく(重い石と一枚の板があれば宜しい)押しをかければよいのである。押葉のことはよく諸君の知らるゝことと思ふから省略して置かう。書き忘れたが、昆蟲の三角袋にも、押葉にも必ず採集の日時と場所とを必ず書きとめて置かなければならぬ。これを忘れると標本としての價値がなくなつてしまう。後からよく調べて名前をつけて置かなければならぬ。名前を調べる爲に多く用ゐられる單行本には應用昆蟲學(松村松年博士著)や植物圖鑑(牧野富太郎校訂)などがよいと思はれる。

次には最も面白き培養目的の採集についてお話致さう。植物には群落といふものがあつて、ある場所に限つて、一種類の植物が澤山に生えてゐるものである。地方々々によりて大抵生えてゐる植物が定つてゐる。そこで旅をする前に、植物の本などを豫め讀んでから出かければ大層役にたつものだ、携行器具は次の通り。

○大形胴亂(なるべく大形のもがよく、中に少量の水をいれて置けば、植物の枯れる心配はない)

○小刀、小形鋸、移植ごての類、

その他土を掘る尖の鋭い鐵棒、岩をへがす鐵錘の類

○剪定鋏や綱の類

以上のものをもつて行けば、大抵の高山灌木や球根類、或は小形の草などを完全に掘りとりることが出来るものだ。

高山植物を採集するのに最も苦心するのは、掘りとりの仕事であつて、とかく根を傷め易いものであるから、根氣よく注意深く巧みに掘りとらなければならぬ。掘りとつたものは、不用な根や枝を切りちぎめて、胴亂に納める。胴亂に這入らない大形のものには附近に生えてゐる水苔の類をとりて、根の部分を含むことが極めて大切なのである。あまり永い時間の間空氣や日光にさらして置くとしほれてしまつて、後でいくら水をやつても回復しないことになるから注意しなければならぬ。澤山に採集したならば、根の部分を水苔に包んで、俵につめ(水苔を使用する)込みて家へ送ることにすればよいであらう。

球根植物の中でも、球根性のものは割合に根が地中深く這入つてゐるから、餘程注意してほり



とらないと往々途中で切れてしまうものである。

「もうせんごけ」や「むしとりすみれ」さては「くまがひさう」や「あつもりさう」や「こけも」のやうな小形こがたのものは採集さいしゅうの容易よういなものであるから、なるべく完全くわんぜんなよきものを掘りこつてこなければならぬ。でないないと折角せつかくとつて來ても途中で荷厄介にがやくわいのために捨てすてしまふことが往々あるものだ。

その他の灌木性くわんぼんせいの高山植物はなほ更さらのことによく見きはめてから掘りほとらないと、往々似によつたつまらぬ植物しよくぶつを苦心くしんしてほりとることになるから、充分じゅうぶんに注意ちゅういしてほしい。近來きんらい或種あるしゆの高山植物が非常びじやうに亂獲らんわくされて、殆ど絶滅ぜつめつの有様ようざうにあるから、法規ほふきを以て採集さいしゅうを禁きんじられてゐるものもある。斯か様な譯わけで却々かへやかましく取締とくしつてゐることは登山者とんざんしゃのよく知られる通りであつて、左様さやうな珍種ちんしゆは國土愛護こく土あいごのために、公德心こうてきしんから採集さいしゅうを遠慮えんりよしてほしいものである。

盆栽用ぼんさいようの材料ばいりやうとする奇樹きじゆ(形かたち)は往々風かぜのひどく當ある危険きけんな場所に生はえてゐるものであるから採集さいしゅうにも一段いちだんと苦心くしんを要よするものである。従したがつて單獨ぼんぱんの場合ばいあひにはやめた方がよろしい。

## 山と動物

日本にほんの高山こうざんには、猛獸まうじゆうが少ない。本州ほんしゆうの山やまには(駿河すまがは、甲斐かい、武藏むさし、秩父ちちぶ、信濃しんのう、下野しも、越中えちゅう、越後えちご、及び奥羽地方おくうゑちほう)には熊くま、北海道ほくかいだうには羆ひくまがある。けれ共とも、滅多めつたに人に危害ゐを加へない。突然とつぜん態ぐまに出であはないやうに、鈴すずをならして歩あるくとか、軍歌ぐんかを唄うたつて歩あるけば、熊くまの方ほうで逃にけてしまふ。豺やまいぬは、本州ほんしゆうの山やまには、少すこし奥深おくふかい所ところにはゐる、之これは、群ぐんをなして歩あるくを常とことし、性質せいしやうは獐猛しやうまうである。之これれも、人の聲こゑをきけば、逃にげてしまふ。北海道ほくかいだうへゆくと純粹じゆんじゆの狼おがすんでゐる。(内地うちで狼おと云ふの豺やまいぬとのことである)。

野猪やちよも北海道ほくかいだうを除のぞけば、大抵たいていの山やまにゐるが、晝ひるは大抵たいてい日當りひあたりのよい灌木くわんぼんの茂しげつた下に眠ねつてゐる。彼かれの活動時期くわつどうじきは夜よである。

人間にんげんに害がいを加へるものと云つては以上いじやうあげたもの倍ぐらゐであるが、さう云ふものゝ出でさうな所ところを通とほる時は、軍歌ぐんかを歌うたふが、鈴すずをふつてゆけば、逃にげてしまふ。夜よは、火ひをたいておけば、恐おそれて夜



營地へ近づいて來ない。

鹿は至る所の山中にすんでゐる。之はやさしい獸である。

蛇は、高い山にはゐない。山麓には、まゝ大きい奴がゐるが、警戒すべきは、マムシである。之は紺色の香を嫌ふから、防ぎ易い。若しマムシにかまれた時には、其部分より少し上の方を手拭ひでしぼり(堅く)、ナイフで、かまれた箇所を少し切つて血をしぼり出し、ヨヂウムを塗つておけば、大抵は大丈夫である。

鳥の種類も多いが、文學的なのは、佛法僧であらう。(武州高雄、紀州高野其他高山にすんでゐる)

雷鳥は高山鳥として善く知られてをる。

今日禁鳥である。雷鳥は、山の晴雨計で、この鳥が出てくると、霧がかゝつたり雨が降つたり山があれたりする。元來弱い鳥だから、鷹などの横行する天氣のよい時には、隠れてゐて、天氣がわるくなると出てくるのである、鷹は、雨が嫌いだから、山があれさうになると姿を隠してし

まふ。

雷鳥の子をつれ御花畑哉

魚としては、いはなと、やまめが、高山の溪流にばつこしてゐる。

### 高山と氣象

氣温は、海面を抜く高度に應じて、次第に遞減するのである。高度に對する氣温遞減の割合は平均約百米經る毎に、攝氏一度を減するのである。之は原則ではあるが、空氣の濕度、若しくは季節、場所に依つて、多少の差のあることは、云ふ迄もない。アンデス山に於ける觀測の結果によれば、百米毎に〇・五三を減じ、アルプス山に於いては〇・五八を減じ、ヒマラヤ山に於いては〇・四七を減ずる割合になつてゐる我が信州の御嶽山に於いては、百米毎に〇・五二、富士山に於いては〇・五九の割合である。夏季御岳山頂に於ける平均氣温は八・九五であり、山麓黒澤の平均温度は二・〇五である。



高山の氣象は、變化が急激である。今小春日和のやうな暖かさであつても、暫らく後には氷點下になると云ふことがある。高山は又風が多い。そして風が強い。筑波山に於いては、一秒時百〇二米の風が吹きまくつたことがある。

山頂は、朝早くきはめるやうせよとは、朝早くは雲も少なく、展望をほしいまゝにすることが出来るからである。

我が國には、雪線以上に聳える山がないからして、氷河は存在しない。雪溪はあつても、氷河は存在しない。我が國に於いて、北緯三十度邊で、四千二百七十八米以上の山があれば、雪線に達するわけであるが、富士山ですら、三千七百七十米なのだから雪線の存在しえやう筈がない。

## 山岳病

登山者が往々かゝる病氣は、山岳病である。之は、空氣が稀薄になる結果かゝる病的現象である。

高い所へ登るに随つて、氣壓が減じてくる。夫れにつれて、空氣中に含まるゝ酸素の量が減じてくるのである。この現象を表示してみると。

(海面上の高さ)

(バロメーターの壓力)

〇米	七六〇
五〇〇	七一六
一〇〇〇	六七〇
五〇〇〇	四〇七
九〇〇〇	二四六

酸素の量の缺乏は、呼吸數と脈搏の増加を促してくる通例我々の呼吸數は二十五位であるのに四〇〇〇米の地點に至ると四十一位になる。又通例我々の脈搏數は八十二位であるが、夫れが四〇〇〇米の地點に達すると百四十一位となつてくる。

空氣の稀薄と、過勞の筋肉動作と高山空氣に不馴化の結果によつて、山岳病は起るのである。相當の体力あり、健康體の人だと、幾分か不快を感じる位の程度ですんでしまふが、中には、



頭痛、倦怠、眩暈、前進不能症等を起すものもある。

けれ共、山岳病は、決して心配する程の病氣ではないからして、安静にして、おけば大抵はケロリとなほつてしまふ。

若し、具合が悪くなつてきたらば、瘦せ我慢をせず、歩行を中止せしめ、そして絶対に休息させるのである。頭部を高くし、腹部を暖め、心臓部を摩擦してやり、口内へ仁丹、清涼丸の如き清涼劑を入れてやるとよい。

少しく重い時には、アグリ、ブロナトールの如き鎮靜藥を與へるとよい。

山岳病は多くの場合、酒と煙草は、慎まなければならぬ。

猶登山中は、絶対に、酒と煙草は、慎まなければならぬ。

## 登山法の種類

登山の方法には、

- 1、上下法、
- 2、縦走法、
- 3、横斷法

と三つの種類がある。上下法は、初進者のやる可き登山法であつて、一の山へ登つてもとの道を下山すると云ふ方法である。例へば大宮口から富士頂上へ登つて、再び大宮口へ下山すると云ふ方法である。これは、幼稚な登山法であつて、初進者に適するのである。

縦走法は、山の峯傳ひに、幾つかの山を踏破する方法であつて、昔は、出羽の三山がけ、(羽黒月山、湯殿)越後の八海、中ノ岳、駒ヶ岳の三山がけ、吉野より熊野への山越え位で、其他には殆んど行はれなかつた。この法が盛んに行はれるに至つたのは、十四五年この方のことである。

縦走法は、山の峯傳ひに、山上を旅行するのであるからして、比較的少ない日數で、多くの山々の峯を踏破し得る便利がある。一度縦走を試みると、上下法などは馬鹿馬鹿しくて、とてもやる氣にはなれない。

縦走法を試みるに當つては、我が身を襲ひくる、種々の危険に豫め備へなければならぬ。大暴風雨の襲來、天候の急變、下は千仞の谷と云ふ急壁を渉ること、笹やすゝ竹の密生した中を押し



分けたり、灌木の密生した中を突破する事は覺悟せねばならぬ。矢を射るやうな急流も突破せねばならぬ。是らの危険に對する用意を怠つてはならぬ。少しく注意すれば、是らの危険は少しも恐るゝに足らぬ。婦女子と雖も容易く之を實行することは出来るのである。

この縦走も少しく慣れてくると、「サツパリ面白くなつてくる」今一息苦しい目にあひ、危険をおかさぬと、山へ登つた気分になれなくなつてくる。茲に於いてか一部の人の間には、谷を遡つて一山の絶頂を究め、更らに別方面から、谷を下り、更らに他の峯を究めると云ふ方法が行はれてくる。これ余輩の所謂横斷法である。但しこの横斷法は、

- 1、斷崖絶壁及び急傾斜の雪溪登攀
  - 2、急流の徒涉瀑布の通過
  - 3、密林灌莽の潜行
  - 4、猛獸毒蛇の撃退
- 等の危険が伴ふこと勿論である。青年諸君は宜しく、縦走法を試みて、心身を鍛練し、少しく山

に就いての經驗がついたならば、横斷法を試みる可きである。

## 登山心得

### 1、登山の準備

富士や御岳は登山學校の幼稚園であるからして、富士や御岳へ登山したと云ふ丈の經驗では日本アルプスの峯々を突破するには不十分である。さう云ふ程度の人には余輩が記述する所に随ひ充分登山の豫備知識を獲得した上で、縦走又は横斷を執行すべきである。

1、登山の目的に依つて、適當の計畫を立てること、登山の目的は人に依つて皆違ふのである。動植物の採收を目的とする人、精神修養を目的とする人、一々あげつくせぬ程目的は様々であらう。其目的に隨つて、山を選ぶことが肝要である。

2、登山計畫を立てるに際し、(一)登山せんとする山岳に關する地圖(五萬分ノ一地形圖)地誌其他の記録、登山の經驗者に就いて山の實況を充分に研究すること、(二)地圖は陸地測量部發



行五萬分ノ一地形圖を使用すること、猶國有林、御料林等に就いては、所轄大林區署又は林野管理局又は出張所へゆき、所藏の圖面を研究すること。

3、一度も登つたことなき山は必らず案内者を同行すること、是は必らず怠つてはならぬ。

4、順路及び日程の豫定を研究の上定めること。(一)山の旅行は平地と違ひ意外に行進に手間どることがあるからして、充分時間の餘裕を見込んでおかねばならぬ。山が暴れた時には、二日三日行進不能となる事が多い。それ丈の備へをしなければならぬ。(二)歩行時間は一行中の最不健脚者を標準とすること。(三)成る可く日没前少なくとも二時間前に、天幕を張る地點を選定せねばならぬ。(四)高山の頂は午前中は多く好晴であるが、午後はえて濃霧に襲はれ易いからして、午前中必らず頂上を究めること。

5、其他の注意 (一)目的地の天候に就いて、氣象臺へ問ひ合せること。(二)案内者人夫ありや否や。(三)地方病流行病ありや否や。(四)食糧品を販賣しをるや否や、緻密なる注意を要する。

### ロ、登山の服装

登山の服装は、富士や白馬の如く遊山的に登山しうる所は、和服でもよいが、苟も縦走でもしやうと云ふには、洋服に限る。背廣、詰め襟服、半ズボンが最も適當である。カクシはなる可く多くつけ且つ覆ひをつけておくやうにすること。其他是非共身につけるものは、

- 1、丈夫なバンド
- 2、脚絆(又はゲートル)紺色をよしとす。登山靴又は草鞋、(草鞋は堅牢なるもの一日二足の割合に準備すること。)
- 3、靴下は黒色、草鞋掛なら紺足袋が必要である。紺足袋はサシコにして、可成丈夫にせねばならぬ。爪先とカ、トは特に丈夫にせねばならぬ。足袋も靴下も數枚用意せねばならぬ。
- 4、シャツ(オヴァースエーターなら一枚でよし)腹巻は、保温の上からして是非共必要である
- 5、露營用として、毛布類を必らず持參すること。
- 6、山には雨がつきものであるからして 頭巾ツキ外套、合羽、蓑蔭の中何れかを用意せねば



ならぬ。余は車夫や郵便配達ができる桐油の雨合羽を使用してゐるが、經驗上成績は一番よいやうである。

7、帽子や笠は、何れを撰むも適宜であるが、毛織のソフト製が一番成績がよい。顎紐をつける事を怠つてはならぬ。

8、丈夫なる手袋を用意すること、熊笹と篠竹、匍松の中を分けて行く中には是非共必要である。

備考 縦走又は横断をせぬときは、これ程の準備をする必要は無い。

## ハ、登山の必需品

1、登山に必要な品物を入れておく爲めに、登山フクロは是非用意せねばならぬ止むを得ぬ場合には肩掛靴でもよいが、防水性のものでなければ可けない。

2、杖(堅固な櫛か櫛を材料として長四尺五尺位につくるが適當である)を用意すること。

3、時計、磁石、呼子笛、地圖、歩數計、手帖、萬年筆、半紙類(チリ紙をも)名刺、葉書、ピ

ストルの類は必らず用意すること。時計と磁石と地圖とは、如何なる場合にも手から離すことは出来ない。

4、ナイフ、鋏、毛抜の類、深山の跋涉に際しては洋刀、山刀、鋏、鋸、鎌が必要である。

5、露營用の天幕(分解しうる輕便なるものをよしとす)

6、アルミニウム製飯盒、鍋、バケツ、洗面器

7、水筒、アルミニウム製コップ

8、近眼の人は、掛替の眼鏡

9、燐寸(しめらぬ桐油紙で包みブリキ罐に入れること)蠟燭、火打石(萬ヶ一を慮つて)附け木

石油等を用意すること。

## ニ、登山の食糧

1、梅干を入れた(腐敗を防ぐことが主たる目的)握飯

2、露營用としては、白米一日四合あてに用意し、餘分に携帯すること。七日の豫定の時は、





少なくとも十日分用意すること。

3、鯉節、ホシイ、軍用パン、メリケン粉、蕎麥粉、切餅の類を準備すること、余は鯉節一本で、六日間露營をつないだ経験がある。

4、副食物として、鹽、梅干、味噌、漬物、干物の類

5、氷砂糖、ミルクキヤラメル、鐵砲玉、飴等疲勞又は渴を醫する間食物を用意すること。

6、焼酎、ウキスキー、ブランドー等の興奮用藥材を準備すること。

7、各種の藥品を準備すること。余輩が、幾多の経験によるに、藥品としては、

木曾御岳山發賣「お百草」

と、繃帶、ガーゼ、絆瘡膏、ヨジウムを用意すれば夫れで充分である。「お百草」は腹痛、頭痛、打撲傷によし、其上切傷には不思議な程特效がある。毎朝之れを飲めば、食アタリ、水アタリをする心配は絶対にない。山登りには、「お百草」を用意すれば、夫れで充分であると斷言する。お百草は牛込細工町大黒屋と云ふソバ屋で賣つてゐる。一袋僅かに二十錢。低廉にして萬病にきく

こと、唯々驚く許りである。

## ホ、天幕生活

苟も縦走、横斷を企てるには、天幕を用意せねばならぬ。野營用の天幕としては、中央に一本の支柱をたて、圓錐形に張るものが理想的である。天幕の代用としては、油紙をつなぎ合せて間に合はせることもある。勿論不完全なる事は免れぬ。野營地の位地は、

1、森林の中の谷川のほとり

2、水か雪かに近く燃料に乏しくない平坦の地

が理想である。この條件を忘れずに、之れに近き地點をさがさねばならぬ。

1、絶壁の下

2、露出した山頂

は絶対に避けねばならぬ。暴風を避けるには、山稜の一角にしくはない。山がアレル際には、二日でも三日でも暴風の止む迄根氣よく待たねばならぬ。敷物用としては、防水布、油紙、又は萱



羊齡類の軟かな葉の密なる枝をよしとする。露營には夜を徹して焚火をすることを忘れてはならぬ。

### へ、飯をたく注意

高山では、米は煮炊器の蓋を布で密閉し、其上に石などの重しをおくやうせぬと熟煮しない。又米を水にひたし、布に包んで、地面にいけ、其上で焚火をすれば、御飯になると云ふ簡便法もある。

### ト、登山路についての注意

- 1、登山は、細心にして大膽、勇猛にして而も沈着なる態度を必要とする。猪勇はいましめねばならぬ。
- 2、登山者は、山を愛する念を失つてはならぬ。
- 3、山登りには、足装束に氣をつけ、少しでも具合が悪かつたならば直すこと。
- 4、山登りの姿勢は、少しかゞみ心地にして、丹田に力をこめ鼻孔で呼吸をするやうにし、歩

調は緩やかにせねばならぬ。無暗に休息をしてはならぬ。成る可く休息を少なくし、緩くりと歩みを続けねばならぬ。

5、水は止むを得ぬ時の他は飲まぬ様に習慣をつけること、水を多量に飲むことは、疲労を増すし、胃腸を害する。

6、道筋を撰ぶに當り谷筋、中腹、峯筋の中、谷筋と峯筋は比的に安全である。

中復路には往々崩壊地があるからして、餘程注意せねばならぬ、猶山中には、樵路、炭焼路などがあるからして、餘程注意をせぬと、迷路に入る恐れがある。

7、山登りには、足敷は成る可く經濟的にし、登り道は一寸でも高所を踏み、下り道は一寸でも低所を踏むやう心がけること。

8、心臓の鼓動はげしき時は休息して、深呼吸を徐むるにすること、山酔ひにかゝつたならば焼酎、ブランデー等を少し飲むこと、用便を我慢することは絶対に禁物である。

9、測圖の心得あるものは、見取圖を取りつゝ行進することが必要である。



10、急峻なる下り路は、登りよりも疲勞が大であるからして（精神的、肉體的）餘程の注意が肝要である。急がすゆつくりと下ること。

11、溪流の徒涉は、水幅の廣き地點を擇び、必らず狭い所を徒涉してはならぬ。狭い所は深瀬に陥る虞れがある。又渦流の徒涉は危険であるからして成る可く避けねばならぬ。激流を徒涉するには、

「一行三四人づゝ一の小丸太又は竹の棒を流に並行して把持し、徒涉に強き者最下流に立ち互ひに相扶けて」

渡るをよしとする。急流は流に随つて斜に渡るをよしとする。

12、山中の跋涉に際しては、往々野獸の陷穽、及び裝置銃に傷害せらるゝことがあるからして注意せねばならぬ。

13、小枝、灌木、蔓草を力として飛び下り又は攀登せねばならぬ時には、其強弱を試みた後にすること。

14、深山には、往々温泉の噴出する箇所がある。（俗に地獄又はカマ）其附近は地盤が薄弱であるからして、近よらぬを可とする。

15、飲用水を取りに谷間へ下る時は、歸路に迷はざる様、適宜所々の樹木の枝を折るとか、紙片をはりつけるとかして、萬一に備へねばならぬ。（山路深く分け入る時も然り）

16、古小屋の中には往々害蟲があるから、棒を挿入して、検査した上でなくては、入つてはならぬ。

17、蛇、蠅は黒色のものにたかり易い。其群集に襲はれた時は、潤葉樹の葉つきの木枝で打拂へばよい。

18、蜂類は、篠藪、荆棘の密生せる日當りよき場所に多い。蜂軍の襲來を受けた際には、地に伏して之を避くるをよしとす。蜂類其他毒蟲に刺された時には、アンモニア又は、お百草をつけるをよしとする。

19、蝮は、谷間、山腹、岩上、樹枝、熊笹等に蟠居してゐる。若し咬まれた時には其部分をナ



イフで少し切り、血を絞り出し、そこへお百草をつけておけば、心配はいらぬ。  
20、焚き火は

探暖、煮沸、夜間の湿気乾燥、蟲類、獸類の襲來防止、遭難時に於ける信號用として行ふのである。周圍に地皮物なき地點で行はぬと山火事になる恐れがある。焚き火の際の焚き付けには、乾きたる小枝篠がよい、湿つてゐる時は生木の皮を削つて使へばよい、焚き火してよく燃えるものは、

檜、松、唐檜、白樺、樺、イヤタカヘデ

の類である。

(備考)

### 谷筋の特徴

- 1、谷間の道は一般に勾配は緩かであるが、奥に至ると急峻になるを常とする。
- 2、屢々溪流を徒涉せねばならぬ。

3、往々にして、不時の出水がある。往々轉倒木、巨巖、瀑布などがあつて路をふさぐことがある。

4、飲用水を得る便利がある。天然野草に富んでゐる。荆棘、篠竹等の障害物は少ない。

5、山水の奇勝に富む。

### 峯筋の特徴

1、初めは急勾配なれど、峯傳ひとなれば、比較的緩勾配となる。

2、道を迷ふの心配が無い。

3、山地の大體の形勢を看破することが出来る。

4、飲用水を得るに不便である。

5、風雨襲來の際には、激甚なるを常とし、且つ濃露多く、急激に氣候が變化することが多

し。

6、下り道に於いて進路を誤る恐れがある。



7、荊棘、雜草、篠藪等の障害物が多い。

8、往々無木地の爲め、劇しき日射に苦しめらるゝ困難がある。

### 遭難、に際しての心得

遭難に際して、沈着なる態度を失つてはならぬ。人間は中々死なゝいものである。落つて事を處せねばならぬ。

### 1、險惡なる天候に遭遇したる時

(一)濃霧の襲來を豫知したならば、岩蔭又は樹林地へ避難すること。

(二)濃霧容易に消散の見込なき時は、現地で露營すること。濃霧は寒冷を伴ふからして、直ちに防寒の用意をすること。

(三)暴風雨に際會した時は、風當り強き峯筋をさけ、可成立木地、又は岩蔭に避難せねばならぬ。暴風雨のやむ迄二三日でも三日でも、原地を動いてはならぬ。

(四)迅雷の際は、孤立木、大木、林縁は絶対に避けねばならぬ。

### 2、食糧が欠乏した時には、

(一)比較的健全者に、食糧の殘餘を給して、山麓又は山小屋と聯絡をとらしむること。

(二)饑餓を覺ゆる時は、帯で腹部を締めること、靴の革、其他の革類を削つてしゃぶれば、急場は凌げる。

(三)愈々窮した際には、鳥獸の他、有害ならざる植物を採つて食すること。

杉、松の亞皮、ウルシノ木の若芽、タマイチゴの實などは好食料である。山には、天然の食糧が澤山にある。食糧缺乏何のそののである。

### 3、道に迷ひたる時には、

(一)道に迷ひし時は、磁石に依つて方角を知り、周圍の地形に依つて、自分の所在地點を圖面上にて判断し、更らに進路を求めること。

(二)谷筋に沿ひ下り路をとれば多く山小屋又は人家へ出る。場合に依つては、峯へ上つて方角を定むるも一法である。



(三)道を失ひ夜になつた時は、其地點で一夜を明かすこと。

#### 4、火器に窮したる時は、

(一)双眼鏡のレンズを以て、太陽の光線より導火すること。

(二)檜の木片を摩擦して發火せしむること。

#### 5、山火事に逢ひたる時は、

(一)谷間の方へ遁ること。

(二)風に反對の方向へ逃げること。

#### 6、猛獸に出逢いし時は、

猛獸をよける方法は、行進中(一)高らかに雑話すること。(二)鈴、ラツパ、法螺貝、呼子、笛を吹くこと。(三)喫煙をなして進むこと。

である。深山では、道のカーヴする所などで突然猛獸に出遭ふことがある。さう云ふ所では必ず軍歌を歌ふやうにすること。もし出遭ふた際には、

(一)太き樹木に登ること。熊狼などは、樹木へ登つてくるが、若し登つて來たならば、鉈を以て其手をたゞき切ること。

(二)突然熊に出逢つた際には、直ちに佇立して、丹田に力をこめて、睨みつけると、熊は横に逃げてしまふ。

(三)猛獸に襲はれた時は、赤色の布片を杖にかけて地面に立てるか、又は洋傘を擴げて、地上におき、自分は横道へ逃げると云ふ方法もある。

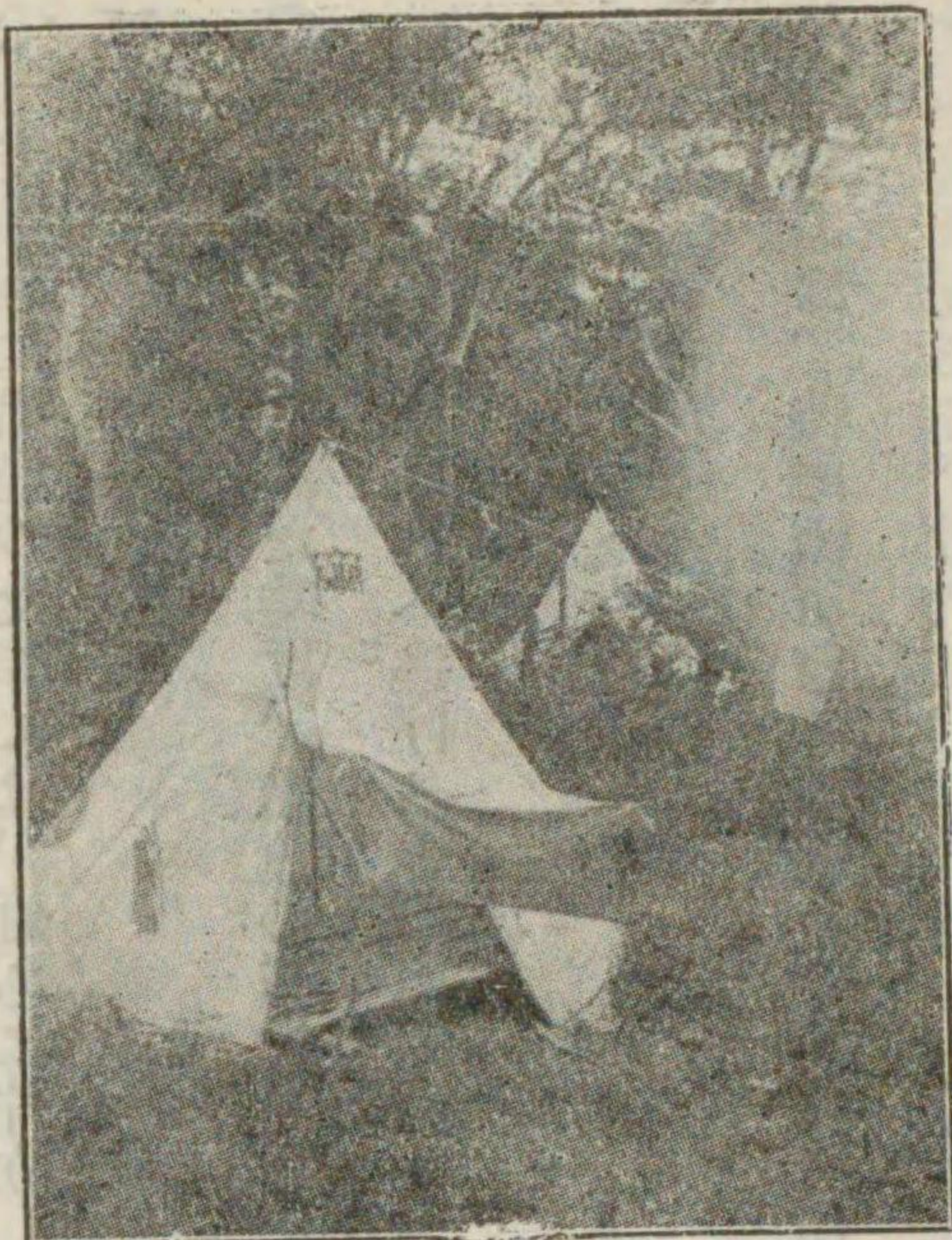
### 冬の登山

冬の登山は、特に慎重なる準備を要する。慎重なる準備を怠つたが爲めに不慮の禍のため一命を失ふことがある。けれ共、準備さへ十分にしていれば、決して心配はないのである。

冬の登山について特に注意すべきことは、  
1、目的の山について十分研究すること



2、五萬分の一地形圖、俵つて、地形を研究し、溪流に、青色、其他要所々に色を入れて、見やすくして置くこと。



活生幕天の部行旅大帝都京

が必要である。

6、食糧其他の注意は、前に説明した所を一讀せられたい。唯、飲料として、コ、ア（砂糖と

ウキスキー混入）を魔法壘へつけて、肌につめて置くこと。

7、雪の山は、スキーを利用する。

### 女子登山の支度

服装は、洋装が一番便利です。もし洋装の嫌いな人は、和服でもよいですが、何れにせよ、毛の腹巻は巻きつけなければならぬ。山で腹を冷やすことは、恐ろしい結果を生むのですから、特に注意しなければならぬ。脚は、靴よりも紺足袋、紺脚絆を用いた方がよいやうである。露營する場合には、毛布を持つてゆくことを忘れてはならぬ。其他の點は、男子の支度と毫も異なる所はないのです。

### 興味ある岩のぼり

登山の普及と共に、岩のぼり（ロップ、クリンミング）の研究が盛んになつてきた。之れには、



危険は伴うが、萬難辛苦の揚げ句山の頂きに着た時の愉快は格別である。到底筆紙にあらはせるものではない。

二人乃至四人の者が同心一體となつて行動するのである。(四人以上は危険、先頭に技術に熟練した者が立ち、確實に足場と手がよりを探す。何時も兩足の足場と、片手の手がよりとの三點を支點として、他の手を以て、新支點を探すのである。支點の悪い場合にはハツケンを打込んで、支點を確實にする。其間に、他の者は、自分の身體を支へ乍ら、先頭者の動作を助けるのである。先頭者は一段登りきると、第二の者との間の繩を岩角にまきつけて、上から登山運動に援助を與へるのである。この間の共同動作に少しでも、缺陷が生ずると、一大事件が突發する、命がけの共同動作である。

登りも危険だが、下りは猶危険である。

下りの時は、登る時の先頭がしんがりをつとめて、急がず下るのである。岩壁の傾斜が緩やかな時には、前向きに急な時は後ろ向きになつて下るのである。

岩のぼりを行ふに當つて注意すべきこと。

- (1) 如何なる場合にも決して急がぬこと。一歩々々慎重なる注意を以て萬全をきして登ること。
- (2) 經驗ある人について十分コーチをうけ然る後に試みること。
- (3) 十分經驗を積むに非れば、未知又は、未だ人の登らざる岩壁をよぢのぼらざること。
- (4) 解氷期、雨後などは、なる可く岩登りを試みざること、萬止むをえず試みる時は、十分なる注意を要する。
- (5) 岩壁の岩質も驗査し、外見が堅固さうでも、質の脆いものには決して登らないこと。
- (6) なるべく好晴の日に十分時間の餘裕を以て行ふこと。
- (7) 登攀に際し、少しでも危惧の念を生じた時は、必らず中止すること。

### 登山支度品定價表



左に、三越呉服店及び、各種運動具を製造販賣してをる美津濃運動具店其他における登山支度品の定價表を掲げておく。

三越 服店運動具部

一、天幕	瑞西製	一五、〇〇	六五、〇〇 <sup>至</sup>
一、アルペンストック	瑞西製	一七、〇〇	二〇、〇〇
一、ルックサツク	和製	一七、五〇	二〇、〇〇
一、靴	瑞西製	一三、〇〇	二五、〇〇
一、飯盒	和製	五、〇〇	一五、〇〇
一、錠		一一、〇〇	二五、〇〇
一、ナイフ		一、七〇	
一、カンジキ	和製	一、〇〇	九、〇〇
一、クツキングセット	瑞西製	一、三〇	一、二五
		二、六〇	
		一四、五〇	

美滿津運動具店登山用具定價

リニークサツク (登山袋)	防水生地	五、〇〇	一〇、〇〇
アルペンストック (杖)		三、〇〇	九、〇〇
覆皮		一、〇〇	
カンジキ	草革用	一、〇〇	三、〇〇
同靴	用	二、〇〇	六、〇〇
登山服	上下	五、〇〇	二〇、〇〇
帽子	防水生地	一、〇〇	三、〇〇
登山記		一〇、〇〇	二〇、〇〇
ゲート		四〇	一、五〇
飯盒		一、五〇	三、〇〇
湯		二五	一、〇〇
歩暗許		一、〇〇	三、〇〇
スバル		五〇	八〇
外薬一式箱入		二、〇〇	五、〇〇
歩數計		一〇、〇〇	二五、〇〇



手 斧  
 ナ イ フ  
 防水 マツチ  
 テント用 洋燈  
 同 ロック用  
 腰 掛  
 ターポリンテント  
 フレツザーカヌーテント  
 アマゾンテント  
 水 筒  
 組立 小道具  
 麻 ロープ  
 呼 笛  
 プレストン炊事具一式  
 ポケットクックキット  
 ポーイスカトウ炊事具

三、〇〇〇……………一五、〇〇〇  
 五、〇〇〇……………一〇、〇〇〇  
 一、〇〇〇……………二、〇〇〇  
 五、〇〇〇……………一五、〇〇〇  
 二、〇〇〇……………八、〇〇〇  
 一、五〇〇……………三、〇〇〇  
 三、〇〇〇……………四〇、〇〇〇  
 四、〇〇〇……………六〇、〇〇〇  
 三、〇〇〇……………八〇、〇〇〇  
 五〇……………三〇〇  
 八〇……………一、五〇〇  
 三〇〇……………一五、〇〇〇  
 一、五〇……………一、〇〇〇  
 一〇、〇〇……………二〇、〇〇〇  
 七、〇〇……………一二、〇〇〇  
 五、〇〇……………一五、〇〇〇

ルユークサツク

AA スイツツル式

A B C D E F G

瑞 西 製 登山袋

一五、〇〇〇  
 八、〇〇〇  
 七、〇〇〇  
 六、〇〇〇  
 二、五〇〇  
 二、〇〇〇  
 一、八〇〇  
 一、三〇〇  
 二八、〇〇ヨリ三〇、〇〇

竹製登山杖

大 長サ約一米四〇センチメートル 太サ三センチメートル  
 中 長サ約一米 太サ約二センチ 提皮附  
 同 ステッキ型上部曲リ長サ一米  
 アルペン ステツク(和製)

一、二〇〇  
 六〇  
 六〇  
 七、五〇



(舶來)

### 登山服装

防水布製特製綾地(上下一組)大

同 軍服地(同)

カーキ 軍服地(同)

登山用半パンツ新式ポケット付

防水布製大

軍服地製大

カーキ色及自綾地製

カッターシャツ

登山用にも 亦常時にありては事務用にも

金巾白地

縞生地

無地

一六、五〇ヨリ一八、〇〇

九、五〇

七、二〇

六、五〇

二、三〇

一、八〇

一、二〇

一、七〇

二、五〇

二、五〇

### ゲートル

狐逸製(ゲートル)

和製

ラシヤ製

折返シ沓下

二、六〇

一、五〇

一、三〇ヨリ三、二〇

### 炊事用具

メタ燃料大

同 中

同 小

炊事具(中メタ付)一組

コーヒ鍋

玉子煮拔器

三ッ脚(メタ燃料脚)

四ッ脚(同)

二、五〇

一、二〇

六〇

三、五〇

一、〇〇

二、五〇

八〇

一、六五



軍隊飯盒(アルミニウム)  
 湯 呑  
 折疊み式(アルミニウム)  
 大炊事具(獨逸製)一式附  
 巾 同 (同)  
 小炊事具(獨逸製)  
 磁 石(同)  
 信號 笛(舶來和製各種)  
 登山用斧(瑞西製)  
 同ナイフ(同)

以上美津濃運動具店

一、六〇ヨリ二、四〇  
 二〇  
 六五  
 六、五〇  
 五、五〇  
 四、八〇  
 三、八〇ヨリ四、〇〇  
 六、五ヨリ一、八〇  
 六、〇〇  
 三、〇〇ヨリ五、〇〇

米國製最新形  
 グランドオーバー(茶色)  
 獨逸政府專賣特許  
 ヒーラ萬年筆マツチ  
 米 國 製

金貳拾八圓

金壹圓貳拾錢

登山用防水帽子 一個  
 米國製陸軍拂下ゲ純毛 一着  
 冬の登山向上着  
 同 ズボン (但シ短)

金壹圓五拾錢

金四圓五拾錢以上

袴金參圓八拾錢

以上日本商會(神田須田町二七)

携 帶 天 幕

▲山岳用テント

三人用 金五十圓  
 四人用 六十七圓

六人用 金七十九圓  
 八人用 金九十八圓

▲家型テント

二人用 金三十四圓  
 三人用 金四十二圓  
 四人用 金四十八圓

五人用 金五十六圓  
 六人用 金六十三圓

▲三角型テント

一人用 金十八圓

三人用 金三十四圓



二人用  
リュックサック

金二十四圓

四人用

金四十圓

スリーピングバック 六、五〇ヨリ  
六、五〇ヨリ

バケツ

一五、〇〇マデ  
二、〇〇ヨリ

以上片桐商店(京橋新富町四丁目)

山岳用屋根型テント 一三、三〇  
山岳用圓錐型テント 二一、七〇

六三、五〇  
五〇、〇〇

登山用上衣

八、〇〇

スリーピングバック

七、〇〇

登山用雨具

四、八〇  
六、五〇

以上篠原防水店(神田區猿樂町一ノ三)

### 清澄山 房總線

安房の清澄山へゆくには「房總線の勝浦驛で下車するが便利である。」

勝浦小湊間四里(自動車一圓五十錢、)

小湊より清澄山迄二里半 (途中一里、天津迄は馬車自動車の方がある)

山は海拔千二百七十尺、山頂の風光は、天下獨歩の感がある。寺は光仁帝寶龜年間の草創、日蓮上人の修練場である。舊記に、「太古天富命鎮座の靈地にして、山上の池清く澄み、池邊の大柏夜なく、光を發するが故に、清澄又は、千光と呼べり云々」と、寺前に旅館數軒あり。

【旅行案】 勝浦に下車、清澄の靈蹟をたづね山上の旅舎に一泊し、翌日、山路五里を踏破して、

久留里に出て汽車にて歸京する案。餘まり行はれて居ないが、我らの實驗上、趣味大なることがたしかめられた。

「天津町」に至る。此の間、鴨川町の北端直ちに松崎川を涉り、東條村大字廣場に至れば、白旗社の古跡を過ぐ地は昔、源頼朝の當國に流落せし頃、此處に上總介廣常の消息を待ちたる處



といふ。社傍に一殘株あり。旗かけの松と稱す。地を待崎又は松崎と稱す。町は人口凡そ八千を有し、千葉縣内海産の收穫最も多きところにして、町には商家、漁家軒を並べ、夏季は鯉節の製造最も盛んにして、秋冬に入れば、秋刀魚、鱧の漁獲を専らとし、下總の銚子と兩々相對して繁榮を極めたり。町の北方約二里にして

【清澄山】あり。山は安房の第二峰にして、支嶺の重疊たる九十九谷の稱あり。本峰は海拔一千二百七十三尺、支嶺の中寶珠山は千二百二十五尺、之に順じて、富士山、如意山、金剛山、露地山、獨鈷山、鷄葬山等皆眺望に勝れ、空晴れて日の光明らかなるの日本嶺の絶嶺より支嶺を繞らして四顧せば、南には伊豆の島々、西には富士や箱根山、北に筑波の山つゞき、東に小湊の小市街など一望の中に入る。山中の村落を清澄といふ、天津の町に屬す。百戸の民家、樵に非んば建具を業としてまた旅館數戸あり、此の山の頂上前額に

【清澄寺】あり。登路はさまで峻ならず、天津町より直ちに車を通じて山門に達すべし。境域凡そ一萬五百坪、古松老杉亭々として之を圍み、就中杉樟の巨大なるもの多し。本堂は葺くに銅

瓦を以てし、十五間四面、觀音堂、鐘樓、青銅寶篋塔、方丈等あり。山の西方一岩石の上にあるは朝日堂にして、日蓮上人が旭天に向つて始めて南無妙法蓮華經を稱へたる所といふ。山は太古天富命鎮座の靈地にして山上の池清く澄み池邊の大柏夜なく光を發するが故に、清澄又は千光と呼ぶ。後幾百年神祠全く廢れ、人跡を絶つ事久しふし、孝仁帝の寶龜二年、一僧山に入り、山上の柏を伐りて虚空藏の像を刻し、一字を建て、之を安置し千光山金剛寶院清澄寺と號す。明星水、寶珠、摩尼、如意の三嶺の名はその跡を傳ふるものなりといふ。仁明帝の承和三年慈覺大師來つて之れが中興となり、今の靈地山に壇を築きて修行し、獨鈷山と名け、鬼類を滅除して鷄葬の名を興へ、不動を安して金剛淺間菩薩をおきて富士の山名を作る。堀川院の嘉保三年雷火にかゝりて僧坊悉皆烏有に滅したるを、當時の國主源親元之を再興し、承久の頃北條政子は、寶塔輪藏を建立して、一切經、釋迦如來右眼の舍利及毘羯摩天が作にかゝれる赤旃檀の涅槃の像を安置す。後日蓮上人は十二歳にして山に入り、諸佛坊道禪を師として蓮長といひ又上總國眞里谷眞如寺の開山密山禪師、東京増上寺の貞譽、衍譽の二僧正等、諸氏の虚空藏菩薩を歸する處深しと傳ふ。



【妙の浦】 天津町より上總の勝浦に至る途上、國の東端なる小湊の海濱の稱なり。又鯛の浦とも云ふ。地は天津町の東方約一里西方に小湊山を負ひ、往昔日蓮上人の鯛獲を禁じたる處なりと傳へ、今尙士人は多く此の禁を守りて漁するものなきが故、大なるものは長さ四五尺、近海の鯛は多く此處に集まる。小湊は日蓮上人出生の地として古來名に高く、毎年十月十二、十三の兩日には宗祖の會式ありて、遠近の男女蟻集して雜沓を極む。

【誕生寺】 は小湊山の山麓にあり。前は海後は青き山を負ひて、境内幽靜の趣あり。山門を入れば石壘の上、誕生堂あり。中央なるは祖師堂及び本堂、中に本尊十界の木像を安ず。皆運慶の作にして、水戸光圀の寄進にかゝるといふ祖師堂には日蓮上人の像を置く。法弟寂日坊日家の刻する所。名けて祈蘇生の宗祖といふ。日家は第二世の祖。當時佐久間兵庫頭重貞と共に本寺を創建す。此の他境内の堂宇多く、龍王堂、妙見堂、太田堂、朝師堂、清正堂、鐘樓、方丈、庫裡等散在せり。境内湧く所の誕生水は清澄玉の如く、湧きて止まり濁る事なしといふ。堂後より次第に登れば、山の半腹に上人の靈屋あり更に登れば絶巔に物見臺あり。之より上總勝浦の岬は東に

起りて當國の忽戸岬に連り、波太、太夫崎等の勝眼中に集る。顧みれば西には清澄山の峰と重疊する彼方、峰岡牧場青々として傾斜を走らすを見る。下總の千葉町より二十里半、勝山より十里保田より十里、館山より九里半、勝瀬より四里、天津よりは一里餘なり。

【峰岡牧場】 は國の中央に群れる山々の總稱にして、大日山、二ツ山、流光山等、就中最も高く、高峰秀嶺の起伏はよく小湊山絶巔の眺望に委すべし。是等連山の間にあるもの即ち蜂岡牧場なり。廣さ東西四里、南北一里に及び、古來著名なる牧馬場なり。(新撰名勝地誌)

## 鹿野山 【北條線】

上總の名山と云はれる鹿野山へ登るには、北條線佐貫町驛で下車するのが一番よい。山は驛の東二里、内約一里は人力車の便がある。

木更津からは四里半、山麓迄馬車、人力車の便がある。近來自動車の便がある。賃金は一圓五十錢、四十分を要する。



山麓迄道は平坦である。周西驛からもゆける。三里の内二里は馬車の便がある。

山は高さ千二百十八尺、山高からざれ共、山中風景の雄大なると眺望の可なるとは、關八州稀れに見るものである。谷文晁が「名山畫譜」に入れたのも偶然でない。登りは、何れよりするも一里強、道に迷ふの憂へなく、婦女子と雖も易々と登ることが出来る。山頂にある神野寺は後堀川帝の御世、見眞大師錫を留めて以來名刹となつた。草創は聖徳太子と云はれてゐる。門前に旅舎軒を並べてゐる。夏季の好避暑地である。又脚氣患者にとつては、最好の轉療地である。宿泊料二圓五十錢より四圓。

山頂公園より、蜿蜒數里に波打てる九十九谷の谷、陵を見下す風景、十州一覽臺より、(神野寺より関伽井町を過ぎ十四五町)關八州を一目に見る風景は、行人の魂を奪はずにはおかない。

【鹿野山神野寺】木更津町の南方五里、山の高さ千五百尺、木更津よりは小糸川をわたりて人力車を通ず。地は君津郡周南村字草牛の南部、古來總房二國の最高峰たる山の頂より中央部を占むるは即ち、古利鹿野山怒怒院神鹿寺にして、之を左右して民家各二町許を距て、寺域の兩側

地を占む。之れ鹿野山鹿野宿にして、上町(箕輪町)下町(関伽井町)の二に分れ商家、旅館、料理店各々軒を連ね、常に來り遊び詣づる者多く、殊に夏期は東都の人士の暑を此處に避くる者多きが故、佛閣神野寺等と共にその名よく著はれたり。旅館は五六あり、寺は往昔聖徳太子が草創する所の靈場にして、後堀川天皇の元仁年間、見眞大師の錫を茲に留めて、之を鹿野山琳聖院神應寺と稱し、教化頗る廣く、元治元年當山十四世の僧、堯阿闍梨に至り、今の名に改む。境域頗る廣くして正面に本殿之を圍りて大杉明神祠、飯綱權現祠、十二社堂、經堂、護摩堂、阿彌陀堂、六角堂、觀音堂、鐘樓、辨天堂、客殿、庫裡方丈、寶庫等なり。本堂は十間四面客殿、庫裡の梁行二十二間に及ぶといへば、宏壯の觀人目を驚かすも理無きに非ず。本尊は、丈一丈二尺の醫王善逝尊及び軍荼利夜叉明王にして、又聖徳太子十六歳の像を安置す。第一第二のものは、速く千三百年の昔、推古天皇の御宇聖徳太子の彫刻にかゝるといふ。本堂より中門を過ぎ、左甚五郎が作にかゝる表門を出づれば、東南は即ち前述の箕輪町にして町横ぎる事六七町、廣濶幽靜の境は前に開けて人の遊歩の心のまゝなり。所謂鹿野山公園にして、森樹翠苔の香深く地高ければ大



氣すみわたりて眞に仙境の思あり。之れより俯して、蜿蜒として數里を波打てる鹿野山九十九谷の谷又陵を見渡し得べし。公園の背後は稍高き丘岡をなし、上に白鳥神社あり。日本武尊を祀る之れ往古當山に占據し猛威飽くなかりし東夷阿久留王の日本武尊の征討に亡滅したる所なるが故なり。又神野寺内より閼伽井町を過ぎて行けば、十四五町にして、廣さ四五反歩許の一面の美しき芝地あり。春は霞の日秋晴の日、西北には九十九谷、近くは木更津、人見山、富津洲、安房の鋸山、清隆山、下總の岬と濱と遠くは東京横濱の展けたる地勢、浦賀、猿島、走水、更に富士、箱根、筑波、赤城、日光、碓氷等十三州の巒影首をめぐらせば皆一望の中に入るべし。淡き濃き山影時々にして雲を送り、空を浸す海水一碧にして、折々東京灣を通ふ汽船の眠げなる汽笛を滿々たる内海に響きわたらすなり。此の他歩を吝まずして山中を跋涉せば、天神堀の瀑布を始めとして、八尾、八峽、八峰、八塚の名跡ありて、遊人飽く事を知らずして數旬を過すものあり。毎歲五月二十七日、寺にては田圃虫害豫防の祈禱を行ひ當日は遠近の農民先を争うて來り賽し、山中の雜沓甚しといふ。

【鬼涙山】 湊町驛より、頂上迄約二里、全山草山である山は全部草で蔽れてゐる。頂上より鹿野山神野寺まで約一里半。山路だが平々坦々、一日の行遊に適してゐる。日本武尊、東夷征伐の際兇夷鹿野山より遁れて此山に入りつひに尊に追跡せられ進退維れ谷り、鬼の目に涙を流して哀憐を乞うた舊跡だと云はれて居る。山名は茲から起つたのである。

【旅行案】 湊にて下車し、鬼涙山をへて、鹿野山に至り一泊、翌日、木更津に出で、歸京する案、總費用十二圓位

### 鋸山 【保田驛で下車して登る】

房總二國を限る一高峰、海拔千八百八十二尺、山骨(房州岩)露はれて、中腹以上は分れて數峰となり。遠くより望めば、鋸の刃の如くである。これ山名の起る所以、頂上の風景は、近く東京灣の青波、三浦半島の丘陵、遠く、伊豆箱根、富士、秩父、上州の山々峰々を一眸にをさめ「絶佳」と云ふも過言では無い。中腹に、日本寺がある。行基僧正草創の禪刹である。山中一千の羅漢像



は、亦一奇である。保田驛より三十三町、頂上より金谷驛迄約一里、山は、現在公園となつて居るからして婦女子と雖も、登山に苦しみは無い。東京からは、日歸りの好適地である。保田は又海水浴場である。旅館は松音樓、保榮館、物價は甚しく低廉である。

## 富山

岩井驛より頂上迄一里半強山は千百三十尺の小山ではあるが、曲亭馬琴の八犬傳の材料となつてから、其名を知らるゝに至つた。一山樹木翁鬱、頂山から、西方房總の海岸を臨み見たる風景は、探勝の價値充分である。山中に孝謙帝の御世の建立と云はるゝ觀音堂がある。

備考 詩情を味はんとするには、驛より十町高崎温泉に宿を構へ、富山及び伊豫ヶ岳を探勝するをよしとする。伊豫ヶ岳は、海拔九百二十尺、荒川より登路約十二町房州の山々峰々、波の如くうねりたる眼下の丘陵、其間に點々せる村落の白壁、最も畫趣に富みたるものである。

## 温泉案内云ふ。【高崎温泉】

亞爾加里性鹽類泉で透明微臭、神経病、皮膚病、婦人病に特效がある。海岸にあつて波靜かに夏は海水浴も兼ねられる。旅館からの展望も好い、遠くは煙波を隔てて富嶽があり、近くは浮島の青螺横はり、後には八犬傳で名高い富山がある。富山まで此處から約二十七丁。

旅館	室數	收容人員	宿泊料
湯本館	一〇	二二	一圓五十錢乃至二圓五十錢
清涼館	一七	三三	同

## 天覽と多峰主

### 【武藏野線】

東京の郊外池袋驛から、武藏野線の終點飯能迄迄汽車にのる、途中保谷驛からさきに、昔の武藏野の面影が所々に残つてゐて、旅情をそゝること頗る多い。

飯能驛から、(飯能は秩父への入口である)十二町にして、天覽山がある。麓から頂上迄二十三町、頂上に石像の羅漢があつたので、昔は羅漢山と云はれてゐたが、明治十六年に先帝が登攀



し給ふてより天覽山と名を改めた。

天覽山を下りてから、多峰主山へ登るのである。頂上に黒田直邦の碑がある。下駄ばきで、ブラマ々と登るには適してゐる。

### 子の山権現

【子の山権現】 飯能驛より四里。山麓迄馬車の便がある。山は海拔三千尺、外秩父の名山である。麓には、名栗、高麗の清流が、潺々として、一大仙境を形成してゐる。権現は天嘉宗、大隣山天龍寺と號し、今をさること千年の昔し、孝子子之日丸の草創である。山内山麓名所舊蹟に富んで居る。飯能より坂石町に至りて登るものと、原市場に赴きて登るものとある。坂石、原市場迄は、馬車が通つてゐる。沿道の風景絶佳、學生などは宜しく徒歩すべきである。坂石より頂上迄一里十八町、原市場より山頂迄二里八丁。

【二本杉】 關東隨一の稱ある老杉で二本並んで生えて居る幹の周圍は三間もあらう。此の杉に

面白い説話がある。子の山草創の昔子聖は其喫飯に用ゐし杉箸を地上に突き立て、斯山の隆昌であるならば汝杉箸も不死長生し菩提の心を發せよ、と呪すると見れば忽ち根を生じ今日に及んだとの事である。

【阿字山】 本堂の東方に方る小高い所で、其所には大日如來を安ずるの外天龍寺歴代住職の墓所がある。經ヶ峯に續く眺望絶佳の所である。

### 有間山 (武藏野線)

飯野驛から、名栗川に沿うて上り、名栗村大字下名栗から登る、約三里二十一丁にして山頂に達する。登るものも稀れなので、道はあれてはゝゐる。

### 唐澤山 【東武線】

東京市内各中學、各女學校などが、遠足地としてをる。日歸り旅行に適する。



田沼驛より約十丁、佐野の城山とも、根小屋山とも云はれてゐる。藤原秀郷以來六代の居城である。近世江戸時代になつてから、慶長中江戸の火事が見えたと云えので、同六年廢城となつた山は近く、渡良瀬、利根を控へ、遠く、秩父富士の峰々を望み得て、眺望は谿達である。帝都郊外史蹟云ふ。

この山は佐野の城山とも、また根小屋山とも牛ヶ城ともいつて、こゝは天慶の亂の平定者藤原秀郷以來六代の間の居城であつたが、六世頼行の時廢城となり、又治承四年の頃十四世の孫足利家綱の二男佐野庄司成俊が栃木に城を構へて、この山を修築して牙城を築いたといふことである江戸時代となつて慶長年中こゝから江戸の火事が見えたといふので同七年廢城になり、城主信吉は天明年間に春日岡(佐野)に移つた。今も古の城廓の跡が歴々として見られ。

この山はなかく、雅致に富んだ山である。それに近くは渡良瀬川、利根川を控へ、遠く秩父、富士の峯々を望み得て眺は誠に谿達である。

【唐澤山神社】 頂上に別格官幣社唐澤山神社があつて、秀郷を祀り、明治十八年創建である

神まうで云ふ。

別格官幣社唐澤山神社 栃木縣安蘇郡田沼町兩毛線佐野驛より一里半、人力車賃山下迄四十錢

東武鐵道に依れば佐野田沼間三等十一錢、田沼驛より山下迄十五丁、人力車賃二十五錢、山下より山上迄十四丁、人力車賃二人挽五十錢、田沼より徒歩すれば山上迄五十分を要する。

祭神藤原秀郷は、天慶年間、神器を窺つて亂を起した逆臣平將門の非望を挫いた功臣である。古來我國には反逆の臣のない事はなかつたが、偽宮を起して新皇と稱する様な者は一もなかつた。これを思へば將門の謀逆は悪むべく、同時に非望を挫いた公の忠勤は偉大と言はねばならぬ下野椽押領便たる秀郷が鎮守府將軍を拜し子孫其職を繼いで東國鎮撫に任ぜられたのは、その行賞である。又伊吹山の百足山退治の童話で、田原藤太秀郷の名は子供の耳に親しく響いてゐる。

## 金山 (東武線)

太田驛から、高山神社を経て、大光院に詣うで、大光院裏から登る。東京市内各學校の遠足地





である。

大光院は俗に、吞龍様と云はれ、俗信的となつてゐる。大光院神社から、山頂迄十八丁、昔新田氏の城があつたのである。今新田神社がある。山頂から、關八州を眺める風光は壯快である。特に、赤城の裾野の大観は、忘れ難きものである。

帝都郊外史蹟めぐり云ふ。

寶曆明和の頃に八丈縞、縮緬等を製出して、江戸京阪までも輸出し、文化文政の頃には、更に御召縮緬、南部織、玉紬、透綾等をも作りかけた。天保の年中、遙に桐生から獨立して市場を開くに至り、嘉永年間には又白縮緬織の數種を増した。然し、猶當時は大部分は木綿物の産出が多かつたが爲め、維新の變動の際にも、別に市況に影響を被る事は少なかつたが、次第に粗製濫造となり天下の信用を失ふに至り、明治十八年織物講習所、廿七年には組合、次いで工業學校を設立して銳意改良を計つた爲め、技工も巧に、種類も多く、産出も増し、明治四十二年度の調査によるも年千百萬圓の産額に達して居る勿論産地は此町内計りでなく、近郡近村は皆其産地である

(以上足利町)

【太田町】は上野國新田郡の首邑にて舊日光例幣使街道の一驛、郡役所、中學校がある、人口約四千四百史上にても、新田、足利と對照されるが、今日の町勢は足利には到底及ばぬ田舎街である。東武線淺草驛から約二時間と四十分、賃一圓五十錢東武線の相老線は此の地から分岐する。

【高山神社】太田驛から手に取るやうに見える所、一寸小高い天神山の裾にある。高山神社はいふ迄もなく寛永三奇士の一人、高山彦九郎正之を祀つたもの、社殿は明治九年の頃、先帝祭祀の特典を賜ひ正四位の贈位があつた機會に土地の有志によつて建てられたのである。建物は極めて御粗末で規模また至極小である。しかし百二三十年前の昔單身一劍を友として、七寸の鞋に天下を跋涉した志士を祀るには、この質實にして些の虚飾もない祠を却つて甚だ奥行かしく思ふのである。

【大光院】大光院は詳しくいへば義重山大光院新田寺である義重とは新田義國の子寺尾の城主義重の名から、大光とは義重の法名から取つたのである。義重晚年佛教を尊信する事厚く、淨土



宗の開祖源空に師事してその城内に寺を造つた。義重はまた上西入道とも稱へた人である。その後裔に新田義貞が出て、王事に奔走したが、不幸にして越前に戦死して以来、世は足利の手に歸して、新田の一門四方に流離し、新田の莊また衰へ、館舎も寺社も多く足利方のために荒されたのである。さればもと義重によつて創立せられた堂宇も檀家住持全く絶え、ものゝ三百年も荒廢を極めた。後年徳川家康が起つて、その天下一統の業成り、慶長十六年源家を再興して、祖先の冥福をを祈るため、同年十一月芝増上寺の住職觀智國師や土井利勝、成瀬政成等に命じて上州寺尾の舊寺を捜らしめられたけれども當時荒廢甚しかつたため、新たに太田の地を相して同十七年三月工事全く成つた。これが今の大光院である。家康はかくて武藏大善寺の住職吞龍上人を招て開祖としたのである。上人が赴いたのは同十八年四月十三日であつた。こんな歴史によつて創立せられた大光寺、その開祖の吞龍上人、これらに關しては語るべく傳ふべき事が多い、上人は慈悲の權化であつた。恩愛の情至らざるなく、人またこれに靡かざるなき洵に高德の君子人であつた寶物も多く寺に請へは觀せて貰へる。

【金龍寺】 金龍寺の開祖は金山の城將横瀬貞氏で曹洞宗の寺である。本堂には新田義貞の木像堂の後には其墓と稱する、五輪塔がある。その正面に刻して「金龍殿正四位下新田左近中将眞山良悟大禪定門之墓」と傍にまた「延元三戊寅年閏七月二日」との日附も見えるが、勿論これは義貞の戦死地たる越前の足羽から、應永二十四年に改葬したものである。寺は一時盛であつたが、天正年間金山落城の頃から次第に衰へたのである。

【金山】 上り十八丁で急げば一汗かくが、さすがに山上の眺めは絶景である。赤城、榛名、妙義、淺間、男體、笠波の山々、利根、渡良瀬の諸川が霞の裡に黛のやう、銀のやう、その雄々しい姿を見せて、實に吾今山上に立てりとの感を深うする。

山上に鎮座する社は新田神社で、いふ迄もなく義貞を祀り、その學兵に用ひた中黒の旗や義貞が行軍の途上兵士と共に湯を沸かして渴を醫したといふ古釜などの寶物がある。金山はもと新田山と唱へたが、後に金山と改めた。これには傳説がある。昔こゝに城を作つた時、城の一部分の金山彦命を祀つたため、山を金山といふに至つたと、新田庄は新田氏が發祥の地であるから、



古來この金山城に就いても色々説をなすものがあつて、義貞の居城があつたと説くもあるが、そんな證據は一つも残つてゐない。

金山に初めて城を構へたのは兵庫頭岩松明純であらう頃は文明年間今から四百四五十年前の話である。岩松氏は後に家老横瀬氏に城を横領せられ、横瀬氏は由良と改姓して暫く金山城主であつたが、その後城は上杉氏、後北條氏（小田原に據れる。）などの手に歸し、天正十八年即ち家康が江戸城に移つた年廢城になつた。

### 筑波山 (常盤線)

筑波山は、關東平野に聳立する名山である。山は海拔八百七十米（二千八百七十一尺）の一小丘にすぎないが、平野の中にあるがため、山容雄大である。

筑波鐵道開通以來、登山に非常に便利になり、日歸りが出来るやうになつた。筑波驛から、登山所要時間は四時間である。

山には、長男山、五臺山、天竺山、箕面山、栖鷲山等の異名がある。

山は、男體女峰の二つに分れ（女峰の方が高い）てゐる。驛より筑波町へ半道。筑波町は中腹にあり、海拔約二百四十米（七百九十二尺）旅館軒を並べてゐる。筑波女郎衆は、昔から名高い、旅館江戸屋、對寶館（筑波神社に參詣し、茲より、男體道を登る、男體女體の分れ路、御幸ヶ原迄半道。（途中にみな川の川の舊蹟がある）御幸ヶ原より左折して男體の峰をきはめる。こゝに故山階宮御費出に依つて出來た高山氣象觀測所がある。再び御幸ヶ原へ歸り、數丁にして、女體の頂上へ出る。大黒石、天の浮橋等目を驚すものが多い。歸りは女體道を下つて、筑波町へ出る。山中道に迷ふ心配はない。下駄ばきで十分登りうる。

又筑波から、峯越しに、足尾山、加波山へ向つて縦走するも一興である。山中、植物の種類が多い、白瀧近傍の溪間からは、山淑魚を産する。

日本山岳誌云ふ。

【風景】 此山甚だ高からずと雖も、關東沖積平原の中心より突立するを以て、之れを望む甚だ



顯著なり、中腹以上までは悉く花崗石より成り、且つ此山より北方も亦た花崗岩直ちに下野の境上に延縁すと雖も、絶頂のみは閃緑岩に屬す、東京市より（日本鐵道常盤線土浦停車場より北條を経て、五里二十九丁にして筑波町に至る、人力車は筑波町の六七丁下なる臼井まで通じ得）水戸鐵道に頼り下館停車場に下車し、此所より登山するに二途あり、（一）人力車を驅り南々東行し壩垣質の平地を馳する六里、山の南腹筑波町（町の近くに從ひ道路登りとなり漸く峻峻）に出で、登るもの、（二）下館より東南行し町屋（海拔五三米突）に出で、此所より北折し伊佐々村を經、山の北麓羽取村より登るもの、（二）は間道なるを以て、（一）の道途を取ること可、即ち筑波町にて筑波神社に詣で、直ちに登り始む、山麓より中腹以上に到るまで、悉く花崗岩より構造せられ南方東方太平洋よりの風は、水蒸氣を拉し來り、直ちに此山に衝撃するを以て、松、杉鬱蒼、特に山の南側は翠色滴らんとす、町より西峰即ち男體山の山頂まで五十丁、頂は閃緑岩より成る伊弉諾尊を祀り、神社數座あり、頂よりは關東平原の全體、富士、淺間、日光の連山を望み眼界壯宏、精神躍らんとす、男體山より東峰即ち女體山に至る七丁餘、處々に鐵鎖を繋ぎて登山者の

便に供す、女體山頂も亦た閃緑岩より構造せられ、伊弉冊尊を祀り、眺望の壯宏なる、男體山に譲らず、此所より筑波町に下る凡一里、四時半にして上下し得、筑波神社の傍より東に下る凡一里白瀧明神社あり、其傍に白瀧あり、飛瀑甚だ壯觀（此山足白井より凡二十五丁にして至り得、夫れより登ること凡二十丁辨慶七戻に達す、別に筑波町に通ずる小徑あり、即ち石岡街道を横ぎり、凡十三四丁の行程なり、土人は十八丁と云ふ、筑波山中は溪水花崗岩を浸蝕し、奇怪萬狀、而して此等の溪水は、大概南流して霞浦に注ぐ、（名勝）或は云ふ、筑波舊と築波に作る、上古東海逆流し、國中總べて海底に在り、然れども此山高きに因り、能く海波を防ぐこと堤防の如く、山西の諸國、幸に魚鼈の住とならざるを得たり、因つて以て名くと、又云ふ、古へ天照大神此山に登りて筑を彈じ水波曲を奏するに至りて、鹿島の海潮逆流し、波濤山頂に及ぶ、故に筑波山と號すと、又云ふ、往昔 崇神天皇【一に 綏靖と云ふ】黄金の山を爲さんとし、人力効を奏し難きに因て、之を上下の神祇に禱る、時に漢土五臺山の一峰劈開して我國に至り、分れて二山となる、一は大和の吉野山にして、一は此山即ち是れなりと、荒唐怪誕、一も信するに足るべきな



しと雖も、是等幾多の奇説を附會し、以て其威靈を添へんする者、豈に此山の自ら秀靈なるが爲めならざらんや、筑波町。二山の半腹に在り、人家軒を並べて市街を成し、旅舎商店皆備はらざるなく、繁華山間の僻村に似ず、街端に筑波神社の一の華表あり、其左傍に石碑を建て、碑面に嵐雪の俳句（雪は申さず先づ紫の筑波山）を刻す、市街を過ぎて漸く上方に至れば、中禪寺の佛閣あり、院を知足院と云ひ、大御堂、三層塔、鐘樓、太子堂、求聞持堂其他三四の堂宇相鱗次す、是れ即ち往時筑波神社の神宮寺たりし者にして、恒武天皇の御宇、法相宗の高僧德溢大士の開基に係り、同時に筑波神社を勸請したりと云ふ、而して是れより女體山に登るには、大御堂の前面を右に進み、字東山町の傍に其鳥居あり、男體山に登るには、左りして三層塔の前を過ぎ、正面に其鳥居あり、二路孰れを先きにするも固より不可なしと雖も、通常先づ女體山の路を取り、女體山よりは鐵鎖に縋りて御幸ヶ原に下り、直ちに男體山に上る者を多しとす、殊に又尋いで椎尾山（眞壁郡に屬す）の薬師に詣らんと欲する者の如きは、再び筑波町に下らず、男體山より直ちに之に赴くを得べきを以て其順路を取るを至便とせり、仰いで東西を望めば、二峯彌々高く、峻

奇嶮絶、眺觀極めて壯偉なり、其間五戸の茶店あり、亭名皆雅、一を依雲と云ひ、一を迎客と云ひ、一を遊仙と云ひ、一を向月と云ひ、一を放眼と云ふ、毎店の家人は朝に登り夕に降る者にして、餅及び田樂等を齎ぎ、參拜者の休憩に便にす、大黒石。女體山の東に在り、自然形の奇石にして、渾身肥大、左肩に囊を負ひ、右手に槌を揮ふて、安座する大黒天に似たり、因つて以て其石を名く、又相距る甚だ遠からずして、出船、入船石なる者あり、亦自然の怪石にして、長さ十間大さ三間許、形状巨艦の港灣を出入するもの、如く、頗る奇なり、胎内潜。是れ亦女體山の東に在り、長さ十有餘間の岩窟にして、人匍匐するに非らざれば、之を過ぐるを得ず、當山に參詣する者常に以て造化の一奇戯なりとし其至妙に感ぜずんばあらずと云へり、高天原。女體山の東に在る一高處に聳立すること凡そ九丈ばかり、峻峻なる岩角を攀ぢて之に達す、頂上風景甚だ佳極目窺處なく、八州の野盡く指點すべし、蓋し諸神の集會場に擬し其名を命ぜし者ならん乎、石門。亦女體山の東方に在り、峭岩屹突、上に大石を蓋ひ、兩岩の間大約二尺有餘、以て通路とす、蓋石は豎二十間横九間餘にして、三邊空に懸り、磊々將に墜落せんとする者の如し、故に其



下を過ぐる者、概ね鬼胎を抱き、慄然栗の膚に生ずるを覺ゆ、俗に此石門の地を稱して鬼神返し又辨慶七戻りと名くるは、之れが爲めなり、「水無川。古歌に因つて其名著はる、男體山の絶頂より稍や下りたる所に流出す、常陸風土記に、謂之雄神、其側流泉、冬夏不絶、とある即ち是れなり、下流他の小溪を會し、迂余屈曲して西北に流下し、筑波町大字國松に至り、筑波川に會流す蓋し此川亦山中處々に一奇景を添ふる者なり。

## 華頂山と加波山

水戸線笠間驛の東北一里。山麓より頂上迄三十町、海拔千二百八十七尺、別名を佛山とも云ふ、山腹に華嚴寺と云ふ古刹がある。山頂からの風光は頗るよい。春の頃岩瀬驛から謡曲櫻川で名高い磯部の櫻を見にゆくもよい。加波山は岩瀬驛の西南二里半。山麓長國より山頂迄一里十四町。(眞壁町の東北一里)筑波連山の一雄峯で、海拔二千三百三十八尺、樺山、蒲山、加葉山ともかく、山上の三枝神社は、日本武

尊を祀つたもので、盛夏の候、信徒の登山して加波禪定を行ふものが多い。溪間良材に富む明治十七年富安正安、河野廣仲らが政府改造を名として旗あげした史蹟である。

亦附近の葦穂山は筑波連峯の一で、海拔二千七十一尺頂上に足尾神社あり、眺望は頗るよい山麓白井より二十九町にして頂上に至る。其名は、乎婆頭勢である。

葦穂山花さきぬれや筑波峯の

かひに見れば雲ぞたなびく

行家

## 八溝山 【常盤線】

八溝山は、茨城縣久慈郡黒澤村にあり、海拔千三十五米、高山ではないが、都人士の二三日の山の旅には詔へ向きである、旅行案を左に、

第一日—水戸市から、久慈郡山方迄汽車にのつてゆく(約一時間を要す)其處から太子迄約五里二十八町を自動車でゆく、この數里の間は久慈溪谷の最絶景の所である。第一日は先づ太子町に



泊まる。

第二日—久慈の本流に沿うて真北へ進み、矢田川山をへて、久慈本流と別れ支流の八溝川に沿うて進み、町付へ出る。(太子より二里半)

この町付から登る。

町付から上野宮を経て、蛇穴から登るのが本道である。又新屋敷、北ノ内、松場、茶味内を経て登る道もある。之れは横道で、多少嶮阻である。

本道は町付から磯神迄二里五丁(八溝の郷土松澤藤左衛門氏の所で泊めてくれる)磯神から蛇穴迄二十町、蛇穴から山頂迄一里二十三町。

この日は磯神に泊まつて休息する。

第三日—八溝山頂をきはめ、山中の名所三水、五瀑、八嶽、八谷などを見て、下山にかゝり町付へ引き返す。

町付から、一里にして(廻り道すれば)久慈の上流に耶馬溪の稱ある矢祭山の名勝がある。(福島縣に屬す)

右は大体の案にすぎないことを注意しておく。

八溝の名物は、ワサビと蜂蜜である。昔は、この山から金を産したと云ふことが、舊記に見えてをる。今も現に、山上に黄金神を祀つた一小祠がある、續日本後記に八溝黄金神の名が見えてをる。

【八溝三水】 (金性水、龍毛水、白毛水)

【五瀑】 魚歸瀑、龍馬瀑、漲瀑、淋濃瀑、激水瀑

【八嶽】 (雲苓岱、清涼瑠、竈嶺岩、赤穹嶺、碧萱峰、權禮峰、卷圓峰)

【八谷】 (清淨谷、蓮華谷、菩堤谷、鬼谷、肉流澗、獅子谷、濃鮮溪、沈氷溪)

### 東金砂山と其附近の山々

水戸で乗替へて太田驛 汽車でゆく。驛より五里。山麓天下野より頂上迄十八町、海拔千百



三十五尺、登路嶮である。昔から、「金砂の雷一國の雨」と云ふ諺がある位、暫々雷雨を催うす、金砂神七十二年毎に行ふ大祭の田樂は、古雅愛すべきものがある。

【西金砂山】 東金砂と一郷をおきて聳ゆ、(太田より五里)標高千三百七十尺。上宮河内より頂上迄十五町。頂上に、金鷲女神が祀つてある。(東金砂のは男神) 金砂の山は、土人の神聖冒す可らざる靈地となす所のもので七十二年目毎に行ふ祭禮には、田樂を奉納する例がある。治承四年、源頼朝、佐竹秀義を攻めしとき秀義は、この金砂に築いて、防戦つとめたと云ふことである。

此邊瀑布多く、玉簾瀧(高さ五丈八尺幅三尺)四度の瀧(高さ四十丈幅二十四丈)生瀧瀧(高さ七丈幅十三間)等は當國屈指の名瀑である。

【高鈴山】 助川驛の後ろに聳ゆる多賀山脈中の主峰で、標高千九百三十七尺此山は、實に、助川海水浴場の一偉觀である。山麓より頂上迄一里半。峯は二つに分れてゐる。登路稍難。

【天妃山】 磯原驛の東北五町、大北川の河口に臨み、峩々たる岩石海中に屹立し、寄せくる狂浪高く飛散し、翠松海風に吟じて、此世乍らの仙境である、上に天妃の廟がある。

驛の近くにある磯原遠見所も風光絶佳である。海水浴客は、朝に夕に此山に登るをよしとす。日立鑛山は、助川の西北一里半。本邦第一の銅山である。

【赤井岳】 平驛の西方三里、標高二千三百七十六尺、山頂に藥師堂があり、山腹に眞言宗の古刹常福寺がある。登路平易、夏秋の頃山上に上りて見れば、無數の光、遙かの海中より夏井川をさかのぼりて山上さして來集する。龍燈と云ひて、頗る有名である。一見の價値がある。

【斗藏山】 亘理驛より三里半、角田町の西南二里に聳えたる一山塊、山上に斗藏大悲閣と稱する古刹がある。寺號は斗藏寺と云ひ地方著名の古刹である。稻荷、白山、山玉の三神社がある。山上の眺望は、雄大、相馬地方を大觀するには、好適地である。

備考 中村驛にて下車し、相馬氏累世の居城址を一見するは、興多きことである。今中村神社、相馬神社がある。丘上櫻街多く、春の候は、探勝には好適である。

## 大楠山

(東海道線)



鎌倉線逗子驛から頂上迄約二里半。山麓秋谷から頂上迄二十町、山は海拔七百九十七尺の一小丘にすぎないが、三浦半島連山の盟主である。山頂からは、伊豆半島、房總半島の山々を左右に眺め、富士箱根、丹澤の峯から、大島の三原山迄双眸におさめ、壯快をきはめてをる。日歸り遠足の山登りには、誂へ向きだ。小春日和に一家打揃うて登山し(駒下駄で樂に登れる)ピクニックの快をつくすも面白からう。

## 大山

當國屈指の名山で、海拔千二百五十三米、古來雨降山、阿部利山、大福山、如意山とも云はれ山頂から、太平洋を双眸におさむる風光は絶佳である、昔は、關八州の人は、大山、道了、富士の三ヶ所を一生に一度は御詣りしなければ末代迄の恥辱と信じてゐた。今でも、毎年夥しい講申が登る、随つて山は俗氣紛々としてゐる、山頂の阿夫利神社は、「いわなが姫」を祀つてある。春季祭は四月十五日から、廿四日迄、夏季祭は七月廿七日から八月十七日迄、登路は

【平塚口】 (東口)

平塚驛より頂上迄四里半。子易迄三里自動車(一圓十錢)馬車(六十錢)の便があり、子安から頂上迄一里半、約三時間を要する。

【秦野道】 (西口)

二ノ宮驛から、秦野迄湖南軌道でゆく(四十五錢)秦野から山麓蓑毛迄一里半、蓑毛から頂上迄一時間半で登れる。

大山町の旅館 伊豆屋 竹本屋

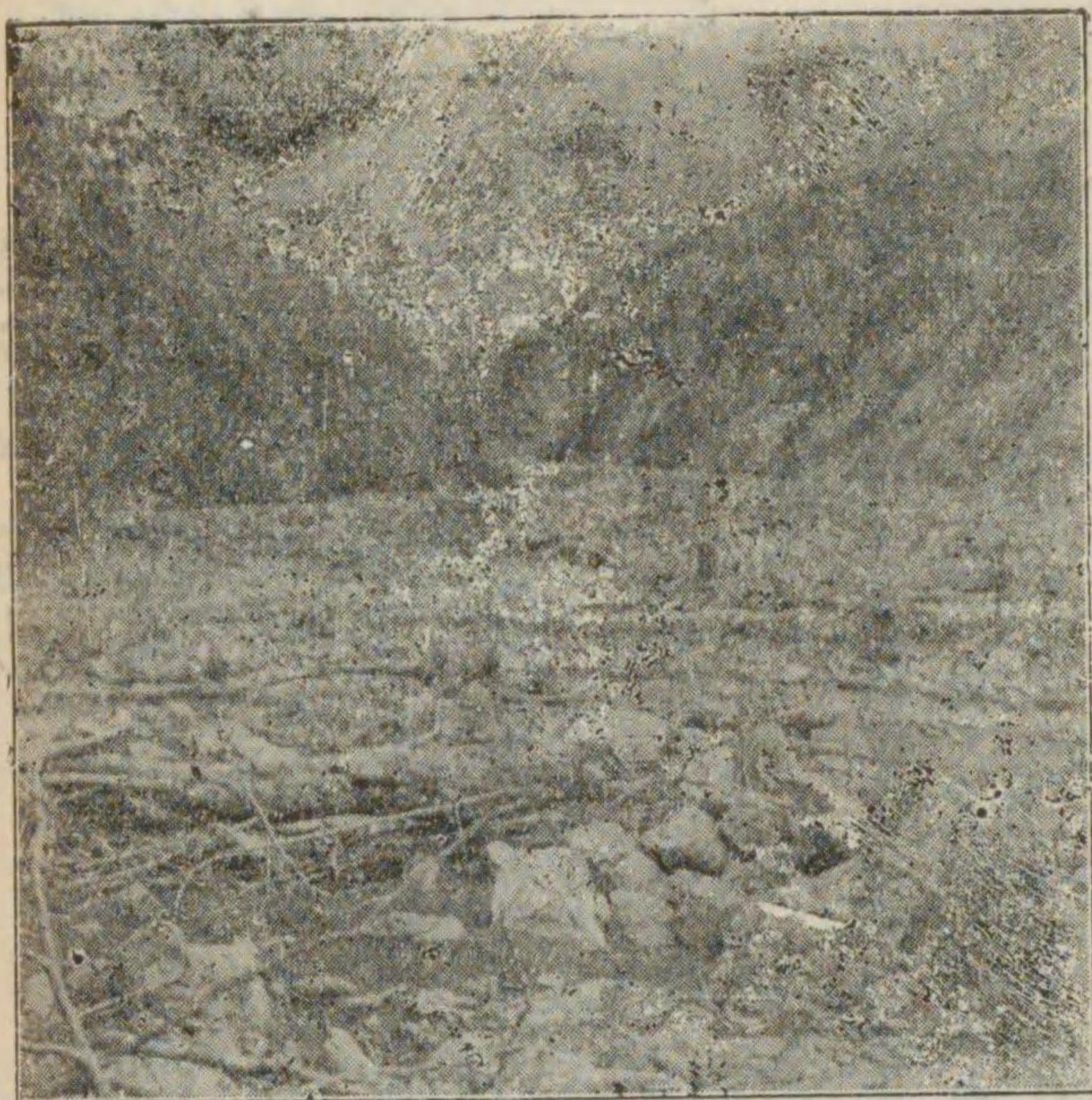
元祿會雜誌云ふ

明神前(粕屋村)より 大山町に至る間、二十餘町の間は、左右に人家が建つてゐる。大山町は、大山の脚に当たり、こゝに九十戸近くの御師の家がある。講中の徒の泊る所である。講社の數三千三百有餘と云はれてゐる。この邊の商ひ屋では、挽物細工を賣つてゐる。

明神前より頂上迄俗に八十町と云はれてゐる、中復の雨降神社迄五十二町、途中良辨ノ瀧、雷山などへ立よるもよい。拜殿より二重瀧を見て、絶頂迄二十八町の間は、祭典の時期に限り登山をゆるしてゐる。



絶頂の神体は、岩石であつて、石尊大権現と云はれてゐる。その前宮は小天狗、奥宮は大天狗と云はれる樹木あるを以て眺望は、雨降神社拜殿の方がよい。



丹澤山塊本熊澤と蛭ヶ岳  
(震災後の惨害を見る)

附近の丹澤山塊は、關東大地震の震源地であつた爲めに、十里四方にわたるこの山塊は著しく破壊せられた。けれ共、丹澤の縦走は、決して不可能ではない。

### 箱根山

箱根は、古來、「箱根七湯の名を以て知られてをる。世界屈指の休火山で、形勢頗る雄偉である。東海道古驛路、こゝを通じ、「箱根八里の險」の名は天下に鳴りひびい

てをる。今では山中、遊園地となつた。

箱根火山は、成層火山中の複火山で、中央火山は、

- 神山 (四七一〇尺)
- 駒ヶ岳 (四三七〇尺)
- 上双子 (三五九七尺)
- 下双子 (三四八七尺)

の四つである。

其外輪は、楕圓形をなし、南北の直径三里、東西直径一里半、外輪山中の主なるものは、

- 山伏峠 (三四二三尺)
- 三國峠 (三三〇七尺)
- 長尾峠 (三二二八尺)
- 乙女峠 (三二〇七尺)
- 明神岳 (三八四五尺)
- 明星ヶ岳 (三〇五三尺)



淺間山 (三六四七尺)  
鷹ノ巢山 (二七六二尺)  
要害山 (三二二八尺)

等で、鞍掛山(三三三三三三尺)に及んでゐる、外輪山内面の角度は三十五度、外面は十五度内外である。これ乙女峠の如きが、御殿場より登る時は、緩傾斜なるに、下る時は、急傾斜をなす所以である、火口原に水をたゞへしもの、これ、蘆ノ湖である、この大火山の中に、温泉がある。箱根へは是非一度杖を曳くべきである。

### 新撰名勝地誌云ふ

箱根山 關東と中部とを連接せる一山脈にして、其山は頗る美しく、かの日光と共に本邦に冠絶す。山中蘆の湖あり、其風光の明媚なるは中禪寺湖と其勝を競ふに足るべく、二子山・駒ヶ嶽等皆登臨の勝を具へて、頗る旅客の思を惹くに堪ゆ。ことに此山中に珍重すべきは、温泉の多きこと、其の設備の完全せることにて、この點に於ては日光遠く其後に瞠若なり。舊箱根街道は湯本より須雲川の流れに沿ひて、溪谷の間を取次に進み蘆の湖の岸を掠めて、直ちに伊豆地方に下れり。大日本地誌の編者記して曰く、「足柄箱根の群山は北より南に走り、伊豆半島に亘り、矢倉嶽・金時山、駒ヶ嶽・明神山等の諸山之に屬し、其

の中央冠岳(一千二百米)の南方、神山(一千四百三十八米)最も高く、此れ等の諸山は相模灘及び駿河灣に注げる諸川の分水界をなす。道志足柄の間には酒匂川灌漑の低地あり。是れを概括すれば地勢は北・西・南三方は峻山峻峯蟠廻し、東西には平坦の地を控へ、自ら分水嶺をなし、其の水流の東部一般に相模灘に注ぎ、西都は盡く駿河灣に注ぐ。此の分水嶺は所謂函嶺の關門にして、關東・關西の境域をなすものなり前記せる金時山・駒ヶ嶽・明神山等は地學者の所謂箱根火山に屬するものにして、今は山紫水明文人墨客の杖を曳き、紳士淑女の暑を避くる所なるも、曾ては灰を降らし、熔岩を流がしたる焦熱地獄の地なりなり。東海道を過ぐるの旅客若し佐野驛頭に佇立し、東の方函嶺を望まば、山頂は多少の凸凹あるも略一定の高距を有し、緩慢たる平野は遠く南方に連亘するの成層火山特有の山貌を呈するを見るべし。而して向ほ進んで稍高き處より望めば、平扁なる切斷圓錐形上更に二三の峯巒屹立するを見るべし。是れ即ち二重式火山の特徴にして平扁なる切斷圓錐形を呈するは箱根の舊火口にして、其の中に二三の秀峯を見るは後に舊火口内に更に噴起する謂はゆる中央火口丘なり。舊火口は火山學上これを外輪山と稱し、その傾斜は外側に緩にして内側に急なるを常とす。箱根に於ては外部の傾斜は大約七乃至十二度にして、内壁は三十五度に達す。この舊火口は卵形をなし、東西に短く、南北に長し。彼の金時山、明星山、鞍掛山、山伏峠、三國山湖尻峠、長尾峠、乙女峠等は外輪山にして、双子山、神山、駒ヶ嶽は中央火口丘なり。外輪山は其の生成の當時は表面甚だしき凸凹なかりしも、連綿たる浸蝕、風化の兩作用は間斷なく相働いて弱所を穿ち、遂に今日の如き形狀を呈するに至りしなり。一度低所を生ずれば雨水は之れに沿ふて流れ、溪を作り、谷を穿ち遂には滔々たる大河を爲して海に注ぐに至る。圓錐形を爲せる火山には、此れ等の浸蝕谷



は輻射狀を爲して四方に放散するを常とす。早川、須電川、谷入澤の如き即き之れなり。舊火口内に更に新火山を生ずれば其の間に自分多少の低地を生ぜざるを得ず。此の外輪山と中央火口丘との間の低地を火口原と稱し、山水明媚なる蘆の湖斑牛の徘徊せる仙石原、玉蜀黍茂る宮城野、池尻是れなり。蘆の湖の如き火口原内に水を湛えたるものを特に火口原湖と稱す。火口原内の雨水相集まりて外輪山の約點を破り、流水出づる所を火口瀨と稱す。早川及び須雲川是れなり。火口瀨は能く外輪山の絶壁を露はし、其の構造を知るに足るべきものなり。早川火口瀨は源を蘆の湖の北端湖尻より發し、仙石火口原を灌漑し、銚子の口に於て一瀉絶壁を下り、宮城野火口原に入り、底倉にて蛇骨を川合せ、東部外輪山の明星、淺間兩山の間を過ぎ、湯本に於て須雲川火口瀨と會す。七湯中蘆湯を除き其の他は盡く此の溪間にあり。須雲川火口瀨は源を鞍掛山の地方に發し、要害山の南谷大澤を過ぎ、畑宿に到りて瀧阪の一水を集め、湯本に於て早川と會す。箱根産物の一たる山葵は多く此の溪間に産し、前世界動物の遺物たる山魚亦茲に産す。下双子山は中央火口丘中最南部にある美麗の圓錐形を爲せる山にして、平林理學士に従へば二の乳房山にして頂上に一大火口あり。傾斜極めて急峻なり。上双子山は下双子山と相並び所謂双子の有様を呈するものにして、亦是れ美麗なる圓錐形を爲せる乳房山なり。傾斜亦前者の如く急峻なり。神山は殆ど舊火口の中央に位し、山體は火口丘中最大なるも、數爆裂作用の爲めに山體を破壊せられ、今は冠岳・早雲山・臺ヶ岳等の幾多の峯頭に分かる中央の神山は海拔一千四百三十八米に達し、實に箱根火山中の最高點なり。此の故に天晴れ氣清むの日、筈を神山の頂上に曳か、八面玲瓏たる芙蓉峯は固より箱根の外輪山・中央火口丘等一望の下に集まる。大湧谷及び早雲地獄の硫質噴氣孔は其の山腹にあり。駒ヶ岳は神山の南にありて

完全たる鐘狀を呈し、亦是れ一個の二重式火山にして、火口丘中其の噴出最も新らしきものなり。東麓に硫黄山及び湯の花澤の噴氣孔あり。湯の花澤は今は硫氣噴出せず。箱根には種々の噴氣孔あり。大湧谷・早雲地獄・硫黄山・湯の花澤は亞硫酸瓦斯若くは硫化水素瓦斯を噴出する硫質噴氣孔にして、小湧谷は重にも水蒸氣孔なり。殊に其の活動の最も激甚にして、作用の最も活潑なるは大湧谷にして、瓦斯の噴氣が岩石を霏爛せしむるの有様も歴々之を見るを得べし。」と、蓋し關東地方屈指の勝地なり。

箱根七湯と云はれたのは、

- 湯本 (旅館福住、小川、和泉屋、大和屋)
- 塔ノ澤 (環翠樓、新玉、一ノ湯、よきや)
- 宮ノ下 (奈良屋、外人向富士屋ホテル)
- 底倉 (蔦屋、梅屋、仙谷屋)
- 堂島 (大和屋)
- 木賀 (宮内)
- 蘆ノ湯 (紀伊國屋、松坂屋)

て、今では、新たに、

小湧谷 (三河屋、外人向小湧谷ホテル)



強羅 (末廣、一福、こゝに遊園地がある)

姥子 (秀明館)

仙石 (俵石、仙郷樓)

の四温泉が開かれた。春のつゝじ、秋の紅葉は特によい。山中の交通機關も、大震災のため大破壊を蒙つたが、鋭意快復につとめてゐるので、この夏迄(大正十四年)には、登山電車も、快復することと思ふ。自動車は、富士屋自動車と小田原電鐵經營のものとなる。之を利用すれば頗る便利である。

又蘆の湖の舟遊賃金は、箱根町、元箱根―湖尻間二人船夫片道二圓十錢往復三圓八十錢、箱根町―元箱根間二人船夫片道一圓廿錢往復一圓六十錢、一時間雇一圓四十錢、一日三圓五十錢、水門廻三十錢増、箱根權現廻廿五錢増、以上船賃値上の計畫あり約三割増となる筈。モーターボートは箱根町―元箱根湖尻間片道三圓五十錢往復四圓五十錢、箱根町、元箱根間片道一圓往復一圓五十錢、權現廻、水門、廻は各金五十錢増、時間雇半時間二圓五十錢、一時間四圓、半日十五圓、

一日十八圓。

玉櫛箱根の湖を見わたせば

富士を寫せる鏡なりけり

松平春岳

蘆の湖の倒さ富士は、天下に普く知られたる一大奇觀である。

箱根は、植物の種類に富んで居る。植物採集家は是非共、駒ヶ岳と二子山へ登らねばならぬ。

姫岩鏡、岩ツツジ、梅鉢草其他の高山植物は、豊富であるからして、採集には、甚だ便である。

箱根路の溪谷又は、澤のほとりをさすらふと、一風知草(フウチサウ)と云ふ獨特の草を見る事が出来る。採集して、水盤へ、植ゑつけると、云ふに云はれぬ雅致がある。蘆に似た草で、夫程には大きくならない。優しみのある草である。

【明神ガ岳】 狩野山、塚原山とも云ふ宮城野から三十三町にして達する。山頂に明神祠がある

【明神ヶ岳】 ムカウ山とも云はれ、溪流を隔て、宮の下に對峙してゐる。全山草を以ておほはれてゐる。宮城野より、山頂迄十八町。



【冠山】 大地嶽(大湧谷)の東南にある。仙石原から、山頂迄一里九町。

【神山】 箱根山塊の中央にある最高峰、蘆の湯より頂上迄往復五時間を要する。行路極めて峻嶮、されど、湯ノ花澤新道を通れば、登路は容易である。眺望は絶佳である。

【駒ヶ岳】 全山悉く草を以ておほはれて居る。高山植物に富む特に姫岩鏡、小岩櫻は著名である。蘆の湯より頂上迄一時間を要す。山頂は平坦にして高臺の如く、眺望を神山に遮らるゝも猶、蘆の湖の全體を見下し、房總の山々、東海道の海岸を双眸にをさめ得るを以て、絶佳である。山頂は、「園遊會場」などに使用するには好適地である。學生の野球をするにも適する。余は、駒ヶ岳山頂で、野球大會を開いて、天下青年の爲め萬丈の氣を吐いた。

噴火口址は二つある。下山は、終始蘆の湖を眺めつゝ箱根權現祠へ向ふをよしとする。此山は温泉宿に泊まつてる婦女子などが散歩氣分で登山するに適するのである。

【二子山】 蘆の湯から、三十分かゝれば、上二子頂上に達する其近傍は、野花亂發して、自然の庭園の如くである。之より十五分にして、下二子の山頂に達する。眺望は、上二子の方がいゝ

【箱根峠】 近世東海道(小田原から四里三十一町、三島から三里九町にして山頂に達する。(駿河の國境である)近時通行する者稀なるを以て、道路は荒廢した。

箱根山麓の里に宿とへば

暮ぬといそぐ嶺の旅人

爲 家

【鞍掛山】 箱根宿の西端から半道許にして山頂に達する。眼界宏壯。伊豆田方町桑原(二里十三町)へ下ることも出来る。又峯續きに、十國峠へ出ることも出来る。

【鷹ノ巢山】 蘆の湯の前にある草山で、蘆の湯から上つて、湯本へ下る、箱根古道は、この峯に通じて居たのである。蘆の湯から湯本迄一里半、早川、須雲の兩溪谷を下瞰し、富士を仰ぎ、風光は絶佳である。

## 箱根旅行案

箱根へは日歸りで旅行することも出来るし一泊ならば猶更結構である。強羅公園迄出かけて遊



ぶには日歸りで充分である。けれ共旅行案として面白いのは、

一、湯本より舊街道を探勝しつゝ、蘆の湯に至り一泊翌日三島へ出る案。

二、御殿場より乙女峠に出で、仙石原を通り、木賀一泊、翌日蘆の湯に出で、駒ヶ岳へ登り、

元箱根より鞍掛に出で十國峠にかゝり、熱海へ出る案。

であらふ。箱根は温泉地で物價も高く、夏季は到底學生の旅行には、適しない。物價の點に於いて、學生に對しては春か秋の末か温泉宿の割合にひまなときに出かけるより他に道がない。

箱根の名物につき、箱根案内云ふ

湯本細工 漆器、指物、寄木細工及び挽物細工の總稱にして其の種類極めて多し山中至る所に

製造又は販賣店あれども凡て之を湯本細工と云ふ。

埋木 多くは山中の原野を開墾する時發見するものなり神代杉最も多し其地は槻、栗、厚朴、及び棺等にして其色愛す可し。

硫黄 大涌谷、早雲地獄の熱湯沸湧する近傍の土は皆な硫黄を含みて俗に硫黄土といふ硫黄土

は水田の肥料に適するを以て春間農家地方に輸出する宮城野村に硫黄製煉所あり同所は大涌谷の硫黄土を製煉して硫黄を製造し當時は販路擴張して海外に輸出せり。

湯の花 湯の花澤温泉に沈濁するものを乾燥したるものなり其効能硫黄泉と異なるなきを以て

他地方にては浴湯に之を投じて藥湯となすなり製造元湯の花温泉宿依元清二方にて卸賣小賣を營なめり。

木の葉石 姥子温泉の湯元 巖石に附着して産出す。

自然薯 俗に長芋、山芋又は山藥といふ當山の山中に自生する自然薯は風味と香氣は他の地方より産出するものに優れり數年前より宮の下菓子舗にては寒中之を製粉し自然製粉と名づけて賣出せり又其粉を原料として煎餅を製造し浴客の多くは土産となせり。

山椒魚 其形いもりに近似し頭圓く扁に頸長く背は黒くして赤し小兒の藥なり湖水及び畑村邊の川に産出す。

蛇骨 實は温泉の鹽分結晶したるものにして底倉温泉場に産出す。



石材 湯本の白石宮の下の葡萄石堂ヶ島の縞石等は需用最も多し。

竹材 眞竹は多く宮城野村に産出す大平臺は之に次ぐ京濱地方及び小田原邊に輸出す需用は屋根竹、竹垣、傘の柄等なり又篠竹は箱根町の近傍に産出し古來有名なり多く煙管の羅苧に用ゆ虎班の絞班ある羅苧竹は仙石原村に生ずるものなり。

川魚 山魚は清流に生じ赤腹、鯉、鮒、鱒等は湖水に繁殖す。

箱根草 巖芝、梅草は幽谷の巖上に生ず箱根草の春の新葉は紅色をふくみて美麗なり莖は長一二尺黒く光り一株に叢生す枝多くして分れ其葉銀△形なり巖芝は築山に植るに宜しく梅草は盛夏の頃白き花を開き櫻樹、楓樹、躑躅、山吹等に富めるは浴客の多く知る所なり。

其他宮城野村には簀の製造あり生産物には山葵、萩、蕎麥、土釜炭あり仙石原村の王蜀黍、大平臺の蕨、佐次兵衛柿等あり。

【十國嶺】 日金山とも云ふ。標高二千六百尺、一望千里、十州を瞰下するの概がある。十國峠と云ふも謂れあり。箱根より熱海へ行くには、草茫々たる山の峯を通り、十國峠に出で熱海温泉

へ下るを順路とする。道は迷ふ虞れはない、湯ヶ原道には、道しるべがあるから、迷ふことは絶對にない。雨降りには、道が迂るから歩行困難の恐れがある。一日の行樂に適する。頂上から熱海温泉迄五里二町、熱海へ下らんとする中途に、仁徳帝の御世、松虞仙人の草創、源頼朝の中興と云はるゝ日金山東光寺がある。

【道了山】 道了山は、大雄山最乗寺のある所で、道了大薩埵あるを以て著名である、參詣者常に群をなす。松田驛の南一里半。驛から關本迄一里乗合自動車五十錢、馬車三十五錢、俵七十錢關本から麓迄半里、麓から寺迄二十八町、又小田原から山麓迄三里、俵賃三圓。又箱根宮の下より宮城野を経、明神ヶ岳を越えてくる道もある。行程三里、道路困難なれど、山駕籠の便がある坊は一圓を投ずれば、旅客の宿泊をゆるす。足柄路の多くの山は、樹木少なく草山なるに、この道了山のみは、古來伐木禁制なれば、老杉鬱々として天に聳えてゐる。

【伐木禁制】

山中草木總而猥不可切事



於截ニ本木ニ者可レ可截レ頸事

於レ截レ枝者可レ截レ手足ニ事

於レ截レ葉可レ截レ指事

於レ刈レ草者可レ截レ鬚髮ニ事

古人道豈不是麼、莫ニ山中松竹切、

枝々葉々、祖翁皮肉云々

寶徳三年辛未五月

宗能 (五世)

【足柄峠】 足柄峠は、箱根が公道となる以前の、東海道の驛路であつた。今新道、古道一條あれど古道を通る人は、極めて稀れである。古道も草を分ける覺悟があれば通れないことはない。山中水が少ないから水筒を用意することが必要である。御殿場より一里、竹ノ下の觀音堂ワキから頂上迄一里十四町、富士の裾野を大觀する風景は、一大パノラマである。頂上より右折數町にして照天社、新羅三郎の笛塚、街道強盜の子孫八郎兵衛の家がある。下ること一里二十町、矢倉澤に達する。矢倉澤より道了權現迄一里半。

備考 峠の頂上より、箱根の碓氷峠(日本武尊「アツマハヤ」の古歌の舊跡)を越えて宮城野へ下るも一興である。

通例、中學校の修學旅行隊は、御殿場より乙女峠を越えて、箱根山内へ入る案をとるが、余は、實験の結果足柄峠より、箱根へ入る方が、修學旅行としての價値が大であらうと思ふ。この道を推奨し度い。

古事記に「倭建命、悉言向荒夫琉蝦夷等、亦平和山河荒神等而、還上幸時、到足柄之坂本、云々」とある足柄之坂はこゝである、日本武尊吾孀者邪の舊蹟は、記、紀の文の相違よりして、一上州の碓日峠とも、二 足柄の碓日だとも云はれる、然し地理上よりして、吾妻者邪の舊蹟は足柄の碓日だと見るが至當である、久米氏の説に依れば、宮城野から御殿場へ越える峠を碓日峠と云ひ、其峠を塚として、相模の海は見えなくなるとの事である、果して、久米氏の所謂碓日峠なりや否や二段として、廣義に解して、日本武尊の吾妻者邪の舊蹟は足柄路にあるとは云へる、この足柄坂は、東海道第一の險要で坂東の稱も此坂から起つたのである、古くは足柄以東を坂東と云ふたが、近古に至つて、更らに、關東とも云ひつひに關八州の號が起つたのだ、兎に角くに、



古への官道で令義解に「凡朝集使、東海道、坂東（謂駿河與相模界坂也）皆乘驛馬」とある、即ち東海道を下る人は、息津蒲原長倉横走（竹之下）をへて足柄峠を越え、坂本へ出たのである、然るに、延暦二十一年になつて、富士山大噴火の爲め足柄路は通へなくなつた、そこで同年五日に新に荷路を開いた、恐らくは長倉驛邊から宮崎へかゝつたものであらう、然し當時猶政府では足柄を大路と目して居たので、直ちに改修に著手し、二十二年五月に箱根路を廢して足柄路を復した、宮荷路を廢したとは云へ是れ以後は足柄宮荷路共通行路となつた、元來關を諸國の要害におく事は、古制であつて、足柄の關も、古代からあつたものと思はれるが、延暦八年に諸國の關防一切停止せられた時に、足柄關も廢された、然し昌泰二年に至つて、東國の靜肅を資けん爲めに、足柄、碓日の二關を復活した、然し其後の沿革は、わからない、中世に至つては、足柄箱根兩路共行はれて、大小公私の別はなかつた様である。梅花無盡藏に、

「自桃園赴相州、有兩道、一日箱根、一日足柄、足柄爲近、曉陰及且快晴、詩曰、箱根近小桃源、尙隔神巫三島村、一步不臨山似恨、直尋足柄峙朝暾」

とあり、又宗祇が湯本で死んだ時にも、遺骸を昇がせ足柄山中をすぎたのである。然るに徳川時代に至り足柄を塞ぎ、箱根を以て公私の往來の便に供するに至つて、足柄路は荒廢するに至つたのである。箱根にも古道新道がある。徳川時代の官道は、即新道で、古道は湯本から峯續きに通じて居た。

一、足柄關址 關址は、今詳かでない、新篇風土記に「古關は足柄峠の頂上よりこなたに、字をば明神と云ふ所あり、其邊を舊蹟ならんと云ふも、未だ慥なる證を得ず」とある。而して又、關の廢蹟となつた、年歴も分らないのである。（昌泰二年官符、同三年官符を見るべし）

足柄の山の關守いにしへは

有もやしけん跡だにもなし

（明日香井集）

行かひの道のしるべにあらましを

へだてけるかな足柄のせき

（相模家集）

柄城の關の山路を行く人は



知るも知らぬもうとからぬかな

後 撰

二、古城址 北條家で戦國時代においたもので、頂上にある。儼然として形を存してゐる。此邊の景色は絶佳である、右に公時山を眺め、富士の裾野を眼下に見る。

三、照天様 頂上に樹木鬱蒼たる所がある、元來今の足柄路には、木が少ない。殆んど草茫々たる山であるが、こゝ丈けは珍らしく森になつて居る。此中に鎮座ますが照天様で、其下の獵師八郎兵衛の祖先は、茶屋であつたとも追剝であつたとも云ふ事だ。八郎兵衛の家は、竹之下の農であつたが、建久四年五月、源頼朝富士野の狩の途上、此家に休憩して四方八町の地を賜うて以來連綿として、つゞいて居るとの事である照天様後ろの池は、水の絶えた事がない、昔から雨乞の時は、此池に祈るとの事だ、前後二里半にあまる山中、家はは一軒だ。

四、足柄明神古址 今野野岩村にある、矢倉澤明神は、古くは、此時にあつたのだ。照天様より下る事二町にして、其舊址と唱ふる礎石がある。

五、義光笛吹の古蹟 古城址の附近にある。箱根にも小涌谷と蘆の湯の村界に笛塚と云ふのがあつて、矢張、往昔新羅三郎義光が、俗人豊原時秋に笙の秘曲を傳へた舊蹟だと云うて居る。是らは何れも時秋物語から附會した古蹟であるが、足柄峠の方が事實に近いと思ふ。

### 金時山と愛鷹山

猪鼻岳とも云はれ、海拔四千三尺。附近の山は草山だが、頂上丈けは、木がこんもりとしてゐる、坂田金時居住の山なればとて、毎年陰曆三月十七日に、山頂で猪鼻祭を行ふ。北海道アイヌの熊祭りの如きものである。

箱根山中仙谷原から登り廿五町、乙女峠からも足柄峠からもゆける。下駄ばき登山に適する。  
【愛鷹山】は駿河國駿東富士二郡に跨る。休火山で、山頂は六峰に分れてゐる。海拔四千七百六十七尺。裾野から富士迄三里半強、又原驛から登つて須山村へ向つて下車するも一興である。趣味深い山だが、登山者は割合に少ない。愛鷹の六峰は、

鷲巢山 (大河内岳大岳とも) 小岳、越前岳、鋸岳 (伴次郎山とも) 袴腰岳、山宮岳 (足



高明神の山宮あり

である。この山は、古は牧馬を以てあらはれ、源頼朝が、馬百疋を愛鷹明神に献じて繁殖をはかつたに始まる。維新前迄は、毎年十一月、十二月の交暮吏のぞんで、馬取の擧が催うされた。浮雲の足高山ははやけれど

なつめる駒ですゝむともなき

道 興

【達摩山】 伊豆國日方郡の西方に聳えてゐる、海拔三千二百三十七尺。

駿豆電鐵で、大仁で下車し、修善寺温泉に泊まり、こゝより三時間にして頂上に達する。戸田より登れば僅かに三十町である、山頂よりの風光は頗るよい。

【天城山】 天城山は、伊豆半島連山の盟主で、海拔千四百五米、尼木山、万次郎岳、とも云はれ、古くは狩野山を以て知られてゐた。山名の天城は甘木の義にして、山中良材に富むを以てある。吾人の云ふ天城山は一山岳を稱するにあらず大岳(万三郎岳)萬次郎岳、東笠峰、諸峰の總稱である。帝室の御獵場であるから、今に猪鹿、笹熊が多い。

大仁驛より七里、湯ヶ島温泉より三里にして頂上に達す。

登路は四つ

- 1、湯ヶ島口 (狩野口とも)
- 2、大見口 (加茂郡地藏堂より登る)
- 3、阿津口 (加茂郡梨本村より登る)
- 4、仁科口 (仁科川の水源に沿ひ、大澤里村より登る)

天城北麓には、船原、中島、吉原、嵯峨澤、湯ヶ島の五温泉がある。

## 大室山

伊豆の伊東から登るのが順路である。

東京から、伊東温泉へゆくには、東京及び國府津、早川から汽船もあるが、船の嫌いな人は、修善寺からゆくとよい。五里、自動車賃二圓八十錢、伊東の温泉宿としては、暖香園、伊東館、



大阪屋がよい。

大室山は、海拔僅かに千九百十四尺と云ふ低い山だが、眺望は頗るよい。單式圓錐型火山の好模型である。伊東不二と云はれるのも、決して、こじつけではない。伊東から日歸りの散歩には眺へ向きである。途中大池の絶景がある。山上からの風光は雄大である。一度は、小室大室の兩峰をきはむべきである。

大室山の登山口は

- 1、伊東（山麓迄五里）
- 2、伊東から南三里の八幡野（頂上迄一里。八幡野に若松屋と云ふ旅館がある）
- 3、大室西南麓の池と云ふ所から登る（頂上迄一時間）

【久能山】江尻驛で下車し、三保ノ松原、龍華寺、鐵舟寺を見て、久能山へゆくをよしとする。江尻から發動機船にのつて、三保の松原へゆき、夫れから龍華寺へ出てもよい。又江尻から清水港に出で（電車賃五錢）龍華寺、鐵舟寺を経久能山へ行つてもよい。（江尻から久能山迄二里三十町

自動車賃八十錢）

かへりは、久能山から、靜岡へ出る。二里廿六町（自動車乗合八十錢）

久能山には東照宮があり、眺望は頗るよく、東京からの一泊旅行地として眺へ向きである。

【秋葉山】袋井驛から北十里、途中森町迄三里（自動車六十錢、馬車三十五錢）森町から若身平迄五里（自動車二圓、馬車一圓二十錢）若身平から神社迄一里半、歸りは天龍川の川舟にのり鹿島又は江田（謡曲に名高い熊野の墓がある）に至り、中泉驛へ出るをよしとする。

山麓坂下から、頂上迄五十町、坂下には旅館十數軒ある山頂は二千八百五十尺、天龍、濱名湖遠州灘を双眸に入る、風光は雄大である。

山上に秋葉神社がある。社記に「當社祭神は和銅年中より此中に鎮座し、火を掌り給ふにより世人鎮火神と崇敬す」と、世人の信仰頗る厚く、夏期、秋期參詣者は群集する。境内は、老杉鬱蒼として天を衝き幽邃塵外の境なれ共、境外茶店軒を並べたる有様は、俗氣紛々たるものがある。歸途は、坂下より氣田に至り、舟にのり氣田川を下り天龍川に出で、更らに下つて池田に出れ



ば、三十餘町にして中泉驛である。或は坂下より戸倉に至りて天龍川を下るも可。

池田の宿は、謡曲に名高き熊野の墓がある所だ。

秋葉山神の信仰は、足利時代から盛んであつた。徳川時代に於ける信仰は、頗る盛んであつて秋葉の祭りへは駿遠豆三の土民は云はずも哉、信濃甲斐の土民迄參詣に集つて来て、人死の出来る程の賑ひを呈したものである。御札を頂いて歸つた人は夫れを家の軒に貼つておいたものである。鎮火、防火の意味からして、この御札を有難ぶつたものである。

【鳳來寺山】 遠州の秋葉山と並び稱せらるゝ東海無双の鳳來寺は、豊川線長篠で鳳來寺鐵道に乗りかへ鳳來寺驛で下車すれば一里二十町にすぎない。鳳來寺山腹にある。寺は推古帝の朝の草創。開山は僧利修である昔は七堂伽藍いらかを並べしも、文久以後五回の火災の爲め、今は二天門と東照宮をのこすのみである。驛より山麓門谷に至る間、寒狭川に沿ひ、一ノ瀧、二ノ瀧、三ノ瀧等の奇景がある。門谷には數戸の旅館があるが新江戸屋、布袋屋等の旅館がよい。

山は、煙巖山、相生山とも云はれ、標高二千三百尺、寺門より十九町にして頂上に達する山よに白岩權現、傘杉、六本杉等見る可きものが多い。妙法瀧は、當國一の絶勝である。

備考 長篠驛近傍は、有名な長篠役古戦場の地である。信玄が月夜短笛に酔うて、銃傷を負ひし野田城址は、新城驛の近傍である。又杖を曳くべき所ぞかし、

【金華山】 岐阜驛の北二十町、長良川の清流に臨み、風光絶佳。麓より頂上迄二十町、戦國の頃、齋藤氏及び織田氏の城があつた。古くは、稻葉山(城の名に稻葉城)と云はれ、金華山の名は近世以來である。西麓に稻葉神社がある。

田山花袋氏云ふ

伊奈葉神社 稻葉山の西麓にして、停車場より約十八町を隔つ。五十瓊入彦命に日葉酢姫命、淳媛姫を合祀し、岐阜市の鎮守産土神なり。景行天皇の御宇四十四年の草創にかゝると傳へ、今縣社に列せり。もとは丸山の北方即ち椿原にありしを、天文八年今の地に遷せしもの、徳川氏の時、尾州藩主徳川光友の改築修補あり。境域六千坪、本殿、假殿、神門、瑞籬、廻廊、拜殿、繪馬殿、東西神輿庫、行事殿、神廐、神厨、社務所等、鬱乎たる松杉の間に隠見し、壯麗を極む。此地、大行社、后御前社大御門社、金神社、高山社楠神社、東照宮等の末社十四宇なりしも、明治二十四年の震災にて悉く焼亡せり。境内又櫻楓に富み春秋の來遊者甚だ多し。石劍、古額、古縁起、古代農具、古書、古代樂器、古鏡、古彫刻等の什寶に豊富なり。大祭を毎年四月四五の兩日に行ふ。甚だ盛なり。



【養老山】 養老孝子の物語を以て著名な養老瀧を中心として、今では立派な公園になつてゐる大垣驛で乗りかへて養老驛に至る。公園内迄自動車上り五十錢、下り四十錢。(旅館菊水、村上、藤川)

瀧は、高さ一丈、幅一丈二尺、瀧壺が浅いからして、危険なしに打たれることが出来る。余が幼少の頃、いつた時には、瀧の附近へ猿が出没したが、俗化した今では全く隔世の感がある。春の櫻は天下のみものである。養老酒は此山の名物である。

むかしより人の言ひくる老人の

わかゆてふ水ぞ名におふたきつせ

むかしより名にも流れて老人の

齡をつれぐ瀧の白糸

大伴東人

八田知紀

大垣から揖斐迄(三十六錢)汽車でゆき、こゝから三里、山をこえると、西國三十三番の札所満願たる谷汲山の華嚴寺がある。風光絶佳の地である。

附近の笙ヶ岳は養老驛より二里、牧田より一里にして其山頂に達することか出来る。標高二千

四百二十尺、絶頂は二峰に分れ、琵琶湖と濃尾の平野を左右に望む風光は、絶佳である。晴天には、名古屋城の天守閣を見る事が出来る。此山は中腹に岩石多く登攀は頗る困難である。

山頂より嶮を冒して、石道を下れば、養老の瀧の上へ下ることが出来るが、危険を伴ふからして一般には勧め難い。秋の末から春の初めへかけて、中腹以上は雪でおほはれてしまふ。此山を笙ヶ岳と云ふに就いて面白い話がある。この山と伊吹山とを吹き通ふ山風が、さながら笙の音に似通つてゐるので笙ヶ岳と名づけられたと舊記に出てゐる。聖ヶ岳、嘯ヶ岳とも書かれる。

【伊吹山】 は、最近スキーの練習地として、有名になつて、登山者もふえたが、昔は、名前丈けは有名でも登るものは、極めて少なかつた。近江坂田郡と美濃の國揖斐郡に跨る高山で、海拔四千五百四十五尺、膽吹山、異吹山、伊福山、伊富貴山ともかゝれる、日本武尊の、山賊退治以來山名は世にあらはれた。

折々に伊吹を見てや冬籠

きさらぎの二日も寒し伊吹山

芭

蕉

涼

岱



登山路は多いけれど、長岡驛より春照上野をへて登るのが表口である。驛から頂上迄四里半、又關ヶ原驛から、玉、藤川、上平寺をへて頂上迄三里半。垂井驛から岩手村をすぎ天神峠をこえて春日村百屋から登る道もある。この道は五里半である。

全山草山で迷路は少ない、濃尾の平野から、見渡せば、伊吹は、群山を従へて、帝王の如く悠然と控へてゐる。山域の花畑は、七八月の候百花咲き競ひ、天下の美観である。山中薬草に富み艾は、特に著名である。草山なれば、水は甚だ乏しく、頂上迄三里の間水の湧く所は僅かに一ヶ所、頂上から、琵琶湖を眼下に見下し、山頂、近江の峯々を双眸に収める風光は眞に自然のバノラマである。

登山は深更に上野を出で、上野で、日の出を拜む様にするのが、理想的方法である。日本武尊の故事を以て著名である。今も猶蛇は甚だ多い。伊吹神社、彌高山護國寺。松尾山護國寺等名所に富んでゐる。

【三上山】 東海道線野州驛の東南に聳えてゐる。田原藤太のムカテ退治で有名な山で、近江富士

と呼ばれてゐる。近江の國の歌枕鏡山の峰つゞきで、杉山、蛭蟻山とも云はれゐる。山頂は、雄山雌山の二峰に分れてゐる。

驛から山麓三上神社迄は車の便(三十錢)がある。神社から山頂迄二十八町、山頂からは、琵琶の全面を見渡すことが出来る。

三上から遊びにくるや時雨雲

柳 居

【比叡山】 「山は都の富士なれや」と云はれて、古來文藝地理の上に其名を唄はれた比叡山は山城國愛宕郡、近江國滋賀郡に跨り、山頂は海拔二千七百九十七尺、稗叡山、日枝山、天臺山、良岳、北嶺、大嶽、鷲ノ峰、都の富士、我立柚等の別稱を以ても呼ばれてゐる。桓武天皇が、僧最澄をして、延暦寺を建立して、王城鎮護の山とし給ひしより、佛教に於ける神聖なる靈地である。

登路は、可成に多い。

1、坂本口、



大津驛で下<sup>げ</sup>紺屋ヶ關<sup>せき</sup>から、渡船で坂本へゆき、延曆寺假本坊<sup>えんりきじかりほんぼう</sup>、讚佛堂<sup>さんぶつどう</sup>、日吉神社參詣<sup>ひよしんじやさんすい</sup>、五十二段坂等樂坂の嶮<sup>けん</sup>をへ、要ノ宿<sup>やど</sup>から、文珠樓に出で、東塔、西塔、横河の諸堂を參拜<sup>さんまい</sup>するのである。坂本から文珠樓迄二十五町。

坂本から根本中堂迄山駕籠往復 三圓五十錢(片道二圓五十錢)

三塔巡り往復 六圓(片道三圓)

横河迄 五圓五十錢(片道四圓)

四明ヶ岳 五圓(片道三圓五十錢)

## 2、無動寺口

京都の出町で電東をおり、白川村の東端から上る。十八町目で琵琶湖をみることも出来る。七曲り坂、辨天祠無動寺をへて、東塔に入る。

近來夏季山中に天幕生活を營むものがある。

比叡<sup>ひえい</sup>から峯ゴシ<sup>かみごし</sup>に八瀬<sup>やせ</sup>へ下るのは面白い。

地「一念三千の機を顯はして、

三千人の衆徒をおき、

圓融の法の曇りなき

月の夜川も見えたりや

さて又麓はさゞなみや

しが唐崎の一つ松

七社の神輿の御幸の梢なるべし 云々

(謠曲兼平)

谷口梨花氏云ふ

京都からの登路は白川越、雪母越、走出道の三つあるが、多くは皆白川越をする様だ、白川村の出外れから志賀山越道に岐れて、左に坂路一里を登ると七曲りにかゝる、坦々たる一路を琵琶湖を見渡しながら進むので心地が好い、辨天堂無動寺、明王堂を過て根本中堂に着く。開祖傳教大師の建立した止覽院で、「阿」多羅三藐三菩提の佛達我立柚に冥加あらせ給へ」とは大師の其時の御歌である。今の堂は徳川家光の再建で特別保護建造物、銅瓦葺丹塗で寂びたる極彩色が、如何にも森嚴な感じを與へる。

中堂の横手に辨慶茶屋があり、其南に大講堂、堂の傍に鐘樓、堂の西に戒壇院があり、三者共に特別保護に列して居る。

四明嶽は比叡の最高峯で眺望が雄大である。山頂には將門岩純友岩がある。二人が平安城を下瞰して異望を起した所である。夏期天幕生活をするには最よい處で、近年一種の流行となつた。



京都から登つた人は大津の方へ下るが好い、根本中堂から横川を経て豎田に出、湖上を船でつつ切つて大津へも出られるし、上阪本に下つて官幣大社の日吉神社及延暦寺本坊を見て、下阪本から汽船で大津へ出て好い。汽船は途中唐崎に停船して、唐崎の老松を眺めさせる。東西二百八十尺、南北三百三十尺、幹の太さ二十七尺、翠蓋地を蔽ふ數百坪、夜雨蕭々の景八景の一に數へられて居る。

### 京都附近の

【比良山】 近江第一の高峰で、海拔千七十七米、大津から六里山麓木戸村から登る、頂上迄二里、森林あり、奇岩あり、幽玄の趣きがある。山頂よりの眺望は絶可である。山頂より京都市方面へ下ること十二町に一小池あり。風致愛すべし。

初雪や四五里隔て、比良の岳  
都まで寒さぞ見ゆる峰越しの

比良のとほ山雪ふりにけり

去 來  
信 實

【東山】 京都の山水に千貫の重味を添えるものは東山である

東山とは、北如意ヶ岳に起り、南は稻荷三ヶ峰に至る三十六峰の總稱である。四時の風光宜しく、加茂川との配置宜しきを得て、優美の極致である。形は、「布團着て寝たる姿」でつきてゐる京都になくてならぬものは第一は東山だと云ふことが出来る。

【愛宕山】 比叡、鞍馬と共に京の三山と云はれてゐる愛宕は、西に聳えて叡山に相對し、三千四十三尺、上嵯峨より頂上迄一里半、京都から山麓迄自動車を利用することも出来る。山麓愛宕神社一ノ鳥居より頂上迄俗に五十町と云ふ。試みの坂、清瀧川、渡猿橋、九十九折をへて、山頂白雲山に達すれば、愛宕神社がしづまります。天慶年間僧慶俊の開山、本社は防火の神と云はれ。末社も澤山にある。九十九折の難道を過ぎる頃土器投げを試みるものが多い。これは昔からの習慣である。時雨櫻と云ふものもある。親鸞上人が、北國謫居の時兼實に別れを告げ、記念の爲めに植ゑたものでつて、今も猶四月の頃櫻から點々と雫がたれるさうである。これ時雨櫻と名づくる所以である。

溪山清閑、夏日の避暑には好適である。愛宕山東麓を三尾と云うて、清瀧の清流屈曲する處に



は、高雄、梅尾、槇尾の三尾が並んで都人士に四時の眺めを提供してくれる。高尾の神護寺、梅尾の高山寺、槇尾の西明寺、何れも幽邃の境、四季の探勝に適するが、就中秋の紅葉がよい。

【嵐山】 京都驛から、山陰線にのり嵯峨驛で下車し、名所舊蹟を探つて、天能寺門前から、嵐山の探勝に出かけるがよい。京都驛から、自動車で名所を見物して、嵐山へゆく人もある。山は大堰川の流れを隔て、對岸に峙つて春夏秋冬の眺めは天下に誇るに足るものである。特に櫻咲く頃と秋の紅葉がよい。川に棹さし、山下の温泉に浴するのも一興である。

田山氏云ふ。

京都から、嵐山電車を利用すれば、賃金は僅かに十一錢である。

嵐山は京都第一の名勝である。昔は紅葉の名所として知られ、醍醐天皇の御遊の時、紀貫之が書いた大井川行幸の記にも、専ら紅葉や秋晚の景を叙して、櫻には及んでない。後嵯峨天皇の龜山仙洞に在した時、吉野山の名種を移して、「春ごとに思ひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ」の御製があつた。紅葉の秋も好いが櫻の春も好い。松と楓の間から櫻がぬつと咲き出で、居る眺が好い。夫に嵐山其のものがたとひ櫻がなくとも紅葉がなくとも、好い容の山だ、高からず低からず碧緑の影を大堰川の清流に投げた姿が好い、渡月橋からの眺も好い、流を隔て、三軒茶屋の方から見た景色も好い、橋を渡つて流に沿うて

山の麓を歩いて、舟を雇うて流を溯ると一層好い、京の藝子や舞子を舟に乗せて、静かな三味の音を流せば、尙一層好いに相違ない。流に沈んで花が咲き亂る頃は、川も亦燃える様だ、日は暮れても流れは暮れぬ、舟は花の上を出で、又花の上を行く、ちらちらと一片二片の花片の顔に散りかゝるも嬉しい。渡月橋から麓に沿うて行くと上流二町、一條の溪流岩石を傳うて下る、これが戸難瀬、千鳥ヶ淵は其處から近く、横笛が瀧口入道を慕うて入水した址だと傳へて居る、尙一町ばかり行くと、芭蕉の「花の山二町登れば大悲閣の句碑が建つて居る、崎嶇たる石徑を二町程上ると大悲閣、大堰川を疏鑿して舟筏の通路を開いた角倉了以の建てた寺で手に石割の斧を持つて、石上に繩を巡らして座となし、片膝立て、思案する法體の了以の像が安置してある、麓に沿うて行くと嵐峽館と云ふ鑛泉宿がある。

橋手前を行くと老樹の下に小督塚がある、「峰の嵐か松風か尋ぬる人の琴の音か、仲國が駒を早めて、想夫憐の調を的に小督の在所を探つて、宣旨を傳へた嵯峨野の佗住居は、このあたりであつたらうか、今は大分變つた。三軒屋前を尙行くと、道の盡きんとする所に嵐山公園がある、「川に沿うてこの道行けばほととぎす」の立札のゆかしさに、川沿ひの小道を行つたら、又「開きたくばこの道辿ればほととぎす」の立札があつて、瀟洒な料理屋が流に枕して居た、場所柄だけにゆかしい廣告だと思つた。

公園は龜山を拓いたもので、松林を縫うて逍遙路を拓いてある、角倉了以の銅像が建つて居る。

【鞍馬山】 鞍馬山は、市北方の名岳、三條大橋から、山の中腹鞍馬寺迄約四里。人力車及び自



動車を通ずる事が出来る。下加茂か、上加茂何れかへ参詣し市原野を通つて、鞍馬寺迄、道は、平々坦々、風光は甚だ宜しきを以て、徒歩の方が趣きが深い。(市原野は鬼童丸にて名高き所である。又小野小町「あなめく」の舊蹟で小町寺がある)鞍馬寺は天台宗の名刹、平家一門の崇信の的であつた。寺境の内外に、鬼一法眼の塚、呑おろし、三國の土(日本、支那、天竺)にて造りし十王堂、涙の瀧、地藏堂、牛若丸の學問所たりし東光坊跡、関伽井、空也屋敷跡牛若丸劍道修業場、僧正谷等見る可きもの多々ある。又太郎坊の魔王堂がある。名物は「鞍馬の木の芽潰」で平安朝以來の名物である。山は、樹木蒼鬱として晝猶暗き感がある。(鞍馬山頂は千八百尺、寺より頂上迄十四町。貴舟山は二千尺。貴舟神社より十五町にして山頂に達する)僧正ヶ谷を下り一溪を横ぎれば、官幣中社貴舟神社である。貴舟の宮から十數町にして、鞍馬道へ出ることが出来る。

### 【音羽山】

京都驛より電車の便がある。圓山公園に遊び、萩の名所高臺寺(豊太閤薨去後、北政所は落飾して高臺院と稱し、太閤の冥福を祈らんが爲め、伽藍を建造した。これ高臺寺である)

を訪ひ、靈山招魂場の幕末志士の招魂碑に、其靈を弔ひ、靈山を降り、傳教大師開基靈鷲山正法寺に立寄り、梅林の南にある急坂をよづれば、清水門前に出る。(右に子安觀音塚がある)清水寺は、奈良興福寺の末、僧延鎮の開基、西國三十三番の札所の第十六番の靈場である。音羽山の半腹にある。眺望廣潤である、清水の眺望は、左の一文に依つて明かである。

五條坂を上つて行くと、やがて清水寺の前に出る。大きな建物が石段の上に仰ぐやうになつて見えてゐる。その階段を上ると、大きな山門がある。境内は廣い。崖に沿つたところに、茶屋などが出来てゐて、餅などを賣つてゐる。其處からも京都の西南の一部が一目に見渡される。東西本願寺の大伽藍が瓦葺の中に聳えてゐるさまは頗る人目を惹くに足りる。東寺の塔なども見える。

清水寺は奈良の興福寺に屬してゐる。法相宗の大寺である。今の堂は、寛永十年に徳川氏の造營したもので、今では、特別保護建造物の一つになつてゐる。やがて清水の舞臺だ。

京では清水の舞臺とすぐ言はれるところだが——親たちに小さい時分から聞かされてゐると



ころだが、来て見れば、何だ、こんなところかと思ふやうな所だ。眺望だとて、さう大してすぐれてゐない。唯、淺草の観音と言つたやうな意味でおもしろいだけである。これよりは奈良の二月堂の舞臺の方が餘程好い。眺望もすぐれてゐるし、感じもこんな俗悪なのは違つてゐる。それに、その向ふに音羽ノ瀧といふのがかゝつてゐるが、これなども瀧といふほどのものではない。唯、水がちよろ／＼と木立の間から落ちてゐるばかりである。

しかし、此間から山科の方に出でゆくところに、歌ノ中山清閑寺といふのがある。そこは、京都の多い寺の中でも静かな好い感じのするところで、秋の紅葉の頃などは何とも言はれないほど好い。遊客の是非行つて見るべきところである。

清水から大佛の方へ出て行くところに、鳥部野の墓地がある。墓が澤山並んで立つてゐる。一寸した入口を入つて行くと、奥にお俊傳兵衛の墓がある。参詣するものが多いと見えて、線香の煙がつねに絶えたことはない。それに願をかけると屹度効目があるとか何とか言つて、藝者などがよくお参りに來てゐる。

鳥部野と云へば、随分昔の本に出でゐるところである。何んな美しい人も鳥部野の煙になつて了へば……などよく云はれてゐる。(新選名勝地誌)

## 甲山と六甲山

【甲山】は西ノ宮驛の北に聳えてをる。形状甲に似たるを以て此名がある。外國人は、ビスマーク山と云ふてをる。全山輝石安山岩よりなる、驛より一里、上原より頂上迄半道、山中に役小角の草創と云はるゝ神呪寺がある。又九想瀧、大井瀧、乾瀧など小瀑がある。一遊の價値はあ

る。【六甲山】は攝津國武庫有馬二郡に跨る、武庫山、樅葉ヶ岳とも云はれ、海拔三千五十九尺。

むこ山や三國一とゆふ霞

今では、この山中に、住宅地が出来て、テニスコートや、ゴルフ場がある。住吉驛で下車して六甲をこえて、有馬温泉へゆくのは、いと趣味深い。



住吉から山頂迄二里（上り三時間下り二時間、住吉から有馬迄山駕籠六圓）  
山頂から有馬迄三十町（上り一時間下り四十分）

昔は、武庫山おろしは、茅渟の海（大阪灣）航海者にとつては恐るべきものであつた。

引田者洋氏云ふ。

海を抜くこと三千六百尺。山の都會と、東洋一のゴルフリングと、西日本唯一の水の舞踏場と、雪のヴェランダと、然して美しい水と、避暑地を有することに依つて此の地方の重寶兒となつて居る六甲山は、酒の都の灘五郷と共に阪神及都人士の大きな誇りであり、亦芳天醇下に鳴る灘の銘酒とは斷るに斷られぬ水魚の關係を有して居ることに於て、此の山に縁遠い關東の上戸黨も、相當の敬意を拂ふ義務があるであらうと思ひます。

神戸市のバックになつて居るあの目覺めるやうに美しい翠巒は、東に走つて延々六里の秀麗な連嶺を畫き北に落ちては有馬の温泉となり、東に盡きては寶塚温泉を産んで居ます。南面しては武庫の平野を脚下に、長汀曲浦を劃して茅渟の森漫を抱き、繞らされた此の天與の屏風は、行く雲を支へて以て呖りに海氣の逸出を防ぐ。其處に醸造上必須の要素たるオゾンを生ぜしめて居ます。然して此の山の心臓部を貫いて奔騰する清冽無比の醴泉は、一旦地底に滲透して酒の都に湧き上り、此處に所謂「灘の生一木」が發酵される譯で、もつと大業に言ふと、灘の銘酒は六甲山と稱ふ母胎から産み出されるもので、此の山の水質如何は直ちに取つて以つて銘酒の生命に關する力を有つて居るものとも言ひ得ない事はないでせう。お

つと灘の生一本に酔つ拂つて、頓でもない方面に啖呵を切つて了ひました。

青く淀んだ池の畔、そよりたつた奇巖の蔭、斷崖の上や、翠綠滴る鬱林などを巧に取込んだ雪防式純洋風の氣の利いた建物が約百戸ばかり、丸で繪畫のやうに美しく配置されて、誰でもちよつとは異國情緒を味はふやうな氣分に觸れます。堂々たる郵便局や、立派な巡查駐在所もあつて、通信機關や山の安寧秩序も整うて居ます。さうかと思ふと、茶店には大きなホールを設けて洋食でも、和洋酒、菓子、雜詰でもござれの準備もあり、山下の別荘にも贅澤過ぎる阪神俱樂部の大建築物は登山者の休憩や、一泊に開放され遊園木や金棒と運動器具に至るまで何一つとして不足のない設備が完整して居ます。「よくまあ此の高山の絶頂が、是れ程文化的發展を遂げたものだね」とは初登山者の何人も一度は屹度口にする驚嘆の聲であります。都計畫がどうの、美觀地區が斯うのと血眼になつて居る六大都市の連中に一所此の山上市街を視察させたい氣も起つて來ます。

廣さ二萬坪。其の規模の壯大と、設備の完全と、眺望の素敵によい事に於て、東洋一の稱あるゴルフリングは、何と言つても此の山の寶であらねばなりません。目を遮るものもない眞青な芝生は美しく刈り揃へられ、純白なゴルフ俱樂部の建物が又非常に感じのよい調和を見せて居ます。

もう一つ此の山の誇りがあります。夫れは絶頂市街地域の其處彼處に、々たる碧水を湛へた池を二十餘箇所も有して居る事でありませう。此の池水がどれほど山の街に美觀を添へて居るかも知れませぬ。夏になると山の子供達や避暑客が、此處に舟を浮べたり、水泳を試みたりして賑ひます。山月影蒼く水を浸す夜半、扁舟に酒を戴せて掉す時何だか太古のやうな一種森巖な詩的情想が湧いて來ずには居られませぬ。



冬期に入ると、山は全く雪と氷の世界と化します。分けてもゴルフリング附近は雪の最も深い事を以て知られ、三萬餘坪のなだらかな純白のスロープは、伊吹と共に關西に於ける二大スキー競技場として普く知られて居ます。

其の頃になると、二十餘箇所の池表も一齊に銀板を漲り詰めたやうに氷結し、西日本に於ける唯一のスケーティング場となるので、地方民は「水晶の舞臺」と稱へて居ます。

### 神戸附近の山々

【摩耶山】 三ノ宮驛の東北一里二十町、電車の便がある。六甲の連嶺で、海拔二千二百九十尺布引瀧から、十八町登ると、天上寺がある。摩耶天人を祀つてある。こゝから、百二十米ばかり登ると山頂である。山頂からの風光は雄大である。

【再度山】 神戸市宇野治町から登ること十八町にして頂上に達する(諏訪山公園の背後に當る)海拔千五百三十五尺、山頂に古刹大龍寺がある。延暦年間弘法大師入唐の時、初めて當山に登つて求法を祈り、歸朝の時再び登山したので、「再度山」の名が起つたのである。頂上の風光は、壯

大である。

【箕面山】 福知山線池田驛の東一里半、(大阪市より電車の便がある)海拔千六百五十三尺、役小角草創の瀧安寺がある。當寺の辨天は、役の小角が靈木を刻んだもので、竹生島、江ノ島、嚴島と共に、日本四辨天の一である。寺から十七町にして、高さ十一丈幅三間の箕面の瀧がある。頂上へは、寺から約三十町あまりある。明治三十一年以來、寺から瀧へかけては公園となつた。便利はよくなつてゐるが、俗化して、昔のやうに幽玄の味ひはない。夏の納涼、秋の紅葉の頃は俗客が雲集する。

一山をへだて、秦野村に石澄の瀧がある。一見の價値はある。

【妙見山】 海拔二千二百尺、山頂に妙見祠があり、近畿人士の信仰頗る厚いので、參詣者は頗る多い。大阪から電車の便がある。

### 伊豆七島の山



【三原山】伊豆の大島にある。大島は、東京の南方七十海里。島は南北四里、東西二里、周圍十里餘、東京の靈岸島を晚の八時(每一、三、五、八の日)に出帆すれば、翌朝六時半頃大島の元村へつく。元村、野増村から波浮港へつくのは、晝頃になる。(汽船賃並等二圓七十九錢、中等四圓二十七錢)伊豆の伊東からも隔日に便船がある。

大島の嶋と云ふ字は山傍に鳥よ

鳥は飛んでも山のこる

と唄はれる山は、三原山で、島人は御神火様と云ふてをる、三原が四方に曳いた裾に人が住んでゐるのだ。夏は涼しく、冬暖いが、風の強いのが缺點である。

三原山は、活火山で、島の中央に聳えてゐる。山頂に噴火口がある。東西五十間、南北百間半腹以上に焼石累々としてゐる。平常霧が多い。

【宮塚山】利島、東京から僅か十三時間で達する、波浮港から海上一時間半で達するのだが、汽船は月三回しか航海しないから、往くには不便である。風俗は大島に比すれば一層古代的となる。

る。

山は島の中央、直立千八百尺、頂上まで一里半、山頂の風光は雄大である。遙かに伊豆の連山三國一の芙蓉峰を仰ぎ見ることが出来る。

【宮津河山】新島から汽船で一時間半、山は海拔千五百尺、島の北方にある。若郷村より頂上迄二里強、東京人士のゆくもの極めて稀である。

【天上山】神津島 山は、直立二千尺、島の中央に巍然として聳えてゐる。天井山、天城山、白妙山とも云はれてゐる。頂上に噴火口がある天氣晴朗の日には、八丈島、安房の半島を見ることが出来る。頂上迄一里半。

【雄山】三宅島の中央にある、古來屢々噴火したことがある。山頂は、砂礫にして、草木絶無なれど、山の周圍には密林がある。しばく噴火せしを以て噴火口は、頂上及び中腹に於いて二三之を發見する。麓は牧場地で牛が放つてある。野生の桑の樹の大木がある。海拔二千八百尺頂上迄二里七町。



【西山】 八丈島へは、東京から月五回の交通がある午後一時に出帆すると翌日の午後一時には「鳥も通はぬ」と唄はるゝ八丈島へつく。山は、甕峰とも香爐山とも八丈島富士とも云はれ、島の北西方にある。海拔二千九百尺、三根より頂上迄二里半。

頂上には噴火口がある。周圍十五六町は充分にある。(正確に測つて見なかつたが)坑底には水が貯つてゐる。坑底に徑百間許りの、小坑がある。深さは、ドノ位あるか、分らない。八丈島は氣候温暖なので、近來肺病患者が療養にゆくが、結果は、良好でないと云ふことである。注意迄にしろしておく。けれ共、生活をしてゆくには、八丈はごくいい所である。

## 富士登山

三國一の富士山は、内地第一の高山で、海拔三千七百七十八米、東海の天に聳え立つ雄姿は、我が日本の誇りである。

ふじのれを高めかしこみ天雲の

いゆきはばかりたなびくものを

の歌に依つて、富士の高さは十分に云ひつくされてをる。

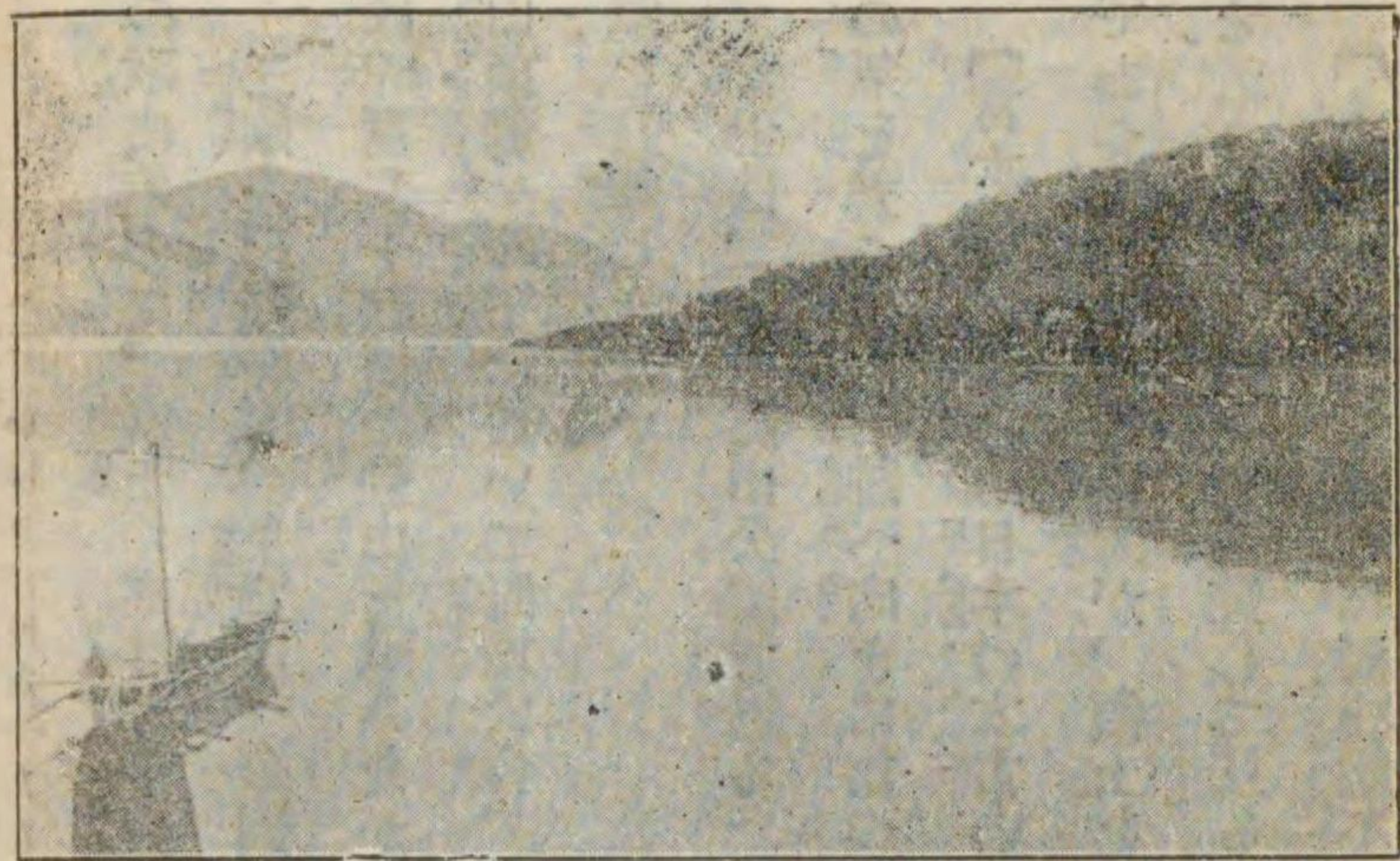
三國一の靈峰も、今では、公園化して、何らの危険なしに登ることが出来るやうになつた。余は昨夏二十五回の登山を試みたが、年々山の俗化するを見て、云ひしらぬ不愉快を感じた。余は山頂劔ヶ峰下に於いて野球大會、劔ヶ峯で、謡曲大會を催うせしこと九回。いさゝか、青年の士氣を鼓舞しえた。

富士は、今や高山公園である。高山學校の幼稚園である。男も女も、子供も登つて、以て浩然の氣を養ふには、誂へ向きになつた。

【富士山の歴史】 日本の太古の人は、富士山を知らなかつた、唯先住民が之を知つてゐただけであつた。我々の祖先が、領土を擴張するに及んで富岳あるを知るに至つたのである、今、富士と云ふ名稱の起原を研究して見ると様々の説がある。

【イ】富士は竹取物語に赫夜姫不死の藥を此山に取りて帝へ奉りしより不死の山と名付しと云ふ





箱根蘆の湖の倒富士

が如きは、牽強にして論ずるに足らずである。  
【ロ】富士と云ふ字義は、覆の山と云ふ事であるとの説もある。

【ハ】郷名同唱考に

信濃國伊那郡福智郷、甲斐國都留郡福地郷、駿河國富士郡フジチいづれも同義ときこゆ、皆ホグシの訛言ならん、富士を常陸風土記に福慈岳ともあり、秀て奇重なる山もて秀奇歟、または火のもゆる山なるが故に、「火靈異の義歟」とあつて、「秀奇」起原の説である。

此の他、種々と説はあるが、賛成しかねる。中には、噴火山を意味する「吹息」から出たと云ふ説もある、又

アイヌ言語風俗考に

フジはアイヌ語ピツチ小石の義と云へれどパツチエラー氏は富知は今日樺太に用ゐるアイヌ言葉の火の意なり。此山昔は噴火しければ、フチと云へるならん

とある、私は此の説に賛成する北海道アイヌは火を「アベ」と云ふけれど樺太アイヌは火の事を「フジ」と云ひ、老女、祖母、火の女神を意味して居る太古アイヌ人種が東國に占居して居た頃富岳の噴烟を見て、崇高の念にかられ、「火の女神」と云ふ意味のフジと云ふ語を用ゐたのであらう、是を我が祖先が傳へ聞いて、フジに種々の字を當てはめた者と思はれる、彼の赫夜姫云々の事は、勿論牽強な傳説に過ぎない。

東夷の勢力稍々衰ふるや、富士郡一帶は吾田の君の殖民地であつたらしい。伊豆の三島社は大山祇を祀り、駿甲の淺間社には木花咲耶姫を合祀して居る木花咲耶姫は吾田鹿韋津比賣とも云はれ、大山津見の神の女である、天孫瓊々杵命の妃となつた、吾田國は神代紀に吾田長屋笠狭之崎とあり吾田は今の薩摩阿多郡で笠狭は今の川邊郡加世郷で長屋も同所であるから、吾田國は今の



阿多加世田の邊であらう、吾田國の木花咲耶姫と瓊々杵尊との結婚以來、吾田國の東國殖民は行はれたものと見える。伊豆の三島神社(加茂郡)攝津の三島神社(島上郡)伊豫の三島神社(越知郡)は皆大山祇を祭る大社で、吾田國の殖民地と見て差しつかえない。特に甲斐駿河の淺間社は、木花咲耶姫を祀つて居る、依つて推するに、富士郡、廣義に解すれば甲斐駿河の富士山麓には、吾田國の殖民地があつたと解される、久米博士の説に依れば瓊々杵尊の高千穂降臨は漢武帝の元朔元狩の頃、西曆紀元前一二五——一二七頃である。吾田國の駿河殖民も西曆前一二世紀の頃であらう。大山祇は吾田地方の君長で、大山祇の家は諸冊二尊が大八洲巡幸の後に定め給ひし海川山本草土火諸神の一で、山津を監して居た、當時吾田の山津見と筑紫の渡津見とは外國交通の津を管轄し筑紫よりは使を漢に差派し、吾田國は閩地と交通貿易をなした。兎に角く吾田は筑紫の大國で、我が皇室と戚里の關係を結んで以來各地の開拓に従事したものであると思はれる。久米博士は「山祇の族が東國に領土を開きたるは、皇室の戚里となりたる後の事と思はるれど伊豆港を占有して著手をなしたるは早き時代よりの事ならん」

と云はれたが、私は、皇室と戚里の關係を結んで以來の事と考へる、依つて廣義に解すると、「大山祇の族の殖民は伊豆の要港に據りて甲斐の山原と駿河の平原とを開拓した」となる。而して吾田國は隼人を征服して部民に用ゐたから、駿河には隼人種族が國造縣主となつた、縣邑があつたであらう。又熊襲と隼人との關係に就いては、種々の説があるけれど、私は沼田頼輔氏の熊襲と隼人と同種族であると云ふ説に兩手を擧げて賛成する、依つて富士山麓には吾田族の支配のもとに熊襲族も住居して、開拓に従事した者と考へられる。景行天皇の朝、日本武尊の東夷征伐の頃には、吾田國族の開拓事業は、大いに進歩し、加ふるに熊襲族も、増加した事と思はれる、日本武尊が、焼津(益津)での奇難は吾田國族の支配のもとにあつた熊襲族が本國と陰謀を通じ川上梟師の復讐に出でた者と思はれる、又一方日本武尊の軍に於いては、諸將共、吾田の支配地であると云ふので、心を弛め、此難に逢ひ給ふたものと、考へられる。この時代に、人々が富士に登山したか、否かは不詳であるが、恐らく「恐ろしい山」とのみ考へて、登山しなかつたものであらふ。又富士と云ふ郡名に就いては、都良香の富士山記に「山名取郡名也」とあ



るが、私は賛成出来ぬ。富士と云ふ郡名は、フジと云ふ山名から取つた名前である、私のアイヌ語原説から云へば、是非、「郡名は山名より取る」と云はねばならぬ。

又、孝安天皇の九十二年六月に、富士山が湧き出でたと云ふ俗説もあるが、是は中世編録の諸年代記に見え、又雑史にも見えるが、信用厚き古書には見えぬ。

奈良朝頃から、歌人の詠にのぼつて居る、然し矢張り、殆んど登山はなかつた者と思はれる。

貞観六年の噴火を三代實録に

「貞観六年富士郡淺間大神、大山霧火、其勢甚熾、彼邦言上、決之著龜、云淺間明神禰宜祝等

不勤齊敬之所致也」とあり、淺間明神の御怒りと解して居る。且つ「仰而見之、正中最頂飾

造社」

とあるに依り山頂に石垣石門石閣を造つたかとも思はれる。當時、一般の人は登山せず、唯作侶修験者等が、稀れに登る位であつた、昔の登山の困難は、今日の登山と比較にならぬ、今日でこそ設備が完成したから、「高山學校の幼稚園」と女、子供に迄、馬鹿にされて居るが、奈良、平安

朝の頃に、修験者の登山する時の苦しさは一通りではない、今日、設備の皆無な鳴澤、青木ヶ原人穴、當りから登るよりも猶苦しいのだ。

修験者で登山の例を開いたのは役小角である、小角は文武天皇の御宇の人、大和葛城郡茅原村の人で年三十二にして葛城山の巖窟に住し、呪術を善くした、妖妄衆を惑はすと云ふので、伊豆島に流されたと云はれる、役小角が富士修行の事は傳へのみであるが、伊豆遠島をゆるされてから登つたものであらう。小御嶽の頂きから屏風岩の西を登り八合に出て頂上に登つたと云ひ傳へて居る。兎に角、富士行者の祖である。此頃は行者の他は登山しなかつたものである、續いて久安年中に僧末代が登山して大日如來を今の奥宮に安置して、貴賤の渴仰を得てから、山は全く佛家の占領に歸してしまつた、山中に佛教と關係の多い、名の多く残つて居るのを見てもわかる。彼の八峯は蓮華の八葉に比し、かつ八峯の名前も釋迦嶽、藥師嶽、觀音ヶ嶽、經嶽等と佛名と關係がある、又火口を内院と云ふも、「三十三天の兜率内院」から出て居る。是らは皆、富士山が佛家に占有せられた一證である、甲斐叢記の著者は



「富士山は今も山中に多く佛像を祭りあれば、中古には悉皆佛家の有にてありき、故に頂上なる空坎を兜率の内院に比べ其周囲の八の峰を蓮華に譬へて、各佛名を配當し此山に登る艱苦を、人間世の生死流轉に喩へ、大小の劫數にかぞへたり」と云ふて居るが卓見だ。都良香記には「小角登山」と云ひ、林羅山記には「空海圓珍の岩石を刻みて、佛軀を彫れる者山上にありとあるが、末代(富士上人)以前の登山修法の僧侶の名は不詳である。

兎に角、末代法師後、登山修験者の増加した事は慥かである、要するに、役行者(役小角)の餘黨が、早くから、富士山を開いて練行修法場とした。而して早くからして南北二道があつた。それは長久二年(約八六〇年前)の銘文ある金口が北口五合目から掘り出されたのを見てもわかる、末代が頂上大日堂を建てたのは、富士登山史上第二期を劃すべきである。是れ以後富士大日の信仰が起り、天文天正の頃に至つた、之れに續いて、近世の富士講が起るのである、富士講の開祖は通例藤原角行と云はれて居る。

角行は天文十年に長崎に生まれ、永祿元年に水戸に移つた。彼れ大いに決する所あり、鹿島の荒海で百日、淨身の行を修め、神宣に依つて此年五月に始めて登岳した。時に雪尙ほ深く、頂に行けず中道を巡り三週間の行を修め六月一日に頂上し人穴に下つた。これより八海で百日行、人穴で二千日立行を行ひ、滿行の日に淺間大神から天地和合大息の御傳を蒙つて、角行東覺と山ふ名を賜はつたと云ふ、其後角行は殆んど全國を修行し、修行日凡二萬日、富士登山百二十八回、御中道三十三度遂ひに正保三年六月三日、百六歳で人穴で遷化したと、富士講の人は信じて居る。曾て老中安藤對馬守へ召し出されて「不二の行人とは神か佛かと、問はれた、角行答て曰く「我は兩親と五穀を大切にし、富士淺間大菩薩を明暮怠らず信心するより外なし」と、御老中も詮術なく「神妙に信心せよ」と云ひ渡して赦免なされたとは富士講徒の、誇る所であつて公事卷として富士講徒の尊崇する記録である。然し乍ら、研究して見ると、「角行」は富士講の祖師と云ふ可らずである、嘉永二年寺社奉行所請文に

「其祖と尊信致候、書行藤佛竝に右教を傳來致候、食行身祿と申者、神道佛道にも無之、自己の



存附を以て種々異様の儀申唱」とあり又行者略傳に

「書行は元和六年人穴に參籠し仙元明神の教へ給ふ異字を用ふと云ふ」とある是らに依つて角行の地位が、危うくなる、吉田博士は、斷案を下して曰く

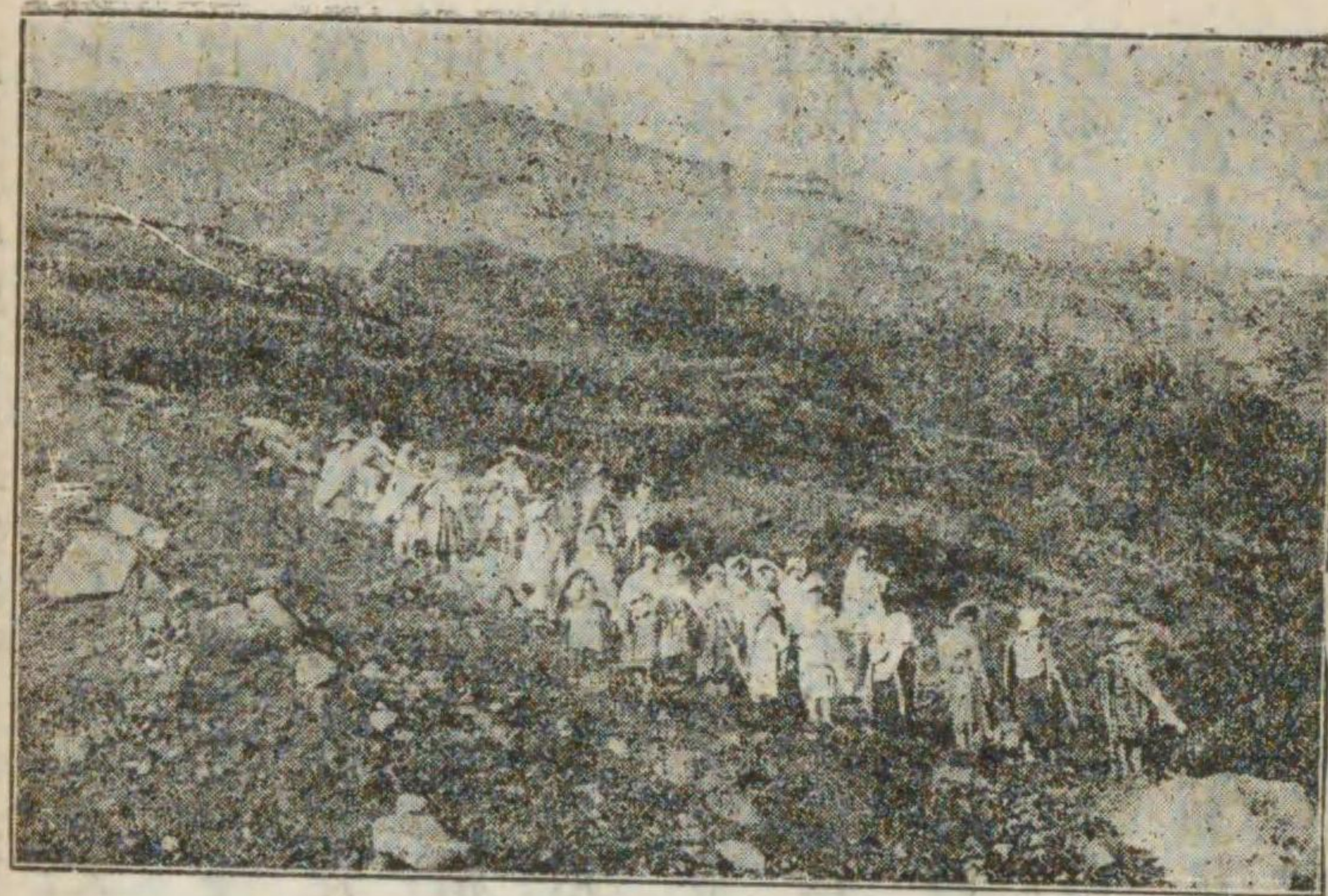
「然れ共懸鏡の銘に「元和六年庚申四月仙宮卍書行」とありて異字はなく、二代目角行の遺書こそ謂ゆる異字とす。其書中に明白に「書行藤佛、御法會、會師、天文第七」又卍角行、次術會師」

また「三代目術」ともあるにて、正保六年入定の角行は三代にして、祖師にあらずと知らる」と抑ち世俗の所謂藤原角行は富士講の開祖とは云へぬ吉田博士の説に依れば三代目との事であるが、今更ら富士講に於いて訂正するの必要はない、事實上角行が、開祖でないにしろ、「開祖は角行也」と長年富士講の人々が云ひ傳へて居るのだからさしつかへない、それと共に角行が尋常一様の行者でなかつた事も信じて宜しい、今、富士講の人々が御厄と稱して、御中道を廻つたり、又嶽麓八湖を廻る御八海修行なども、角行の寸法に眞似たのである、富士講にも澤山派が出来た

が、月心竝に村上光清と、月行竝に食行との二派を、主なるものとする、この嶽教の人々は各々講を結んで登山をして居る、元來舊幕時代に行はれた、お伊勢まわり富士まわり、金比羅詣りは、不知不言の間に地理的觀念を、おこさせるもので、甚だ面白い。關東の人は、盛んに、三峯詣り、大山詣り、道了詣りをした、特に大山道了を経て富士に登る事は盛んに行はれた、是らの目的は「お詣り」と云ふ一種の信仰であつたが、結果は不言の間に地理的觀念を養成して居た。享保頃に至つて月心流の村上光清は大宮本社修造の功をなした、又食合派の食行身祿は寛文十一年に勢州に生まれ、行者となり角行真人の遺傳を相承し、世の爲め益する處頗る多かつたが、享保十八年六月十三日に、北口烏帽子岩で三十一日間斷食して入定した、食行身祿の頃に至つて講社は盛大を極めた、食行身祿の斷食入定は、いたく講徒の尊信を受け、富士講は時めく許りである。

【富士の地理】 富士は、理想に近い成層火山であつて、休火山に屬する。有史以來折々噴火した歴史の詳細は「日本異災史」を見れば、詳しく分る。





吉田口五合目天境地

富士と浅間の噴煙は古人が一偉觀とした所のものである。「此山が孝安帝の御世一夜にして、出来上つた」との傳説は、この山の起滅無常たゞならざるを物語るものである。數々噴火をくり返した中にも。

一、延暦の新山（小富士の噴出）

二、貞觀の埋海（割の海を中斷して精進の湖を分けたる天變である）

三、寶永の新山（寶永山噴火）

を富士の三大變と稱へてゐる。噴火口は山嶺にあつて、内院と云はれてゐる。周圍一里、火口の周圍は、火口壁である。火口壁中傑出してゐるのは。

駒ヶ岳、三島ヶ岳、劍ヶ峯、白山ヶ岳、久須志ヶ岳、大日ヶ岳、伊豆ヶ岳、成就ヶ岳、

の八峯である。寄生火山として著名なのは、新山（小富士）寶永山である。又麓をめぐつて、側火山の數は、丸山、片蓋山、小倉山等三十數個に及ぶのである。山頂八月中の氣候は、平均温度攝氏五・九度で、沼津の平均温度より低きこと一九・五である。けれ共、天晴れて風なきときは、小春日和のやうである。風力の強き事は驚く許りで、一日に一回は必ず十米突以上の風が吹く。山の傾斜は、麓は緩く、頂上に近づくに隨つて急である。麓では五度乃至十度、八合目以上の難所でさへ、三十度乃至三十五度である。富士山の周圍は大約四十里、

東西三十キロメートル

南北四十五キロメートル

頂上からは、五十六里四方が見える。即ち見界は十三州に及ぶ。伊豆の八丈島でも百四十七尺登れば、富士の山頂が見えるわけである。

【富士の植物】富士は、割合に植物の種類は少ないけれ共山の上下に於ける植物帯分布の状態が極めて順序よく明瞭に見られるからして、この點に於いては初學者にとつては理想の山といは



ねばならぬ。元來我が日本の水平的森林帯は。

琉球の中央より南 熱帯林 (タコノキ、バナ、パインアップル、椰子樹)

琉球の中央から東京附近迄 暖帯林 (カシ、樺の如き常緑の潤葉樹の森林)

宇都宮から北海道の中央迄 温帯林 (ブナ、其他落葉の潤葉樹の森林)

北海道中央から樺太へかけて 寒帯林 (エゾ松、トド松の森林)

である。高山の特徴は、段々と登りゆく中に各所の森林帯を目撃する點にある。(垂直的森林帯)

富士山の森林帯は、大體に於いて、

麓より千六百尺位迄

暖帯林

自千六百尺至五千六百尺

温帯林

自五千六百尺至九千二百尺

寒帯森

富士は古くは麓から千六百尺位までは樅、椎、山茶花、柿といったやうな常緑潤葉樹の森林を以つて覆はれてゐた。今日では千六百尺以下の暖帯林の部分は(1)濫伐と(2)野火の爲め破壊せられて全くの原野となつてしまつた。しかも温帯林すら破壊せられて三千四百尺の所(一合

目邊り)から温帯林になつてゐるが、之れは原型ではないのである。今日一合目邊で見えるブナ帯の森林は、昔はブナ帯森林の中央になつてゐたのである。二合目と、三合目の間へ行くと針葉樹の森林となり、四合目の下(七千九百尺)迄及んでゐる。其上は地汙りや山崩れの爲め、寒帯林の面影を僅かにうかがひ得るのみである。登山五口の中、須山、御殿場の二口は、寶永の噴火の爲め森林帯が破壊せられたので、植物研究者にとつては、感心の出來ない口である。植物の豊富なのは、

吉田、大宮、須走

の三口である。

## 登山口の優劣

登山口は、全體で五つある。

1、南表口(大宮口) 東海道線富士驛にて下車、輕便鐵道に乗り大宮に至る



- 2、南口(須山口) 東海道御殿場驛、又は裾野驛下車。
- 3、東表口(中畑口) 東海道線御殿場驛下車。
- 4、東口(須走口) 東海道線御殿場下車、自動車又は馬車にて須走に至る  
以上駿河
- 5、北口(吉田口) 中央線大月驛下車、吉田迄馬車、電車の便あり。  
以上甲斐

の五つである。この中須山と中畑口(御殿場口)とは三合目で一所になるし吉田口と須走口とは八合目で一所になるのであるからして、頂上へゆけば結局

- 吉田須走道
- 御殿場口
- 大宮口

の三つとなるのである。

- 吉田口―頂上迄 四里二十三町十間
- 須走口―同 五里六町二十五間
- 須山口―同 七 里
- 御殿場口―同 五里六町二十五間
- 大宮口―同 五里二十八町四十五間

五道は五道乍ら大なる特徴をもつてゐるのである。

【登山の時期と支度】 登山の時期は、七月、八月の兩月が一番宜しい御殿場口は七月一日、大宮口は七月七日、須走口は七月十日、吉田口は七月十五日に山を開き、八月一杯は登山時期で、此間に登山するをよしとする。私が、前後二十五回登山した経験からゆけば、七月十八、九日から三十日迄の間が一番いゝやうである。随つてこの時期は山中は大雑沓を來たす。けれ共高山らしい静かな、幽玄な氣分を味はふとするには、八月十日過ぎ、所謂秋山の頃がよいのである。秋山の頃になると、登山者は十分の一以下に減するからして、静かな心持ちになれる。



今では、登山路の設備が完全し、大抵の石室には、普通の日用品は備へつけてあるからして、大げさな支度は絶対にいらぬ。是非共支度してゆかねばならぬものは。

シャツ、(オーヴァースエーターなら一枚で結構)

「山麓の旅館を出るときドテラを借りて、強力に持たしてゆくことは必要である」

草鞋とキヤハン、(草鞋五足、女子は麻裏草履を三足下駄でも困難を感じません。)

蓑座と編笠、金剛杖、(麓で賣つて居ります。)

其他、水筒、地圖、手袋、煙草位を用意すれば充分である。これらの携帶品は雜囊へ入れ、ばよい。大抵の荷物は、強力が持つてくれる。

壯年者には、道を迷ふ心配が皆無であるからして、強力を雇ふ必要はない。婦人登山者は髪を引詰めるか櫛巻に結髪する事を忘れてはならぬ。丸髻束髪は烈風の爲めに往々吹き崩される虞れがある。普通の人は編笠を被るが之れは烈風のと看は何のやくにもたぬ鳥打帽があれば夫れで充分である。

【山中の物價】 今年の物價は、マダ決定を見ないが、大略昨年の物價と大差がないやうであ

る。

大宮町公定物價表

壹等旅館

一等 參圓

二等 貳圓五拾錢

三等 貳圓

晝食料

一等 貳圓

二等 壹圓五拾錢

三等 壹圓

貳等旅館

一等 貳圓五拾錢

二等 貳圓

三等 壹圓五拾錢

晝食料

一等 壹圓五拾錢

貳等 壹圓

三等 七拾錢

但し半泊料は七分申受く

金剛杖 壹本

上金參拾錢

並金廿五錢

其他登山用携帶品は一切支度が出来る。

強力賃

金五圓

頂上より下山口迄



他の口へ下山の時は壹日壹圓

外汽車賃其他實費申受らる、荷物は四貫目を規定とし、五百勿を増す毎に金二十錢を申受く。

但し宿泊料及晝飯料は客賄ひ風雨其他都合にて滞在する時は客賄ひの事

山中休泊所

表口に於ける山中休泊所一合目より九合目に悉く組合組織にして休泊料は切符を以て賄ひをなす

一宿泊券 壹圓八拾錢

一半泊券 壹圓參拾五錢

一木賃券 七拾五錢

一晝食券 六拾五錢

一休憩料 一ヶ所金七錢

十二ヶ所分金五拾錢

乘馬賃

壹合目 貳圓七拾錢

貳合目 參圓八拾錢

參合目 四圓五拾錢

五合目 六圓  
六合目 七圓  
雨天及午後二時より二割増の事

以上は、大宮口であるが、之を標準として案を立てればよい。各口とも之れと大差はないのである。

【登山心得】(1)登山には急ぐことが禁物である。急がずに氣を落ちつけて一足一足と登らねばならぬ。ツマリ能狂言式に「ソロリ、ソロリとまゐらふ」と云ふやり方でなければならぬ。休憩は出来る丈短かくして、牛が歩くやうにユツクリと登ることを忘れてはならぬ。

(2)七合目迄は踵を比較的に使ひ、爪先を休める様にし、七合目からは爪先を比較的多く使ふ様にすること。

(3)息が切れて呼吸が切迫する様な場合には、一寸立ちどまつて、深呼吸を二三回することが肝要である。